

食品の安全性に関する小学生向けの啓発素材に関する調査 調査報告書

平成22年3月

株式会社 放送映画製作所

目 次

◇ 本調査の概要	6
----------------	---

◇ 意見聴取	7
--------------	---

◇ 調査

リスク評価の考え方に関する意識を把握するための調査

過去5年間に食品安全委員会が行ったリスクコミュニケーションに関する調査報告書及び本事業に関連すると思われる他機関の調査結果

① 過去5年間に食品安全委員会が行ったリスクコミュニケーションに関する調査	10
---	----

食品の安全性に係るリスクコミュニケーションに関する調査報告書(平成17年3月)

食品の安全性に係るリスクコミュニケーションに関する調査報告書(平成18年3月)

食品の安全性に係るリスクコミュニケーションに関する調査報告書(平成19年3月)

地域における食品のリスクコミュニケーションに関する調査(平成20年3月)

リスクコミュニケーションの評価手法等に関する調査(平成20年3月)

リスク認知の形成要因等に関する調査(平成21年1月)

食品の安全性の啓発に関する調査(平成21年1月)

内閣府経済社会総合研究所委託調査 経済教育に関する研究調査(平成18年3月)

文部科学省委嘱事業教科書の改善・充実に関する調査研究『国語』(平成20年3月)

② 学童向けの動画啓発資料についての調査	18
----------------------------	----

気になる食品の安全性

気になる食品添加物

気になる農薬 ～安心して食べられる～

遺伝子組換え食品って何だろう? ～その仕組みと安全性～

小学校高学年向け:家庭科・総合的な学習の時間向け映像教材

◇ 啓発効果等の検証

I. 総 括

1. 調 査 概 要	21
2. 調査結果の要約	24

II. アンケート集計結果のまとめ

※各設問のアルファベット「A」「B」について …… A：啓発DVD視聴前 B：啓発DVD視聴後

1. 児 童 の 意 識 調 査	26
A-1. ふだんから自分が食べる食品については	26
A-2. 食品添加物という言葉聞いた事がありますか	27
A-3. 「聞いた事がある」と答えた人に聞きます⇒食品添加物のイメージは？	28
A-4. 農薬という言葉聞いた事がありますか？	29
A-5. 「聞いた事がある」と答えた人に聞きます⇒農薬のイメージは？	30
A-6. いつも食べている食品には、農薬や食品添加物が どのくらい入って(残って)いると思いますか	31
A-7. 農薬や食品添加物は、食品を食べるたびにどんどん体の中にたまっていく	32
A-8. いつも食べている食品に入って(残って)いる食品添加物や農薬について	33
A-9. 体に必要なものでも(例えば水でも)取りすぎたら死んでしまうこともある	34
A-10. 毒物でもごく少しなら害にならないことがある	35
A-11. 食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて、 食品に入っている量を決めている	36
A-12. 食の安全性について知りたいこと・心配なことがあれば書いてください	37
B-1. 食品添加物のイメージは？	39
B-2. 農 薬 の イ メ ー ジ は ？	40
B-3. いつも食べている食品には、 農薬や食品添加物がどのくらい入って(残って)いると思いますか	41
B-4. 農薬や食品添加物は、食品を食べるたびにどんどん体の中にたまっていく	42
B-5. いつも食べている食品に入って(残って)いる食品添加物や農薬について	43
B-6. 体に必要なものでも(例えば水でも)取りすぎたら死んでしまうこともある	44
B-7. 毒物でもごく少しなら害にならないことがある	45
B-8. 食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて 食品に入っている量を決めている	46
B-9. 食品添加物や農薬の安全性をみるとき 「毎日一生食べ続けても安全な量(ADI)」の考え方が大切である	47
B-10. 食品安全委員会の主な役割について	48
B-11. 今回の教材で楽しく学べたのはどのようなところですか？	49
B-12. アニメを見た感想を書いてください	50

CROSS-1.	◇ A-3・B-1比較 食品添加物のイメージについて 視聴前後の変化 ◇ A-1×A-3・A-1×B-1比較 食品安全を普段から気にしている児童・気にしていない児童 別 食品添加物のイメージについての視聴前後の変化	52
CROSS-2.	◇ A-5・B-2比較 農薬のイメージについて 視聴前後の変化 ◇ A-1×A-5・A-1×B-2比較 食品安全を普段から気にしている児童・気にしていない児童 別 農薬のイメージについての視聴前後の変化	53
CROSS-3.	◇ A-6・B-3比較 いつも食べている食品には、農薬や食品添加物が どのくらい入って(残って)いると思いますか？ 視聴前後の変化 ◇ A-1×A-6・A-1×B-3比較 食品安全を普段から気にしている児童・気にしていない児童 別 いつも食べている食品には、農薬や食品添加物が どのくらい入って(残って)いると思うかの視聴前後の変化	54
CROSS-4.	◇ A-7・B-4比較 農薬や食品添加物は、食品を食べるたびに どンドン体の中にたまっていく 視聴前後の変化 ◇ A-1×A-7・A-1×B-4比較 食品安全を普段から気にしている児童・気にしていない児童 別 農薬や食品添加物は、食品を食べるたびに どンドン体の中にたまっていくと思うかの視聴前後の変化	55
CROSS-5.	◇ A-8・B-5比較 いつも食べている食品に入って(残って)いる 食品添加物や農薬について 視聴前後の変化 ◇ A-1×A-8・A-1×B-5比較 食品安全を普段から気にしている児童・気にしていない児童 別 いつも食べている食品に入って(残って)いる 食品添加物や農薬についての視聴前後の変化	56
CROSS-6.	◇ A-9・B-6比較 体に必要なものでも(例えば水でも) 取りすぎたら死んでしまうこともある 視聴前後の変化 ◇ A-1×A-9・A-1×B-6比較 食品安全を普段から気にしている児童・気にしていない児童 別 体に必要なものでも(例えば水でも) 取りすぎたら死んでしまうこともある 視聴前後の変化	57
CROSS-7.	◇ A-10・B-7比較 毒物でもごく少しなら害にならないことがある 視聴前後の変化 ◇ A-1×A-9・A-1×B-6比較 食品安全を普段から気にしている児童・気にしていない児童 別 毒物でもごく少しなら害にならないことがあるの視聴前後の変化	58
CROSS-8.	◇ A-11・B-8比較 食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて、 食品に入っても大丈夫な量を決めている 視聴前後の変化 ◇ A-1×A-9・A-1×B-6比較 食品安全を普段から気にしている児童・気にしていない児童 別 食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて、 食品に入っても大丈夫な量を決めているの視聴前後の変化	59

2. 教師の意識調査	60
A-1. 食品の安全性について教えるための時間が十分に取れていると思いますか？	60
A-2. 児童は食品の安全性に関する正しい知識を持っていると思いますか？	61
A-3. 食品の安全性に関する最新の情報を取り入れるようにしていますか？	62
A-4. 食品の安全に関することで、児童にもっとも教えたいことは何ですか？	63
A-5. 補助教材として使いやすいのはどのようなものですか？	64
A-6. 食品添加物を含む食品は使用基準内であっても危険だと思いますか？	65
A-7. 農薬を使って栽培された野菜は使用基準が守られていても、危険だと思いますか？	66
A-8. 国内で売られている食品は安全に管理されていると思いますか？	67
A-9. A-8で、そのように思われる理由は何ですか？	68
A-10. 教育現場で活用する教材に求めることは何ですか？	69
B-1. 食品添加物の安全性についての説明	70
B-2. 人が一生にわたって毎日摂取し続けても問題ないとされる量(ADI)についての説明	71
B-3. 残留農薬の安全性についての説明	72
B-4. 食品安全委員会の役割(食品の安全性についての調査や情報提供、 緊急事態への対応など)についての説明	73
B-5. アニメを見る前と見たあとで児童に意識の変化は見られましたか？	74
B-6. 今回のアニメの内容について、 ご自身の考え方とギャップを感じたところがあればお書きください	75
B-7. 特に児童に有用だと思われた情報はどれですか？	76
B-8. 食品安全委員会の役割についてご存知でしたか？	77
B-9. 他の学校でも使っていただける内容だと思いますか？	78
B-10. ご感想や改善点など、ご自由にお書きください	79

◇ 本調査の概要

1. 調査目的

食品の安全性からみた不安要因として、農薬及び食品添加物は常に上位を占め、多くの国民が食の安全性について不安を感じている。食品の安全性について正しい理解を得るためには、学童期から科学に基づく正確な情報を分かりやすい形で伝えることが重要である。以上を踏まえ、小学校5、6年生におけるリスク評価の考え方や食品の安全性確保の取組（以下「リスク評価の考え方等」という。）への理解の増進について、既存の各種調査結果や啓発資料等を用いて新たに分析・整理し、明らかとなった問題点や理解の妨げになっている要因等を踏まえて作成した映像による啓発素材を利用して、視聴調査を併せて行うことにより、リスク評価の考え方等を分かりやすく効果的に提供することでの知見を収集することを目的とする。

2. 内容

専門家からの意見聴取を行うとともに、リスク評価の考え方等に関する意識を把握するために、過去5年間に食品安全委員会が行ったリスクコミュニケーションに関する調査報告書及び関連する他機関の調査結果、学童向け動画啓発資料等の分析、取りまとめを行う。また、これらの結果を基に啓発素材を作成して、使用前後における児童及び教師の意識調査を実施し、啓発効果等について分析・整理する。

3. 対象

小学5年生、6年生及び教師

4. 調査期間

平成21年12月～平成22年3月

◇ 意見聴取

I. 意見聴取メンバー

- ・ 鈴木 洋子〔奈良教育大学教育学部 教授〕

生活科学教育講座（家庭科教育） 担当。中学校家庭科〔東京書籍〕の著作関係者として参加。
奈良県食育推進会議メンバー、質の高い大学教育推進プログラム「教員養成大学による地域食育
推進プログラム」代表

- ・ 西島 基弘〔実践女子大学生生活科学部 教授〕

薬学博士。東京都立衛生研究所入所を経て現職。日本食品衛生学会会長、日本食品化学学会会長、
厚生労働省薬事・食品衛生審議会添加物部会委員などの公職を歴任

- ・ 野田 文子〔大阪教育大学 副学長〕

家政教育講座（家庭科教育）担当。中学校家庭科〔開隆堂〕の著作関係者として参加。
小学校家庭科向けデジタル教材「給食から広がる環境の輪」を開発

- ・ 平野 展代〔社団法人日本食品安全支援機構 理事長〕

元厚生労働省食品安全部企画情報課情報管理専門官。1994 年厚生省入省。神戸検疫所食品監視課、
成田空港検疫所食品監視課指導係長、大臣官房厚生科学課課長補佐、食品安全部企画情報課情報
管理専門官など食品衛生行政に従事し、平成 21 年 4 月に現職

II. 意見聴取

①啓発素材の作成に関する意見聴取

（啓発素材の作成にあたり、学校現場の現状や求められる教材などに対する意見を聴取）

- ・ A D I に関する情報は学校にとっても新鮮で興味深いと思う
- ・ 農薬＝悪ではなく、農薬の効果（もし使わなかったら）ということにも触れるといいのではないか
- ・ 添加物がなぜ使用されるのかということで添加物に興味を持ってもらうイントロダクションが必要だと思う。その上で安全かどうかという子供の疑問に答えるというストーリーが良いのでは
- ・ 学校では 15 分ぐらいの時間が見やすい
- ・ 教師に教材を活用してもらうためには、教師をフォローする指導案のようなものがあるとよい
- ・ 今回使用するキャラクターに合わせた絵柄は小学生に受け入れられやすいと思う
- ・ 食品添加物や残留農薬などは少し難しい内容だが、アニメにするとわかりやすいと思う

- ・食品添加物や農薬については、AD I や安全性は簡潔に表現し、なぜ必要かに重点を置くのもよいのではないか
- ・食中毒対策として、手洗いの重要性などをできるだけ簡潔に表現できるといいと思う
- ・食品安全委員会が伝えたいことと、学校現場において教師が児童に伝えたいこととは少し異なると思われる。学校現場で使われる教材を目指すには、教師に受け入れられるようにしないとイケない。農薬や食品添加物に対して、否定的な考えや意見を持っている教師もまだまだ多い

②啓発素材パイロット版についての意見聴取

(作成した啓発素材のパイロット版について、感想及び改善点などに関する意見を聴取)

- ・AD I や残留基準などの説明が少し難しいのではないかと。用語をそのまま使用するのではなく、やさしい言葉に置き換えた方がいいのでは
- ・かなり頭が良い子でなければ、途中で飽きてしまうような気がする。食品の安全性を小学生に分ってもらうためには、我々が普段使用している用語を簡単な説明だけで使用するといいのではないかと。対象が小学生であるため、専門用語を極力使用しないで作成すべき
- ・小学生対象の内容として難しすぎるのではないかと。用語が難しく、何より説明が高度すぎて理解できないのではないかと
- ・食中毒に関する情報は、自分がちゃんと対応しなければならないという意識づくりが必要だと思う
- ・“食品安全委員会”という言葉が多すぎて気になる
- ・食品安全委員会の説明については、やさしく簡潔にした内容でいいのでは
- ・AD I の説明は小学生には相当難しいと思う。「動物実験をして、安全に影響を与えるレベルを調べて、一生食べ続けても安全だという値（AD I）を出して、それよりももっと低いレベルが基準値であり規制されているので、添加物が入っていたとしても大丈夫」といったストーリーを分かりやすく説明できればいいと思う

③啓発効果の検証に関する意見聴取

(パイロット版の啓発効果を検証するための効果的な手法についての意見を聴取)

- ・視聴前後に聞くアンケートの設問は、同じ内容のものを入れた方が、効果をはかりやすい
- ・理解度を測る設問を設定する必要がある

④啓発効果の検証結果に関する意見聴取

(小学生及び教師を対象とした視聴アンケートの結果についての意見を聴取)

- ・視聴前後のアンケート結果を見る限り、明らかに意識の変化があったと認められ、啓発素材の有用性が大きいと言え

- ・ 啓発素材としては良いが、学習素材としては課題が残る。理由としては、アンケート結果から農薬や食品添加物を積極的に摂取しても良いのだという考えが見受けられ、誤解を招く恐れがある
- ・ 自由記入の『映像に関する感想』について、約 2 / 3 が良い意見であるが、残り約 1 / 3 の悪い意見を十分に参考するべきである
- ・ 『映像に関する感想』で、「難しい言葉が出てきたので少し分からなかった」「アニメの声が早口で難しい言葉が出てきたときは分かりにくかった」といった意見があったが、もう少しレベルをおとしてもよいのでは？と思われる。そうすることで児童にもより理解してもらえるのでは？

◇ 調査

リスク評価の考え方等に関する意識を把握するための調査

1. 調査概要

リスク評価の考え方等に関する意識を把握するために、①過去5年間に食品安全委員会が行ったリスクコミュニケーションに関する調査報告書及び本事業に関連すると思われる他機関の調査結果、②学童向けの動画による啓発資料等を調査した。その調査の結果を集計・分析し効果的な啓発素材の作成に必要な情報を取りまとめた。

①過去5年間に食品安全委員会が行ったリスクコミュニケーションに関する調査報告書及び本事業に関連すると思われる他機関の調査結果

●過去5年間に食品安全委員会が行ったリスクコミュニケーションに関する調査報告書

- ・食品の安全性に係るリスクコミュニケーション等に関する調査 (平成17年3月)
- ・食品の安全性に係るリスクコミュニケーション等に関する調査 (平成18年3月)
- ・食品の安全性に係るリスクコミュニケーション等に関する調査 (平成19年3月)
- ・地域における食品のリスクコミュニケーションに関する調査 (平成20年3月)
- ・リスクコミュニケーションの評価手法等に関する調査 (平成20年3月)
- ・リスク認知の形成要因等に関する調査 (平成21年1月)
- ・食品の安全性の啓発に関する調査 (平成21年1月)

●本事業に関連すると思われる他機関の調査結果

- ・内閣府経済社会総合研究所委託調査 経済教育に関する研究調査 (平成18年3月)
- ・文部科学省委嘱事業教科書の改善・充実に関する調査研究〔国語〕(平成20年3月)

②学童向けの動画啓発資料（食品安全委員会）

- ・気になる食品の安全性
- ・気になる食品添加物
- ・気になる農薬 ～安心して食べられる？～
- ・遺伝子組換え食品って何だろう？ ～その仕組みと安全性～

2. 調査結果

■食品の安全性に係るリスクコミュニケーション等に関する調査（平成 17 年 3 月）

【事業概要】

海外におけるリスクコミュニケーションの事例等を把握すると共に、リスクコミュニケーションの効果検証を行ったもの。

【主な参考箇所】

◎食品安全のリスクコミュニケーションに関する国際ワークショップ（P. 11～13）

- ・日本では「食品は絶対安全でなければならない」あるいは「政府はゼロリスクを保証する義務がある」という考え方が根強く存在していることが考えられる。そのため、リスク分析に基づく考え方の浸透が、特に重要である。今後、多面的な角度からの検証と対応策の具体化が必要である。
- ・カナダでは、子供などに対しては、特別な教育プログラムや専用のパンフレットを用いて情報を提供していることは参考になる。

【考察】

- ・「食品は絶対安全でなければならない」という根強い考えに対して、科学に基づく正確な情報を小学生頃からわかりやすい形で伝えることは重要である。
- ・カナダにおいても子供向けに教育プログラムを用いて情報提供している。日本にとっても必要であると考えられる。

■食品の安全性に係るリスクコミュニケーション等に関する調査（平成 18 年 3 月）

【事業概要】

リスクコミュニケーション専門調査会における検討材料を収集するため、国内外におけるリスクコミュニケーションの詳細な事例把握等による知識情報等の蓄積、リスクコミュニケーション技術等の調査、リスクコミュニケーションの評価、消費者意識の把握を行ったもの。

【主な参考箇所】

◎食品安全のリスクコミュニケーションに関する国際ワークショップ[第2回]（P. 27）

◇リスクコミュニケーションのツール

- ・ベネフィット・コミュニケーションについてカナダやオランダでは、リスクとベネフィットの関係をきちんと消費者に理解してもらうことの重要性を認識している。あるリスクを回避すると、ベネフィットが損なわれる可能性があることや別のリスクが増大する可能性があることなどを理解させる必要がある。
- ・オランダでは「栄養センター」と呼ばれる機関がベネフィットとリスクの関係の説明を行っている。その際、説明する内容については、必ずポジティブな方向で説明する。

【考察】

リスクとベネフィットに対する考え方をきちんと理解してもらうことの重要性を認識した上で、効果的な啓発素材の作成を行う必要があると考えられる。

■食品の安全性に係るリスクコミュニケーション等に関する調査（平成19年3月）

【事業概要】

我が国のリスクコミュニケーションに関する取組を一層推進していくためには、信頼される食品安全行政を確立するとともに、食品安全分野のリスクコミュニケーションの進め方を検討し、その手法を開発する必要がある。上記の検討を行う場であるリスクコミュニケーション専門調査会における検討材料を収集するため、国内外におけるリスクコミュニケーションの詳細な事例把握等による知識情報等の蓄積、リスクコミュニケーションの効果の評価、情報発信態勢の評価、消費者意識の把握を行ったもの。

【主な参考箇所】

◎欧米諸国から有識者を招いた国際ワークショップ運営、提言等の取りまとめ

(P. 30～34)

◇日本における食の安全に関するリスクコミュニケーションの現状と課題

- ・諸外国における学校教育での「食育」について、オランダでは1930年代から学校への情報提供等のプログラムを実施している。最近では若年者への教育の重要性が指摘されている。オランダの栄養センターは食品安全について知りたいことがあれば、例えば、何をどうやって食べるべきか、ということも含めて聞くことができる。現代では、食品に関して子供が親から知識を得ることができなくなっている。普通の家族の中で伝えられていたことも政府で伝えるべき知識となってきた。
- ・カナダでも実施されている。今後活動を活発化させるべき分野だと考えている。子供向け等幅広い分野のプログラムを検討している。
- ・日本の食育は食品の安全性を正しく理解することだけではなく、日本の食事のあり方、摂り方も含めて教育するものである。食育への取組として、2005年に食育基本法が施行、2006年に食育基本計画が策定。食品の安全性の確保に関する情報提供を食育の柱の一つと位置づけ、食育の推進に貢献。課題としては、情報発信側では情報の提供方法に工夫が、情報利用側には情報を読み解く力、使う力を身につける訓練が必要である点である。
- ・今後、学校教材等への積極的な情報提供、働きかけを検討すべきである。

◇欧州におけるリスクコミュニケーションの展開

- ・日本では食品添加物は日常的な懸念になっているが、オランダや他の諸国でも同様である。適切な情報をわかりやすく提供していくことが重要であり、人々に説明していくことで目を開かせることはできる。人々は報道を聞いてはいるが、情報を批判的に聞き、間違った情報を区別することには慣れていない。必要な信頼性のある情報を得たいときには食品安全委員会のホームページを見ればよい、という状況を目指せばよいのではないか。

◎食品安全委員会のリスクコミュニケーションの手法の評価・改善

フォーカス・グループ・インタビュー 調査の結果及びまとめ (P. 79・P. 85)

◇食品のリスクに関する情報源

- ・家庭科の授業など、学校教育で得た知識が一定の影響を持っている。その他、子供の学校からの便りや、病院、通販などのDMを通じて情報を得ている。
- ・農薬の使用については、害虫の被害、価格の高騰、無農薬農法の難しさなどが連想され、農薬のベネフィットへの一定の理解がみられた。
- ・添加物のベネフィットについても、利便性について一定の評価はみられたが、専業主婦の一部からは不要論も示された。

【考察】

- ・学校教育での「食育」の重要性については、日本のみならず、諸外国でも重要視されている。ましてや諸外国では、日本よりも以前から学校への情報提供等のプログラムを実施している国もある。今回作成する啓発素材についても、学校現場への積極的な働きかけが必要であると考えられる。
- ・今回作成する啓発素材を食品安全委員会のホームページにも掲載することは、効果的であると考えられる。
- ・学校教育で得た知識が一定の影響を持つと考えられることから、できるだけ早い時期から、科学的に正しい情報を子供たちに提供することが重要であると考えられる。

■地域における食品のリスクコミュニケーションに関する調査（平成 20 年 3 月）

【事業概要】

食品の安全性の確保に関するリスクコミュニケーション（以下「リスコミ」という。）を地域において、円滑かつ効果的に実施するため、地方公共団体の具体的な取組の状況について情報を収集・整理・分析し、地方公共団体への支援方法（有効な実施方法や仕組み）を検討するとともに、諸外国の地域におけるリスコミについて情報を収集・整理・分析し、さらにワークショップを活用したリスコミの有効性等について調査したもの。

【主な参考箇所】

◎まとめと今後の課題 (P. 105)

◇啓発素材開発の現状

- ・一般的な啓発素材として、地方自治体ではリーフレットやパンフレット、ウェブサイトのコンテンツが作成されている。
- ・他の既存の啓発素材にも、食品リスクの科学的な理解促進のための有効なツールは少ないことも指摘された。
たとえば消費者はゼロリスクを求めると一般にいわれるが、食のリスクとは本来どのようなものなのか、具体的な残留農薬の安全基準はどのように決まるのか、といった基本的な事項をわかりやすく説明するプログラムが少ない。

【考察】

科学的な理解促進のための有効なツールが少ないことへの指摘に対し、今回作成する啓発素材は有効なツールとなると考えられる。科学的な知識のもとづき、ADIを盛り込み、残留農薬の安全基準などについてイラストを使ってわかりやすい説明を行う。

■リスクコミュニケーションの評価手法等に関する調査（平成20年3月）

【事業概要】

リスクコミュニケーション手法の一つである意見交換会について、消費者等の関心事項を把握するための調査を実施し、消費者等の関心事項に対応した効果的な意見交換会の企画、実施方法について検討するとともに、意見交換会の評価手段として、効果的なアンケート調査を実施するための具体的な方法について、調査、分析したものの。

【主な参考箇所】

◎消費者等の関心事項に対応した効果的な意見交換会の実施に関する調査

フォーカス・グループ・インタビュー 結果のまとめ（P.35～37）

- ・潜在的な参加意欲はあるものの、これまでに実際に参加したことのない消費者の参加を促進することが第一義と考えている。今回の調査対象者を無関心層、漠然とした不安を持つ層、一般的な感心層、高関心層と分類し、とりわけ「一般的な関心層」と「漠然とした不安を持つ層」を調査対象と絞り込んでいる。
- ・食品安全委員会はより生活者の身近なところで情報発信をして欲しい。例えば、人の集まるスーパーや学校、病院など

※20～40歳の世代では、子供中心に考えるので、子供が出入りしている小学校とか中学校で情報が取り込めるような何らかのコンテンツを配る等、よいのでは？と思う。

- ・消費者の食の安全に関する意識について、各世代とも共通して、「添加物（着色料・保存料）」「産地（国産／外国産）」「残留農薬」への懸念が強い。「添加物」については、マスメディアや店頭での表示、学校教育などが主な情報源となっている。今後、一般の消費者への食品安全委員からのリスクコミュニケーションをより強化することで、添加物への正しい理解を得ていく必要がある。

【考察】

- ・20～40歳代が希望するように学校現場、特に小学生に向けた啓発素材を作成する。
- ・消費者の食の安全に関する意識について、懸念が強い「食品添加物」「残留農薬」を中心とした啓発素材を作成する。

■リスク認知の形成要因等に関する調査（平成21年1月）

【事業概要】

効果的なリスクコミュニケーション手法の検討に資するため、食品に関するハザードに対する消費者のリスク認知状況やリスク認知の形成要因をフォーカスグループインタビュー及びインターネットアンケートにより調査・分析し、さらにリスク認知に影響を及ぼす情報源について、情報内容の整理及び訪問インタビュー等により調査・分析することで、リスクコミュニケーションのための基礎的環境を把握することを主目的として実施したものの。

【主な参考箇所】

◎リスク認知の形成要因に影響を及ぼす情報源の調査

◇調査分析結果 訪問インタビュー調査結果 (P. 153・P. 157・P. 175)

中学・高校家庭科資料集（副読本）計 14 件（高校生用 11 件、中学生用 3 件）について、食品安全に関する箇所の内容等を整理。

- ・「食品添加物の複合摂取、継続摂取の健康影響が明らかでないため、食品添加物はできるだけ避けるほうがよい」といった趣旨の記述が、多くの家庭科資料集（副読本）で取り上げられている（あるいは、単に食品添加物をできるだけ避けるように示唆する記述や、心配なもの・発がん性が懸念されるものとして具体的物質を適示するものもある）。
- ・資料集の中には、食品添加物について、かつて安全とされていて禁止されたものが存在することを紹介したり、問題を示唆するものがある。
- ・食品添加物の使用基準設定の考え方について、最大無作用量や 1 日摂取許容量（AD I）の概念を視覚的表現で示している資料集もある。
- ・現場教員からは、食品添加物に関する内容を充実させてほしいというニーズが高い。

◇効果的なリスクコミュニケーション手法の検討 調査研究結果から得られる知見 (P. 183・P. 187・P. 188)

- ・消費者が食品に関して抱く「不安」は心理上、明確な理由はあまり認められず、言わば、なんとなく不安・漠然とした不安という感覚が喚起されているものと考えられる。
- ・消費者へのインターネットアンケートによると、リスク認知（不安度）においては、残留農薬は 9 割、食品添加物は 8 割と高い割合を示している。
- ・食品安全委員会がどのような機関で、どのような役割を担っているかが理解されていない。

【考察】

- ・中学・高校の現場教員は、食品添加物に関する情報の提供を求めている。また、食品添加物の使用基準設定の考え方について、AD I の概念を視覚的表現で示している資料集もあることから、AD I の概念を含めて情報を提供していく必要があると感じられる。
- ・しかし、現在中学・高校で使われている家庭科資料集（副読本）などに記載の食品添加物の情報等は、まだまだ科学的根拠にもとづいたものであると言い難いと考えられる。
- ・そこで、中学・高校からではなく、もっと早い小学校のうちから、現場教員並びに児童に対して科学的根拠にもとづいた食品添加物及びAD I の考え方に関する情報を提供していくことも必要であると考えられる。また啓発素材としては、児童にも視覚的にわかりやすい映像教材が好まれると考えられる。
- ・インターネットアンケートによると、消費者は残留農薬で 9 割、食品添加物で 8 割が不安に感じている。ただ科学的根拠にもとづくものではなく、なんとなく不安・漠然とした不安という感覚的のものであると考えられている。大人になって感覚的な不安を感じないためにも、子供のうちから科学的根拠にもとづいた正しい情報を身につけておくことが重要であると考えられる。そこで、子供への情報提供をしていく必要性の高さが伺える。
- ・また、食品安全委員会の仕事や役割についても子供のうちから理解してもらうことが必要であると考えられる。

■食品の安全性の啓発に関する調査（平成 21 年 3 月）

【事業概要】

小学5・6年の子どもとその親を対象に、食品安全についての意識調査を行い、食品安全についての意識の実態を把握する。さらに、食品安全についてのビデオを視聴してもらい、再度アンケートを実施。啓発効果を把握したもの。

【主な参考箇所】

◎調査概要 検討会の概要（P. 6）

- ・構成の基本方針は、主人公の「問い」（＝視聴者の「心理」）に応えるかたちで情報提供していくこととする。重要な概念などの説明はVTR（ナレーション）化して、主人公のやりとりの間に挿入。「問い」を持つ主人公（＝視聴者）が目的意識を持ってVTRを見ることができるようになる。
- ・食品安全委員会の仕事を風景映像（会議風景やその準備の過程、電話相談の対応、意見交換会など）で表現する。
- ・小学校高学年の児童が対象なので、できるだけ専門用語は使わずに、しかし重要な概念はきちんと理解できるように、会話やナレーションの言葉選びを工夫する。

◎調査結果の要約 明らかになった課題（P. 22）

- ・啓発効果は、特に子どもにおける食品安全への意識において顕著となった。とりわけ「農薬」「食品添加物」が、「安全性について検討されている」、「使用基準（表示基準）等があり安全管理されている」ことについて、関心・理解が高まったと言える。
- ・食品安全に関する言葉について、ビデオ視聴前の意識調査の時点では、親はいずれの言葉も「聞いたことはあるがよく知らない」という程度であり、子どもにおいては、ほとんど認知されていなかった。しかし、ビデオを視聴することによって、「リスク管理」「リスク分析」「リスク評価」、さらに事前の意識調査で親子ともに最も認知度の低かった「リスクコミュニケーション」も確実に認知度が上がった。とはいえ、親において、ビデオ視聴後に認知度が7割を超えたのは「リスク評価」のみであり、「リスク管理」「リスク分析」はいずれも7割を下回り、「リスクコミュニケーション」は5割にとどまっている。子どもにおいては、それぞれ4割前後の認知度であった。これらの言葉については、単独の言葉としてではなく、相互の関係を含めてわかりやすく示すためのさらなる工夫が求められる。
- ・食品安全委員会を含めた公的機関の役割や連携、取り組みの様子が、小学生用のビデオでは、ドラマ仕立てとなっていたこともあり、子どもたちの注意を引き寄せ、繰り返し使われた「食品安全委員会」や「リスク」という言葉が記憶され、調査結果に反映したものと思われる。
- ・食品安全委員会を含めた公的機関の役割や連携、取り組みの様子が、小学生用のビデオでは、ドラマ仕立てとなっていたこともあり、子どもたちの注意を引き寄せ、繰り返し使われた「食品安全委員会」や「リスク」という言葉が記憶され、調査結果に反映したものと思われる。

【考察】

・食品安全に関する言葉（ハザード、リスク評価、リスク管理、リスクコミュニケーション、リスク分析、食品安全委員会）の中でも、特に「リスクコミュニケーション」の認知度が低いことがわかった。一方で、「食品安全委員会」という言葉の認知度が最も高い結果となっているが、いずれの言葉についても、内容はほとんど知られていないことがうかがえる。今回の調査においても、啓発素材（アニメ DVD）の視聴対象が同年代の小学生であることから、視聴前の知識レベルは同様であると判断した。このため、今回の啓発素材作成においても、より一層、平易な言葉を使って、これらの内容をわかりやすく説明する必要性が強く感じられた。また、可能な限り専門用語は使わず、伝える情報も最小限に留める構成が有効であると考えられる。

■内閣府経済社会総合研究所委託調査 経済教育に関する研究調査（平成 18 年 3 月）

【事業概要】

個人を取り巻く環境が大きく変化しており、生活者としての個人にも結果に対する責任をとることが求められるようになっていく。このような中、（１）経済教育のプログラム整備・（２）新たな教材案・（３）経済教育の実施体制の整備のあり方と具体的な方向性を明らかにするために実施したもの。

【主な参考箇所】

◎経済教育プログラムの整備に向けて

◇経済教育の習得されるべき概念の体系的な整理（P. 25）

- ・小学校では、家族や地域などの身のまわりの経済社会に関心を持たせ、生活を通して経済のことを知り、自分でも考えられるようにすることが主な内容となっている。特に買い物をする際の合理的な選択のしかたなどが求められる。

【考察】

- ・児童に身近な「食品」というものに関心を持たせ、自分たちが食べる食品について児童自らが考えて選択できる力を養うためにも、食品の安全性における情報の提供は重要であると考えられる。

■文部科学省委嘱事業 教科書の改善・充実に関する調査研究〔国語〕（平成 20 年 3 月）

【事業概要】

小学校（国語）の教科書を対象として、現行教科書における改善・充実が望まれる点や、その方向性・方策について、教員・保護者に対するアンケートや専門家会議における提言を行ったもの。

【主な参考箇所】

◎教科書の改善・充実に関する総論

◇漢字表記、提示の仕方を改善・充実させる

- ・現行の教科書における漢字の取り上げ方について、改善すべき点として、①漢字の配当単元の偏り・②配当学年と日常生活で使用する言葉のずれがあげられる。

特に②に関して現行の教科書を見ると、配当学年にない漢字でも、上学年の漢字をつかいルビ付き表記をしている例は多い。今後も、配当漢字にないが、学習や日常生活に必要な言葉は児童の負担にならない程度に漢字を使用すべきと考える。日常生活で使うことを考え、ルビを付け漢字表記をすることが言葉の獲得につながると考えるため、できる限り上学年の漢字をルビ付きで使用するよう柔軟に取り上げるべきである。

【考察】

- ・学習や日常生活に必要な漢字を使う場合は、児童の負担にならない程度に漢字を使用すべきであるとの考えから、今回の啓発素材の作成に関して、できる限り漢字をルビ付きで使用することを心がける。

《学童向けの動画啓発資料についての調査》

調査の対象とした啓発資料は次の通り

◇「気になる食品の安全性～みんなで学ぼう“リスク分析”～」(内閣府食品安全委員会) 本編18分



【構成・訴求手法】

食品の安全性を確保するために取り入れられている「リスク分析」や「ADI」などについて、小学生向けにドラマ形式で解説。「政府インターネットテレビ」にて配信 <http://nettv.gov-online.go.jp/prg/prg3208.html>

◇「気になる農薬 ～安心して食べられる?～」(内閣府食品安全委員会) 本編約20分



【構成・訴求手法】

農薬の分解性や排泄のメカニズムを調べながら、食品安全委員会が行っている農薬のリスク評価などについて、小学生にもわかるようにドラマ形式で紹介。「政府広報オンライン」にて配信 http://www.gov-online.go.jp/useful/video/kininaru_nouyaku/index.html

◇「遺伝子組換え食品って何だろう？～その仕組みと安全性～」(内閣府食品安全委員会) 本編 17分



【構成・訴求手法】

とある食育セミナーに参加した親子たちの視点で、遺伝子組換え食品の安全性など、基本的な情報が学べる。「政府広報オンライン」にて配信

http://www.gov-online.go.jp/useful/video/syokuiku_seminar/index.html

◇「小学校高学年向け：家庭科・総合的な学習の時間向け映像教材」(食品会社A社) 本編 17分



【構・訴求方法】

給食を題材に食材はどこから来るのか、食べ残しと環境問題の関係など、社会的な課題について、児童が自発的に学ぶことをうながす作品。実写の中にアニメキャラクターを登場させることで、児童の興味を引き寄せている。また、進行役を担うキャラクターがいることで、流れがスムーズになっている。映像ソフトは希望者に無料配布。

◇動画啓発素材の調査結果まとめ

他の動画啓発素材を調査した結果、次のような点に留意し、作成することとした。

- ・ 盛り込む情報を整理し、難しい用語はできるだけ使わないようにする
- ・ 登場人物は視聴者が親近感を抱きやすいように配慮する
- ・ インターネット上での公開を視野に入れ、小学生以外にも訴求できる内容とする
- ・ 視聴者が感情移入しやすいように身近なことを例に取り上げる
- ・ 訴求対象である小学生が自分たちの問題として映像を見られるように導入し、アニメキャラクターが解説するスタイルで、内容を深く刻みつける
- ・ 限られた時間でも視聴しやすいように、チャプターごとに独立して見ることもできる作りを考慮する
- ・ 登場人物の会話を通して解説にドラマ性を持たせた展開とし、児童の疑問や興味を刺激して、飽きさせずに作品を進行させる

1. 調査概要

〔1〕調査目的

- A. 小学5・6年生の児童を対象に、食品の安全性についての意識調査を行い、食品安全についての意識の実態を把握する。さらに、食品安全についてのDVDを視聴してもらい、再度アンケートを実施。啓発素材の分かりやすさ、活用前後による食品の安全性に関する知識の変化(啓発効果)、食品安全委員会の認知度を把握する。
- B. A. の調査を実施するために啓発素材を活用して授業等を行った教師を対象に、食品の安全性についての意識調査を行い、食品安全についての意識の実態を把握する。さらに、食品安全についてのDVDを視聴してもらい、再度アンケートを実施。啓発素材の分かりやすさ、啓発素材の有用性 及び 効果を把握する。

〔2〕主な調査項目と構成

◎・・・啓発素材視聴前と視聴後に調査

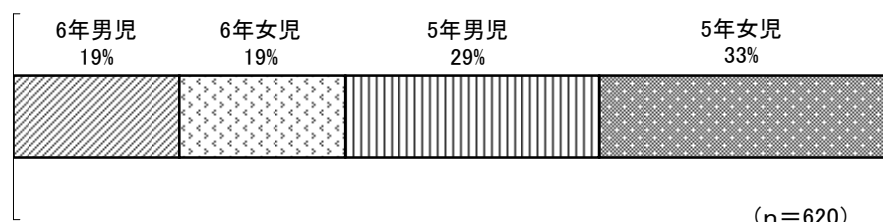
児/教	質問内容	分類・備考
児童1.	自分が食べる食品について普段から気にしているか	食品安全への意識
児童2.	食品添加物という言葉聞いた事があるか	食品安全に関する知識
児童3.	食品添加物のイメージ ◎	食品安全に関する知識
児童4.	農薬という言葉聞いた事があるか	食品安全に関する知識
児童5.	農薬のイメージ ◎	食品安全に関する知識
児童6.	普段食べている食品の農薬や添加物の残留度 ◎	食品安全に関する知識
児童7.	農薬や食品添加物の体内での蓄積度 ◎	食品安全に関する知識
児童8.	普段食べている食品に含まれる農薬や添加物の体への影響 ◎	食品安全に関する知識
児童9.	体に必要な物質でも過度に摂取した場合の体への影響 ◎	食品安全に関する知識
児童10.	少量の毒物が体に及ぼす影響 ◎	食品安全に関する知識
児童11.	食品添加物や農薬の安全摂取基準を国は設けているか ◎	食品安全への意識
児童12.	食の安全性について知りたいこと	食品安全への意識
児童13.	食品添加物や農薬の安全性をみるにはADIの考え方が大切か	食品安全に関する知識
児童14.	食品安全委員会の主な役割について	食品安全に関する知識
児童15.	教材で楽しく学べた箇所	啓発素材の有用性・効果
児童16.	教材を見た感想	啓発素材の有用性・効果
教師1.	食品の安全性を教えるための時間が十分に取れているか	食品安全への意識
教師2.	児童は食品の安全性に関する正しい知識を持っていると思うか	食品安全への意識
教師3.	食品の安全性に関する最新の情報を取り入れるようにしているか	食品安全への意識
教師4.	食品の安全に関する事で児童に最も教えたい事は何か	食品安全への意識
教師5.	補助教材として使いやすいもの	啓発素材の有用性・効果
教師6.	食品添加物を含む食品は使用基準内であっても危険か	食品安全に関する知識
教師7.	農薬を使って栽培された野菜は使用基準内であっても危険か	食品安全に関する知識
教師8.	国内で販売されている食品は安全管理されていると思うか	食品安全に関する知識
教師9.	教師8.で思う理由	食品安全に関する知識
教師10.	教育現場で活用する教材に求める事	啓発素材の有用性・効果
教師11.	食品添加物の安全性についての説明	啓発素材の有用性・効果
教師12.	ADIについての説明	啓発素材の有用性・効果
教師13.	残留農薬の安全性についての説明	啓発素材の有用性・効果
教師14.	食品安全委員会の役割についての説明	啓発素材の有用性・効果
教師15.	視聴後の児童の意識変化	啓発素材の有用性・効果
教師16.	アニメの内容と教師自身の考え方とのギャップについて	啓発素材の有用性・効果
教師17.	児童に有用だと思われた情報	啓発素材の有用性・効果
教師18.	食品安全委員会の主な役割について	食品安全に関する知識
教師19.	他の学校でも使用できる内容か	啓発素材の有用性・効果
教師20.	その他感想意見など	食品安全への意識

〔3〕 調査対象

小学5・6年生 および 今回の調査を実施するために啓発素材を活用して授業等を行った教師

A. 児童(5年生・6年生) 合計620人

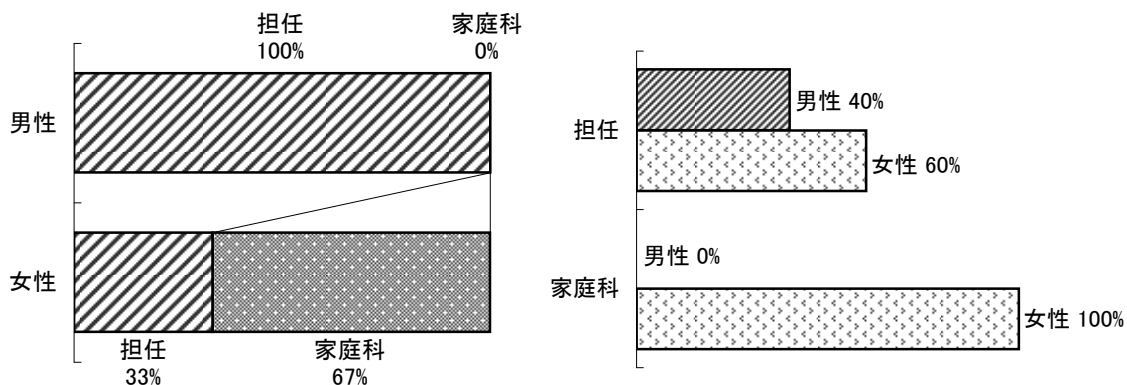
	男児	女児	学年別合計
小学6年生	117 人	117 人	234 人
小学5年生	179 人	207 人	386 人
男女別合計	296 人	324 人	620 人



調査対象としたのは、小学5年生・6年生の児童である。
アンケートはクラス単位 且つ 単日で実施した為、当日の児童の出席状況により男児調査数・女児調査数が均等ではない。
学年間でも同じく、5年生調査数・6年生調査数は均等ではない。

B. 教師 合計11人

	男性教師	女性教師	担当科目別合計
担任	2 人	3 人	5 人
家庭科	0 人	6 人	6 人
男女別合計	2 人	9 人	11 人



調査対象としたのはアンケートA. の調査を実施した教師である。
食品に関するアンケートの為、家庭科を担当する教師の割合が多くなった。

〔4〕 調査方法

小学5年生・6年生各学年から645人を選出し、DVDの視聴前後にアンケート調査を行った。

（有効：620人 / 無効：25人）

また、教師は選出した児童に対し啓発素材を活用して授業等を行った者を調査対象とし、児童同様、DVD視聴前後にアンケート調査を行った。

〔5〕 調査期間

平成22年2月下旬～平成22年3月上旬

2. 調査結果の要約

〔1〕 食品安全への意識

普段口にする食品について関心のある児童は全体の53%しかなく、約半数の児童が普段食品安全に気を付けることなく生活しているという回答であった。しかし、『食の安全性に対する疑問・意見』がないか投げかけると、多くの児童から農薬や食品添加物が体に及ぼす影響、外国産の食品に対する安全性への不安、食品表示や偽装に関する意見をあげてきたことから、決して無関心ではないことが分かった。対して教師側から児童を見たときの調査結果をみると、およそ9割の教師が「児童が正しい知識を持っているとは思わないが、食品の安全性について教えるための時間も十分にはとれていない」と認識している。双方の調査結果をまとめると、児童は食品安全への興味はあるものの、学校では教えてもらう時間は十分に与えられておらず、結果、食の安全への意識が希薄な状態である可能性が高いと言える。

〔2〕 食品安全に関する知識

『食品添加物』に関しては6割、『農薬』に関してはほぼ全員が聞いたことのある言葉ではあるが、それぞれの役割に関して十分に理解している児童は2割〜3割程度であった。教師においては、メディアなどの情報により、食の安全性に何かしらの疑問や不安を抱いている状態で、本来の役割に関して理解できていないと思われる回答もあった。

また『AD』や『食品安全委員会』に関しては、児童・教師ともに役割などについて、今回の啓発素材により、理解が進んだという結果が見られる。

〔3〕 啓発素材の分かりやすさ・効果・有用性

DVD の視聴前後の変化を見る限り、DVD を見ることにより大半の児童がそれぞれの語意・役割について深く理解できたと推測できる結果であった。

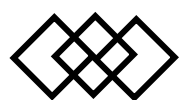
特に、アニメであった点、表やグラフで詳しく説明されていた点においては評価が高く、食の安全性に対して理解を高めるのに役立った部分であると言える。

〔4〕 啓発素材の要望・改善

農薬や食品添加物については、ほとんどの児童が一定のを示したが、ADIIに関しては、視聴後であっても半数以上の56%の児童が「毒物はごく少しであっても害になる」と思っており、1日摂取許容量の理解度を高めるために表現の仕方を検討する必要がある。

また、水中毒に関しても、『水を飲みすぎると死んでしまう』という1点だけを鵜呑みにしてしまい、『体に必要なもの』全般的に取りすぎではいけない事をときちんと理解できているかの確認は今後必要と思われる。

映像に関しては、一部の児童から『遠くから見たので、図が見難い』『アニメの声が早口で難しい言葉が出てきたときは分かりにくかった』といった意見があったことから、視聴する教室やモニタサイズを考慮して、図やグラフの見易さ、声の大きさや速度など、調整が必要かと思われる。



Ⅱ．アンケート集計結果

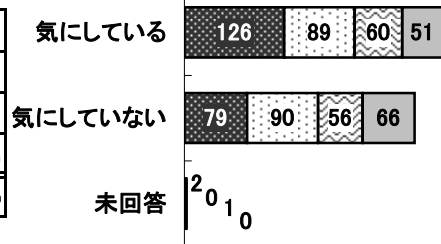


1. 児童への調査

A-1. ふだんから自分が食べる食品については

学年男女別	5年女児		5年男児		6年女児		6年男児		総計
気にしている	126	20%	89	14%	60	10%	51	8%	326 53%
気にしていない	79	13%	90	15%	56	9%	66	11%	291 47%
未回答	2	0.3%	0	0%	1	0.2%	0	0%	3 0.5%
合計	207	33%	179	29%	117	19%	117	19%	620 100%

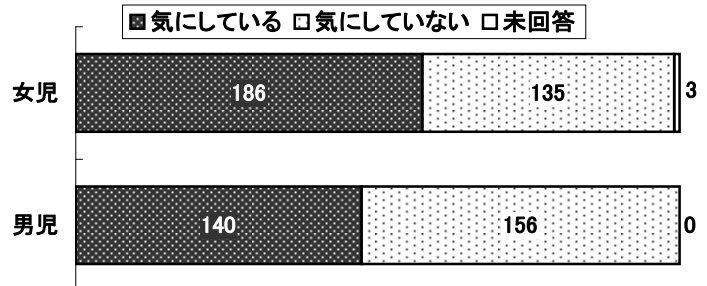
■ 5年女児 □ 5年男児 ▨ 6年女児 ▩ 6年男児



= 概要 =

普段から自分が食べる食品に気をつけている児童は53%、気にしていない児童は47%と、ほぼ半数に分かれる結果であった。

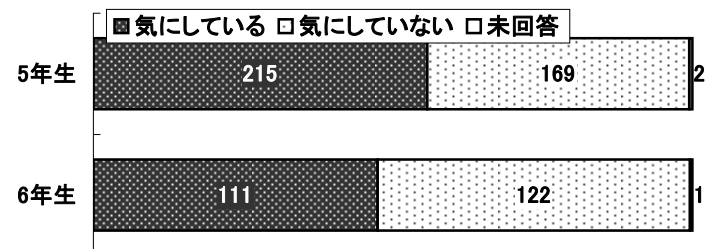
男女別	女児		男児		総計
気にしている	186	57%	140	47%	326 53%
気にしていない	135	42%	156	53%	291 47%
未回答	3	0.9%	0	0%	3 0.5%
合計	324	100%	296	100%	620 100%



= 概要 =

男女それぞれで比較すると、女児は気にしている児童が気にしていない児童を15%上回り、男児はその逆で6%下回る結果であった。食物に対する関心度は女児の方が高い傾向にあると言える。

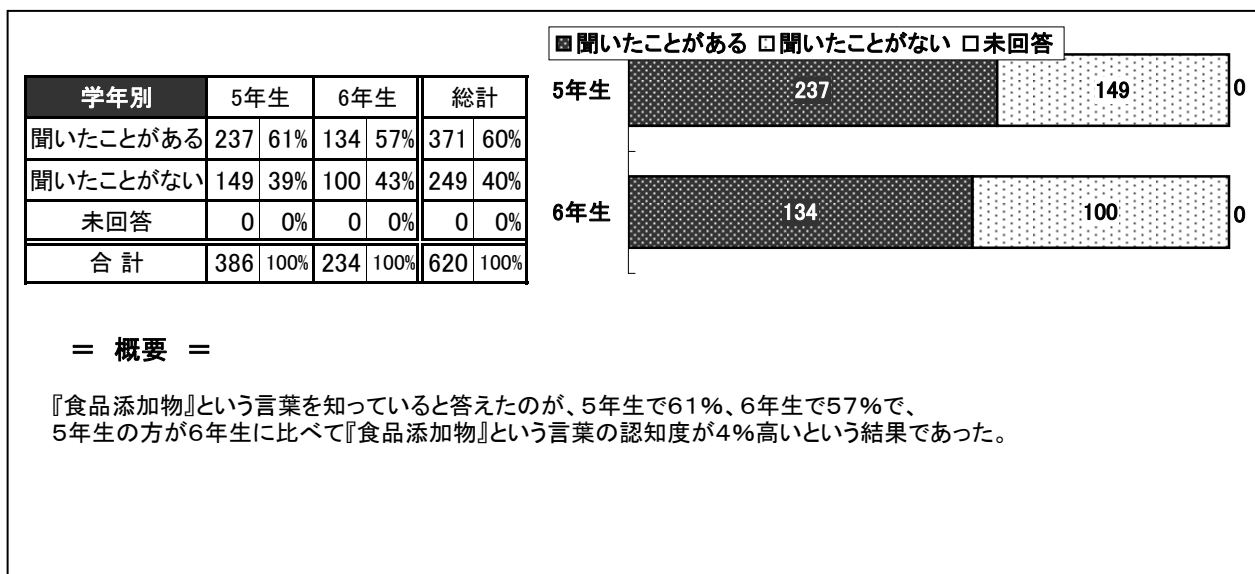
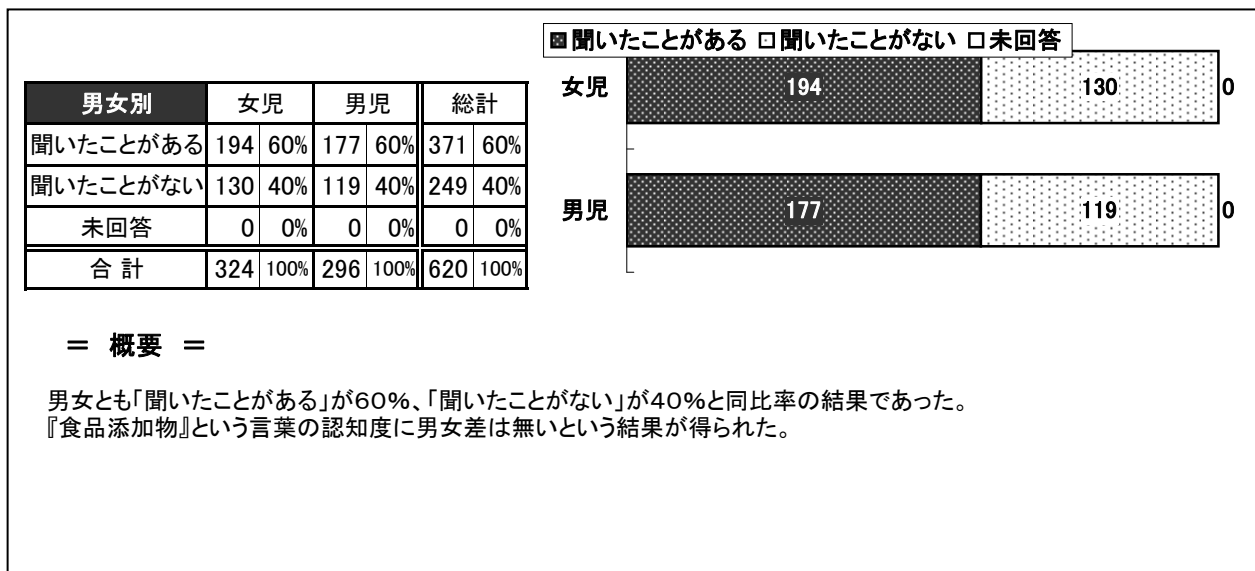
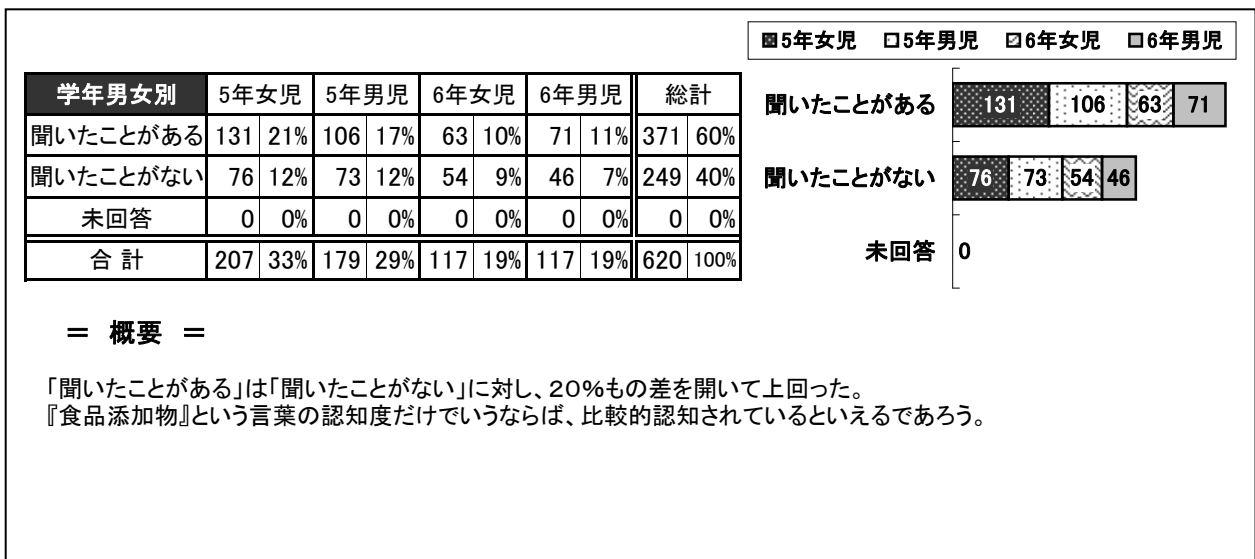
学年別	5年生		6年生		総計
気にしている	215	56%	111	47%	326 53%
気にしていない	169	44%	122	52%	291 47%
未回答	2	0.5%	1	0.4%	3 0.5%
合計	386	100%	234	100%	620 100%



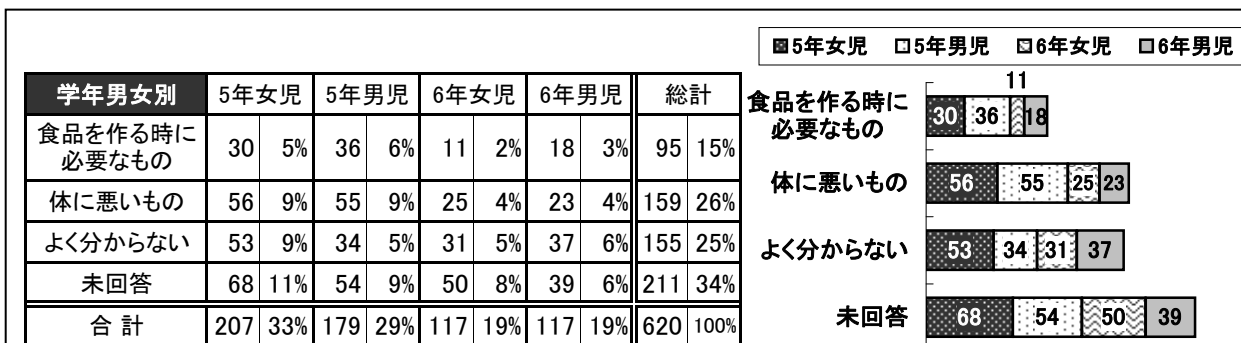
= 概要 =

学年それぞれで比較すると、5年生では56%が「気にしている」、44%が「気にしていない」と、12%「気にしている」が上回った結果が出たのに対し、6年生では47%が「気にしている」、「気にしていない」はこれを上回り52%という結果であった。

A-2. 食品添加物という言葉聞いた事がありますか



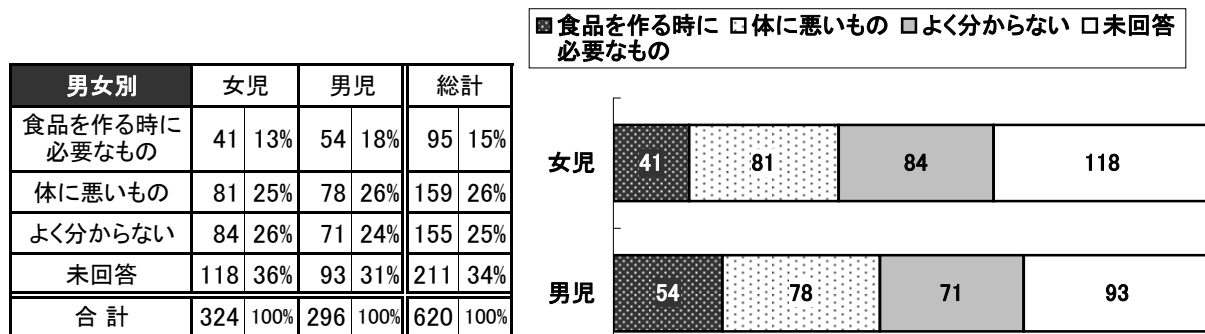
A-3.「聞いた事がある」と答えた人に聞きます⇒食品添加物のイメージは？



= 概要 =

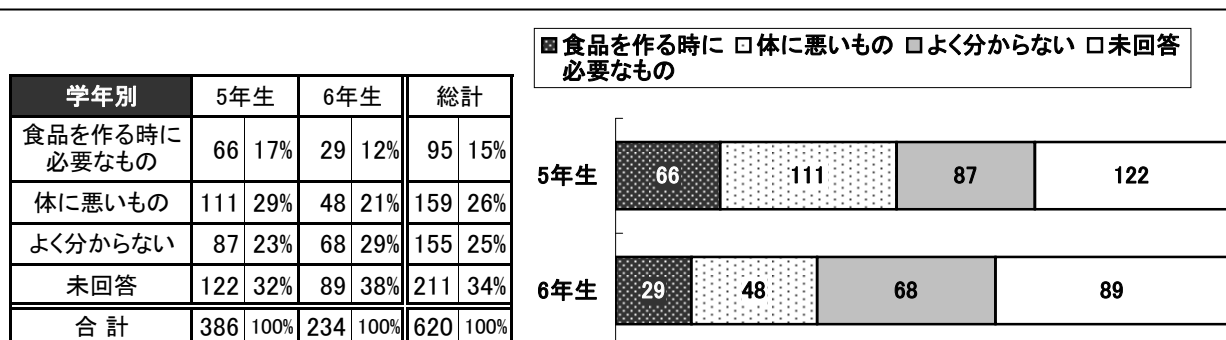
この設問はA-2で「聞いたことがある」と答えた人のみが答える設問であったが、A-2で「聞いたことが無い」を選択した児童がA-3で「よく分からない」を選択する回答が多かった為、未回答にA-2で「聞いたことが無い」と答えた残りの人数を足す事により、アンケート総数から傾向値を見るようにした。

結果、「食品を作る時に必要なもの」を選択したのは全体の15%にとどまり、約85%の児童が、「体に悪いもの」「よく分からない」を選択、または「未回答」であった。



= 概要 =

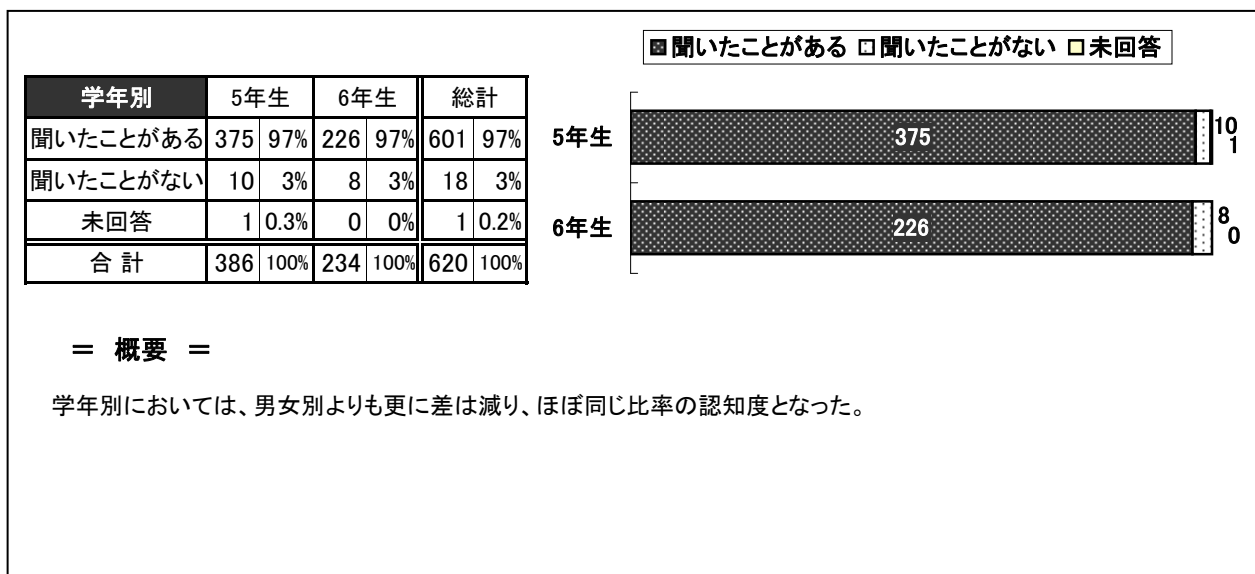
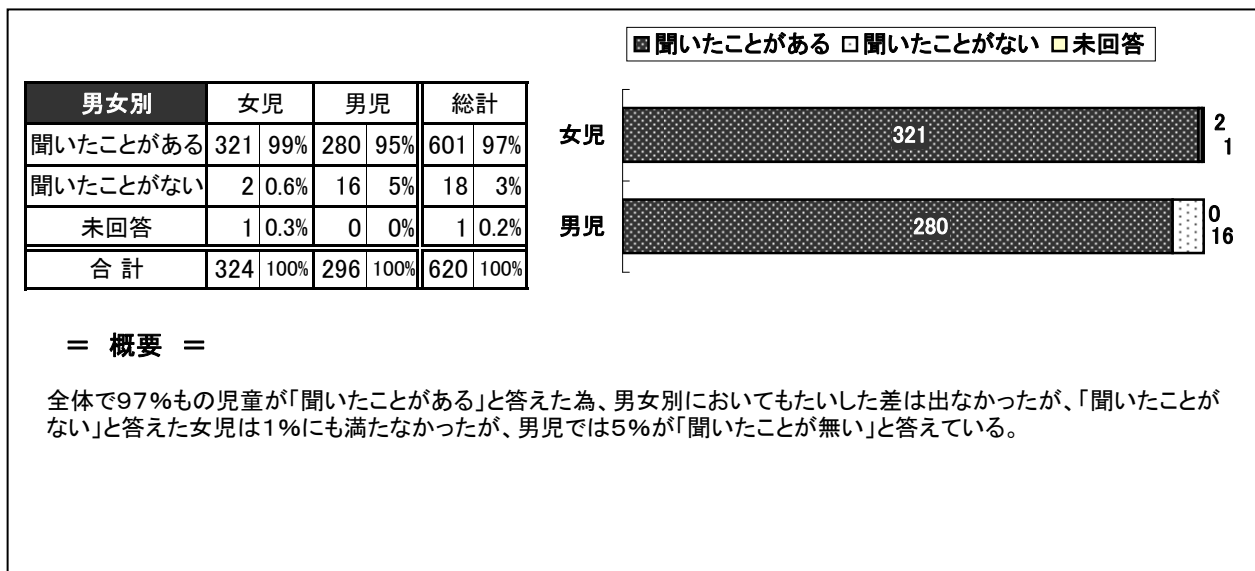
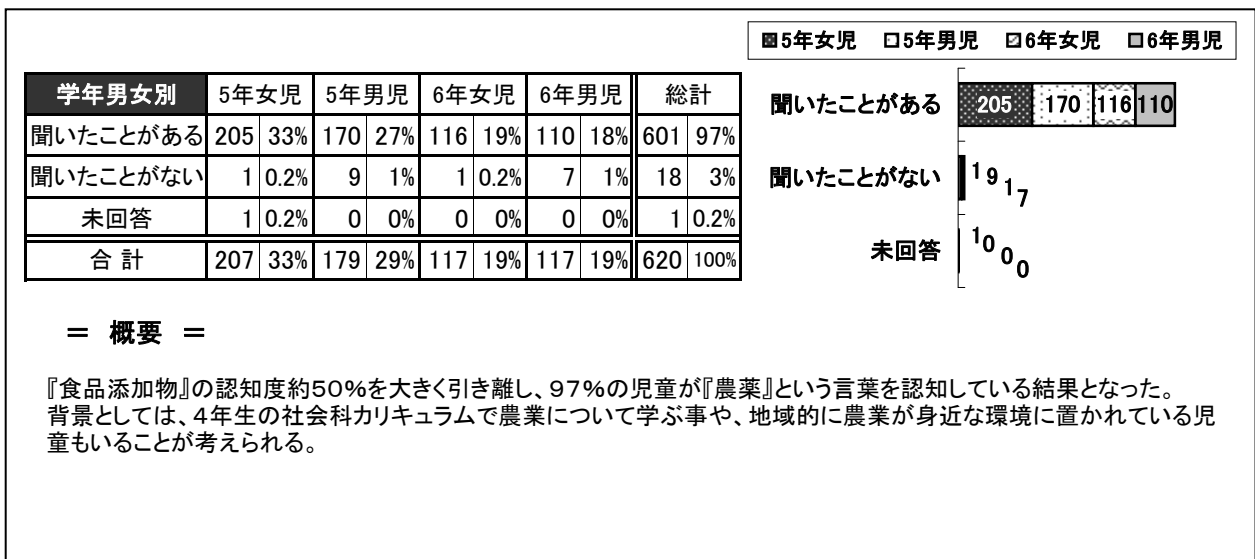
男女別で見ると、男児の方が「食品を作る時に必要なもの」を選択している割合が女児よりも5%多い結果であった。また、「体に悪いもの」「よく分からない」は男女差はないと言える。



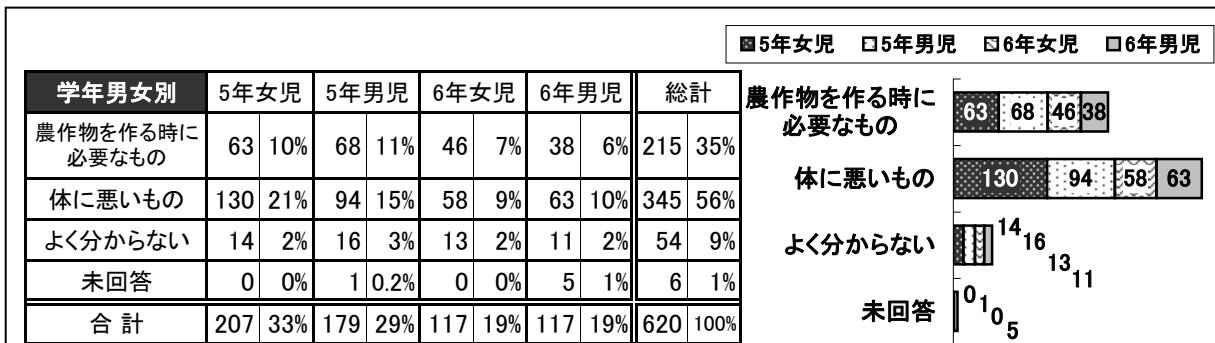
= 概要 =

「食品を作るときに必要なもの」と答えた5年生は学年内構成比17%と、6年生の12%を5%も上回ったが、「体に悪いもの」を選択した5年生も学年内構成比29%と6年生の21%を8%上回る結果となった。

A-4. 農薬という言葉聞いた事がありますか？

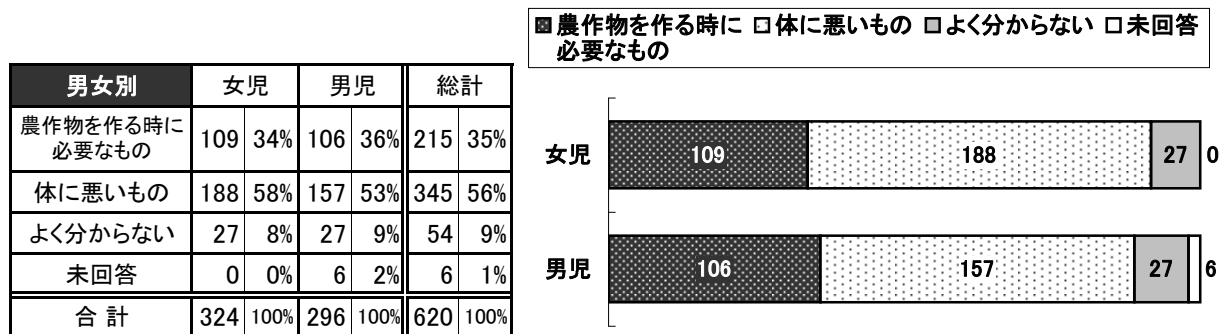


A-5.「聞いた事がある」と答えた人に聞きます⇒農薬のイメージは？



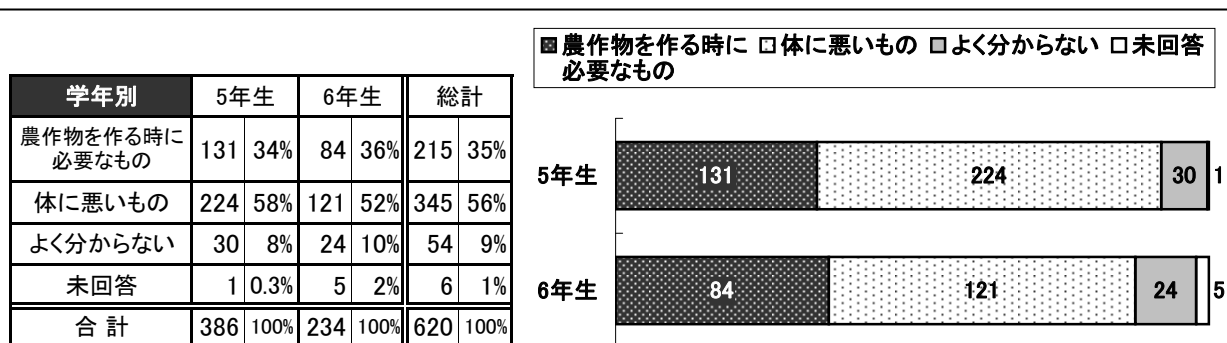
＝ 概要 ＝

この設問もA-3同様の動向があった為、A-4で「聞いたことがない」と答えた児童を未回答に含め、総数での傾向値分析を行った。
 社会科の授業では地球環境や公害なども習うことから、過去に使用されてきた農薬のイメージである「からだに悪いもの」が56%と半数を超えたが、「農作物を作るときに必要なもの」と答えた児童も全体の35%にのぼる。



＝ 概要 ＝

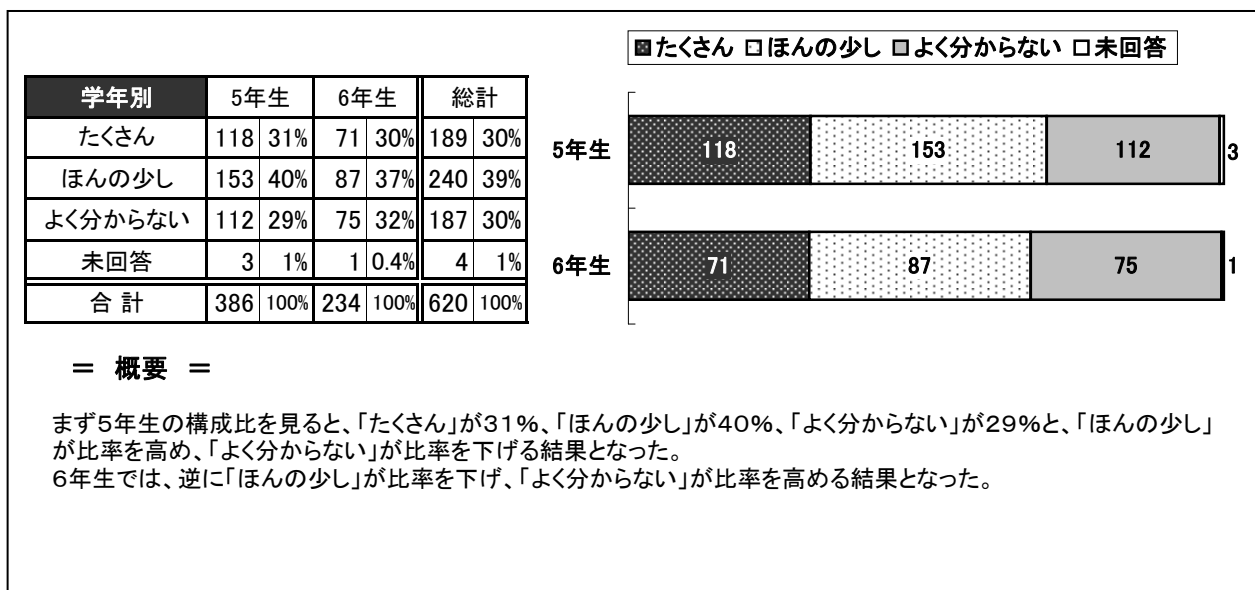
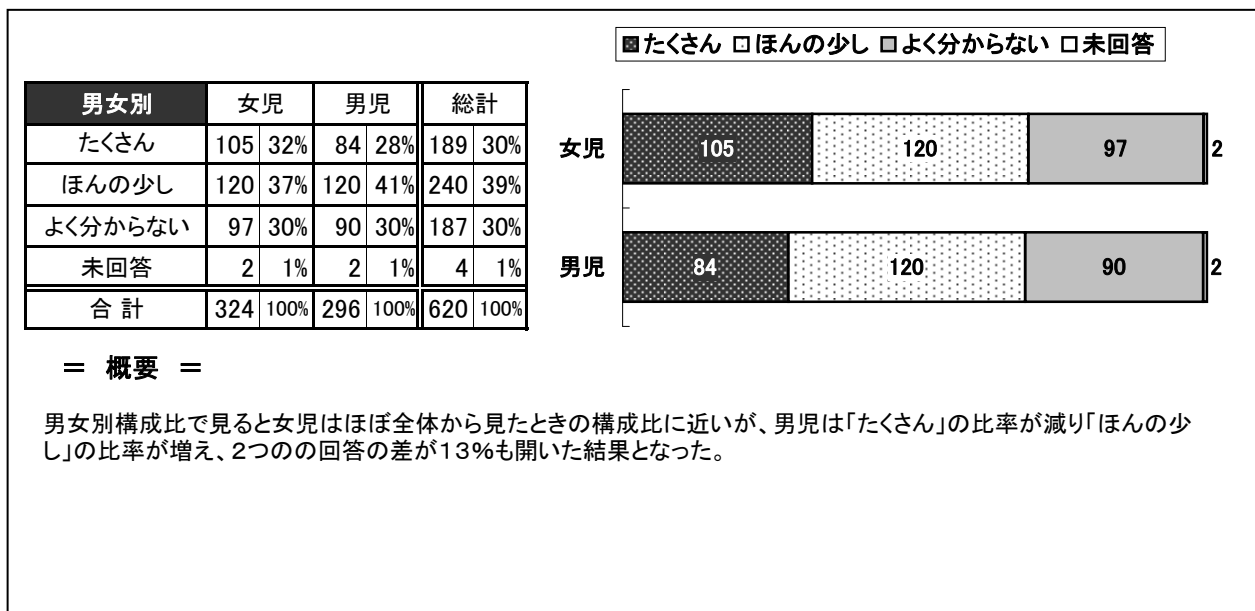
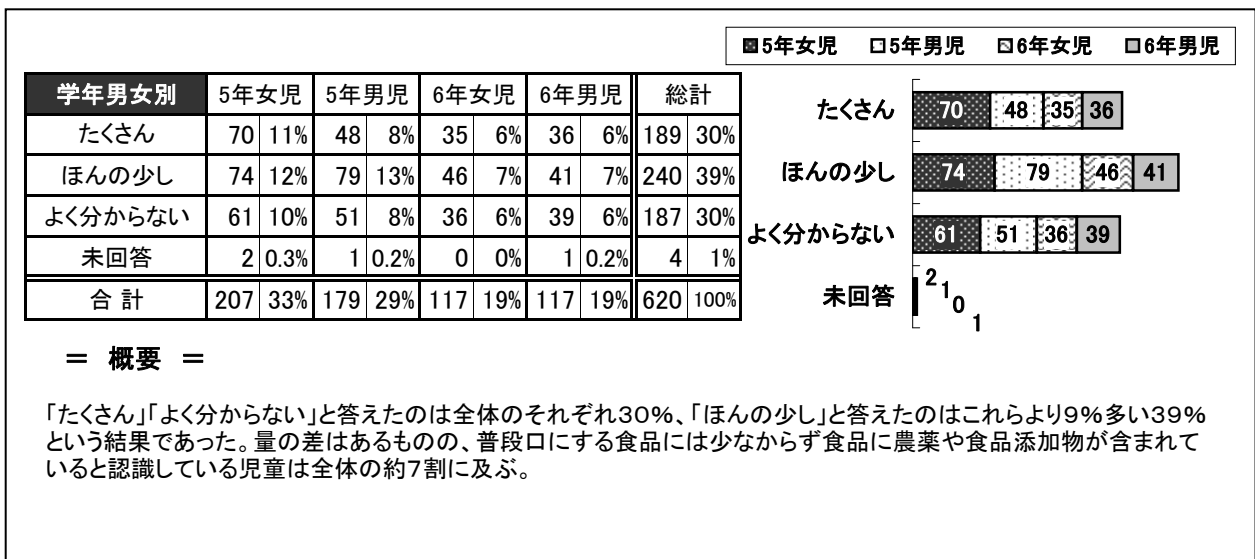
男女ともに若干の差はあるものの、ほぼ同じ構成比であった。



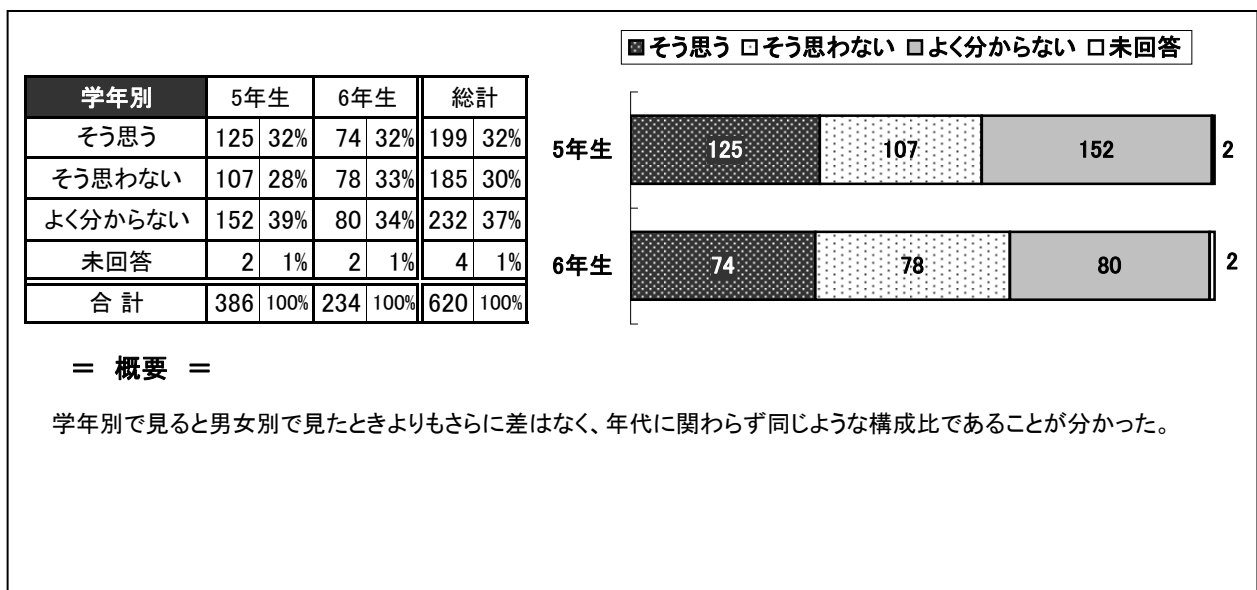
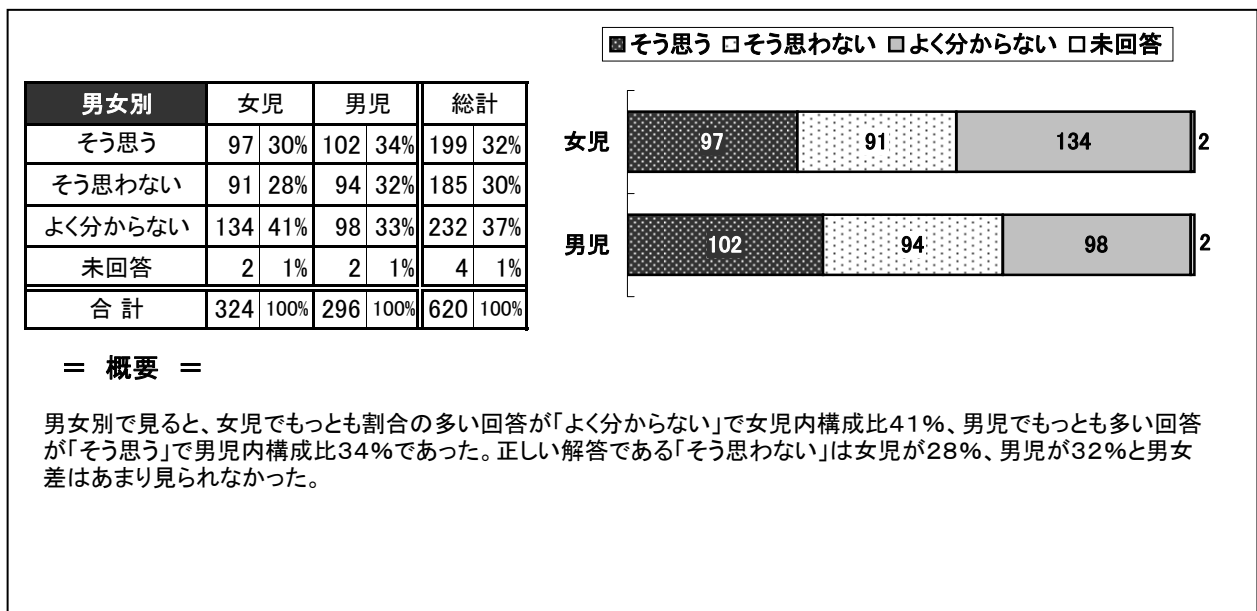
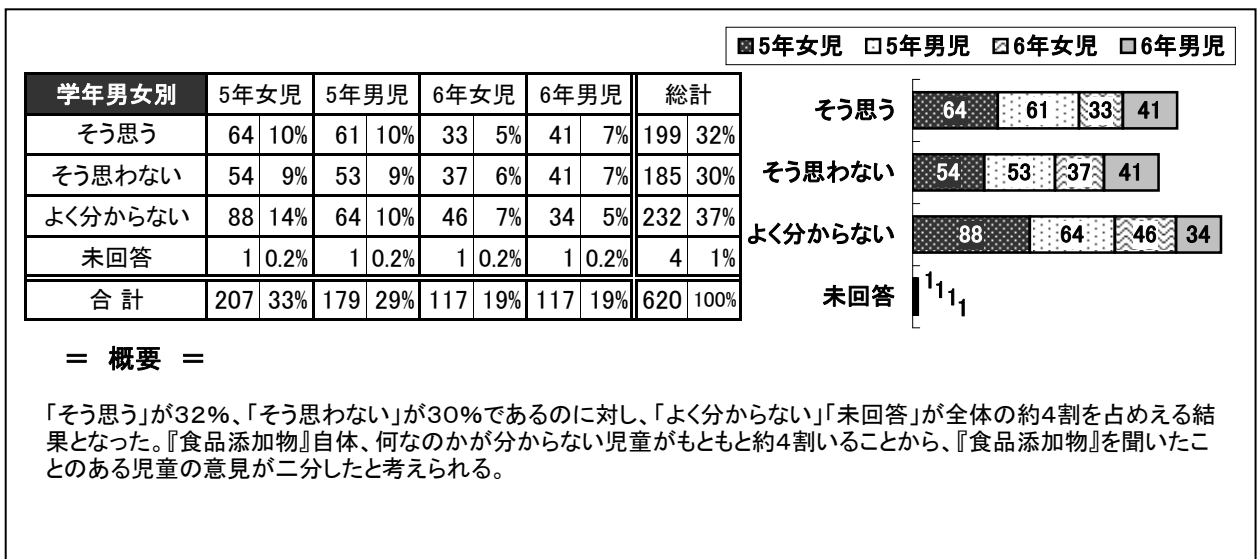
＝ 概要 ＝

男女別同様、学年別においても5年生・6年生は、ほぼ同じ構成比であった。

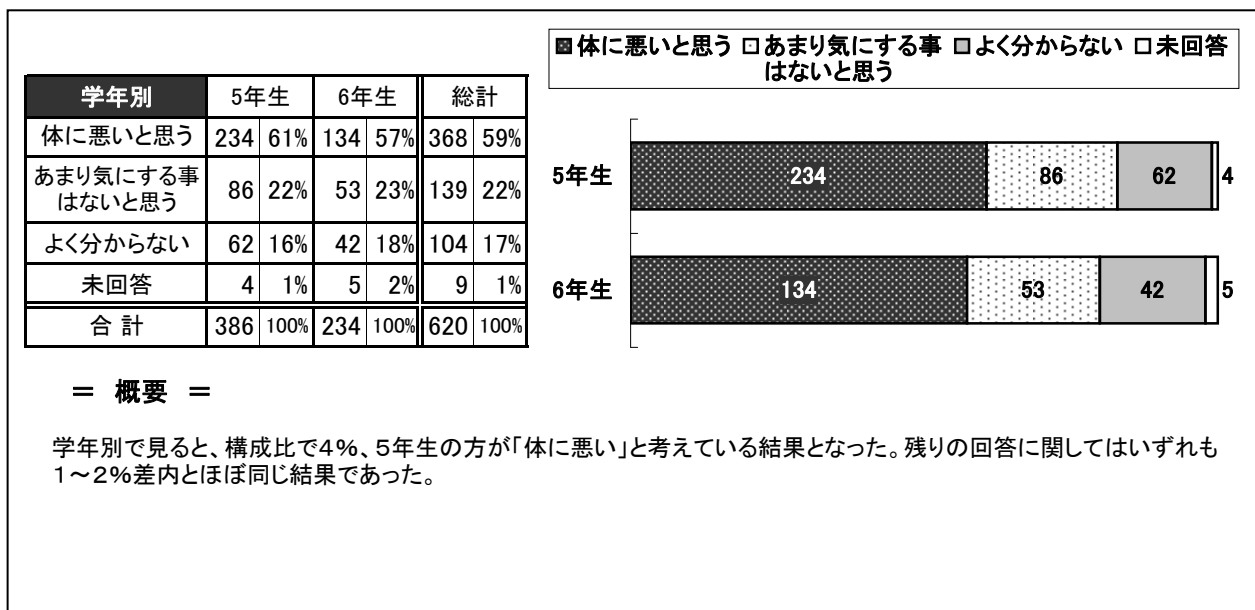
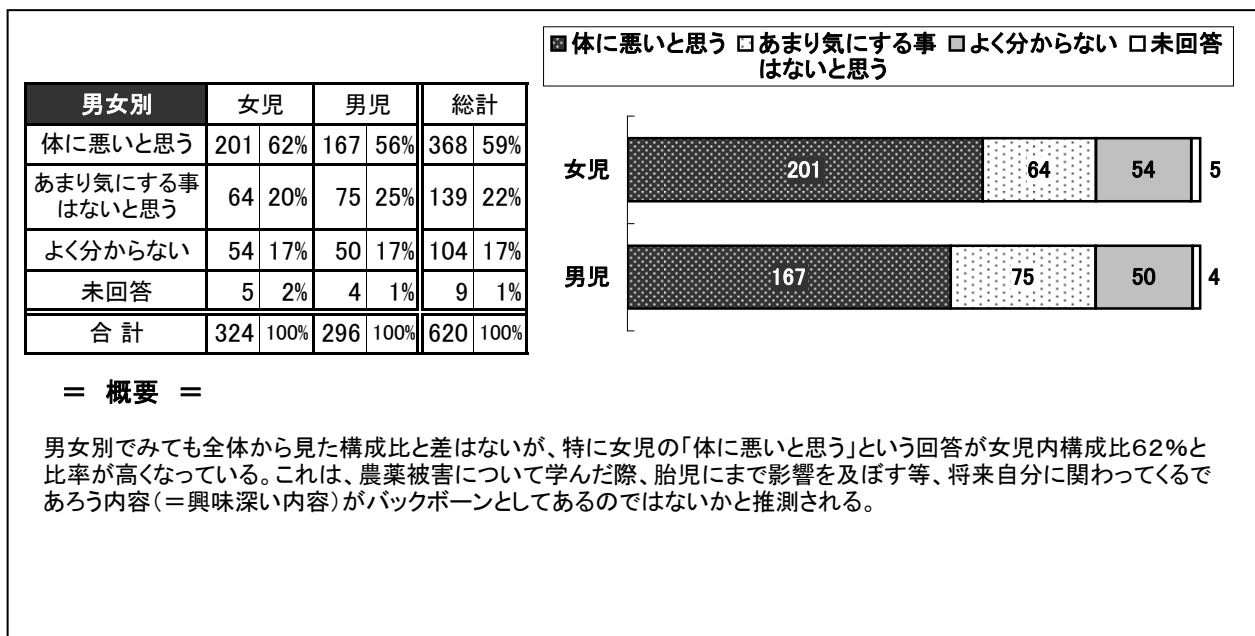
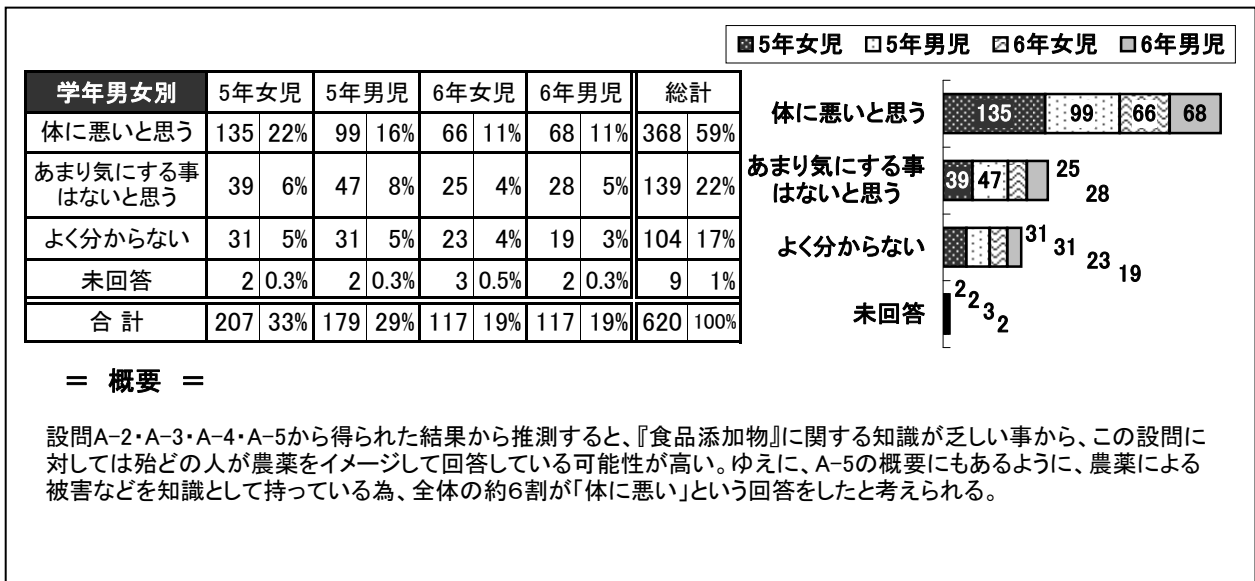
A-6. いつも食べている食品には、農薬や食品添加物がどのくらい入って(残って)いると思いますか



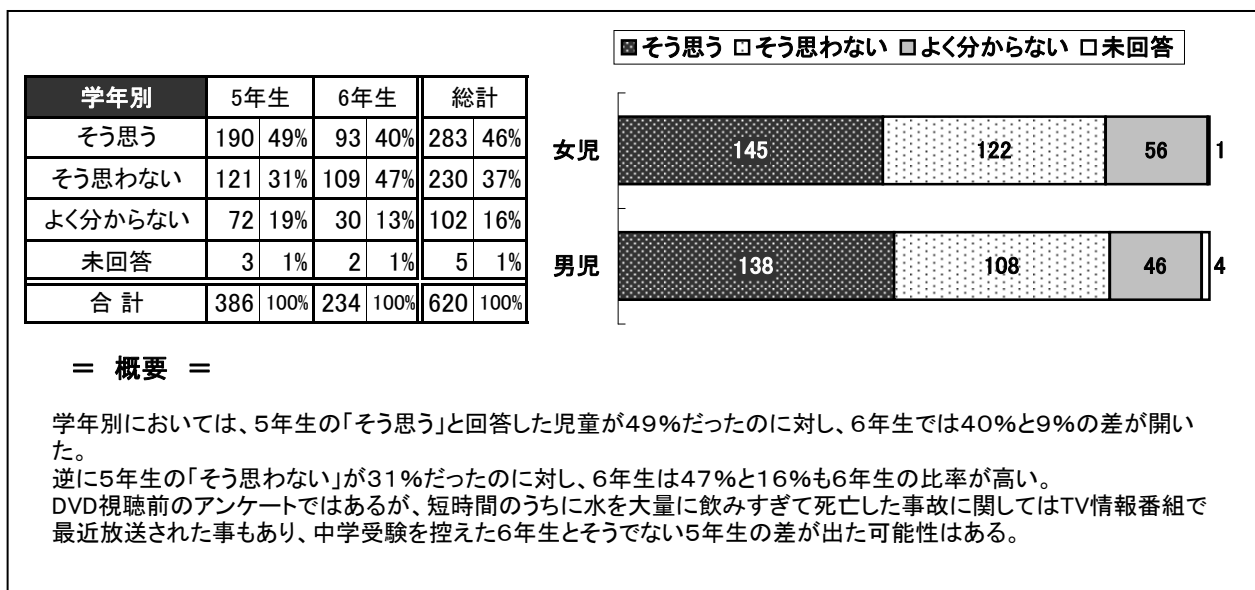
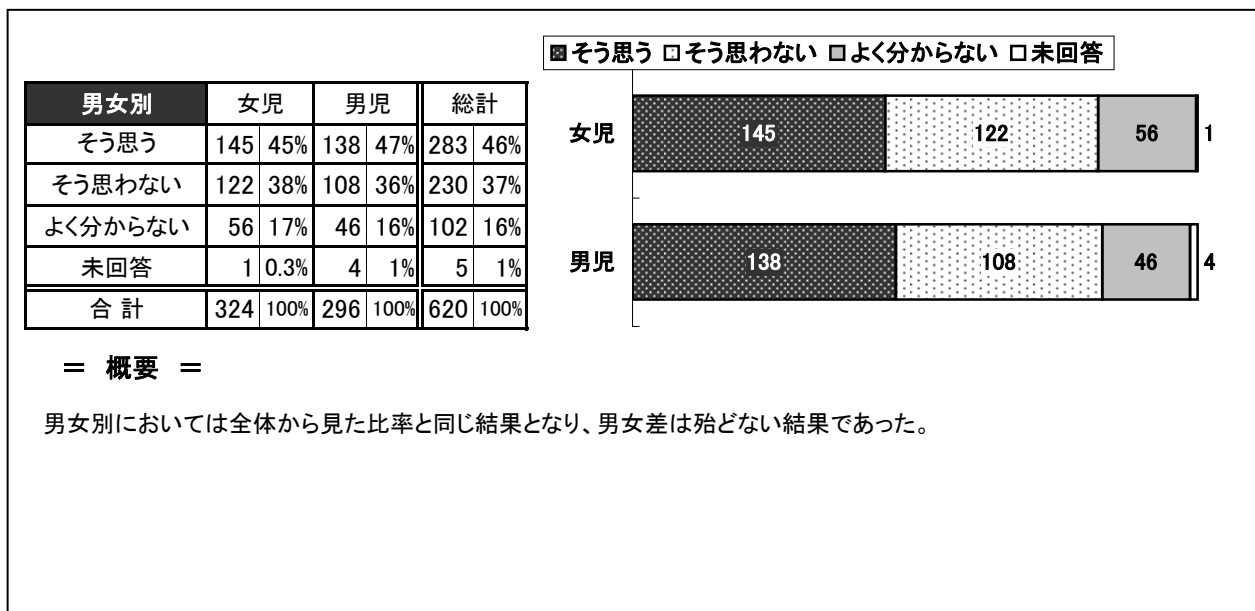
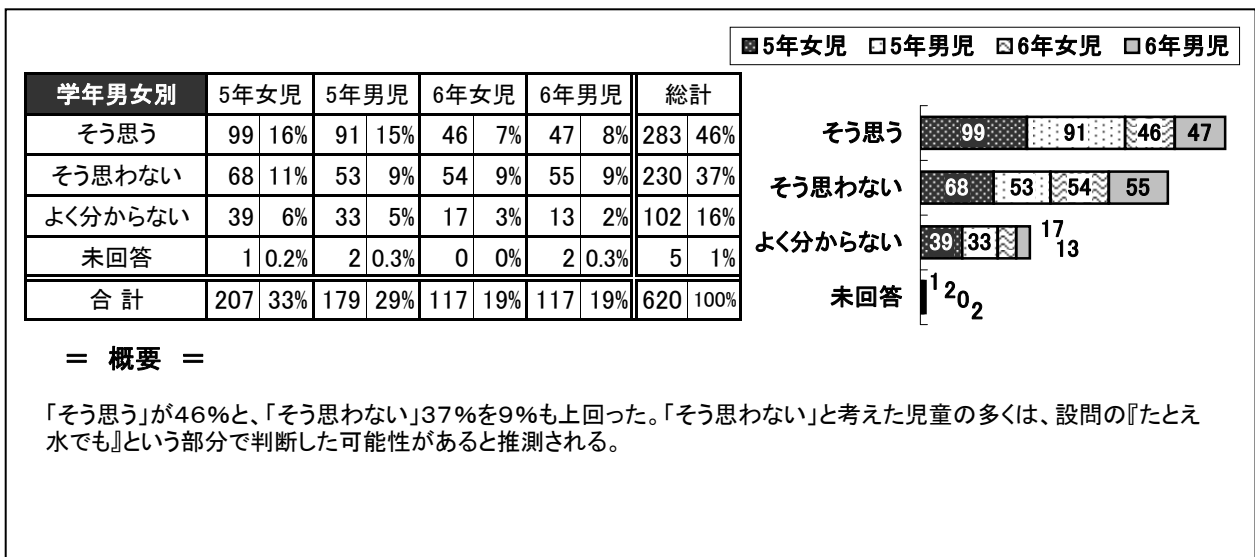
A-7. 農薬や食品添加物は、食品を食べるたびにどんどん体の中にたまっていく



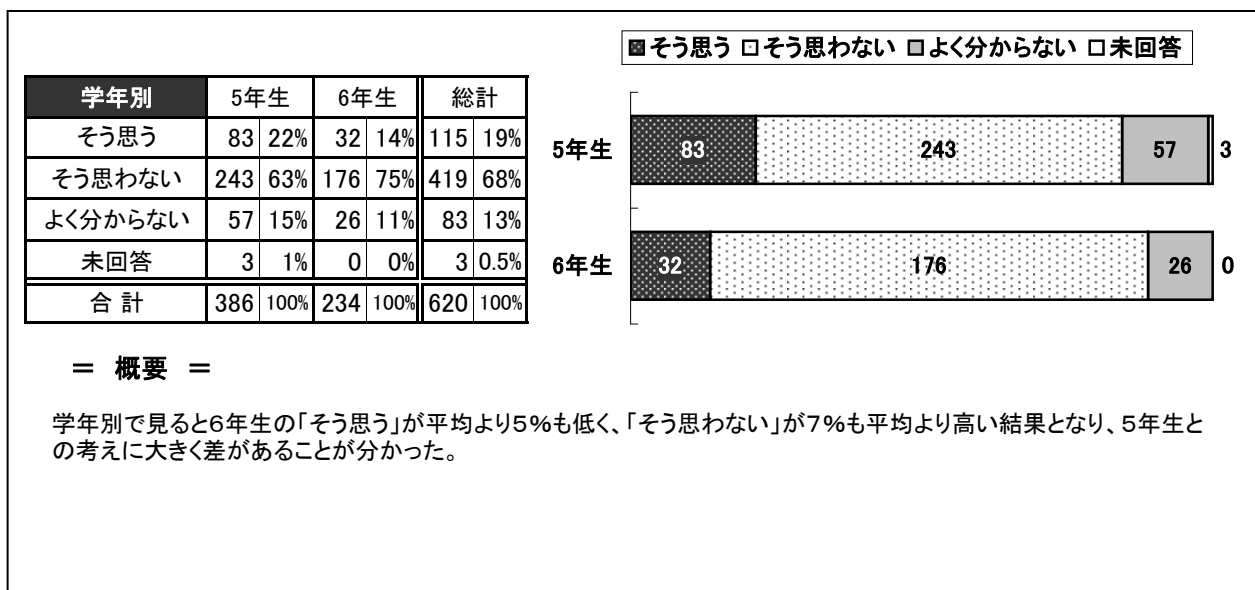
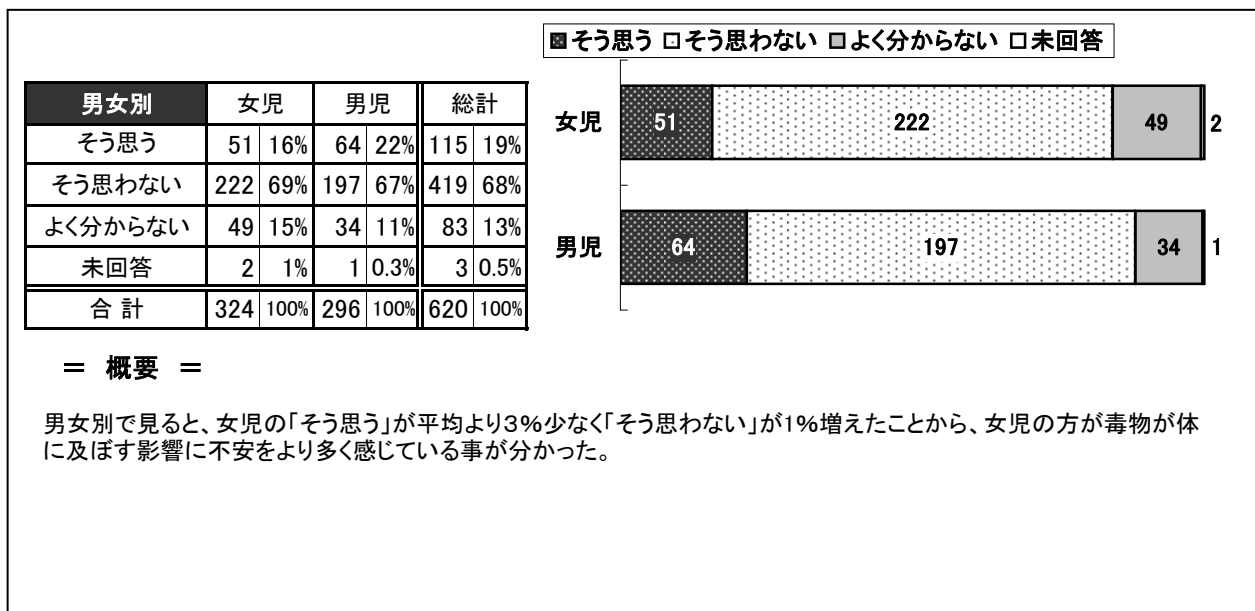
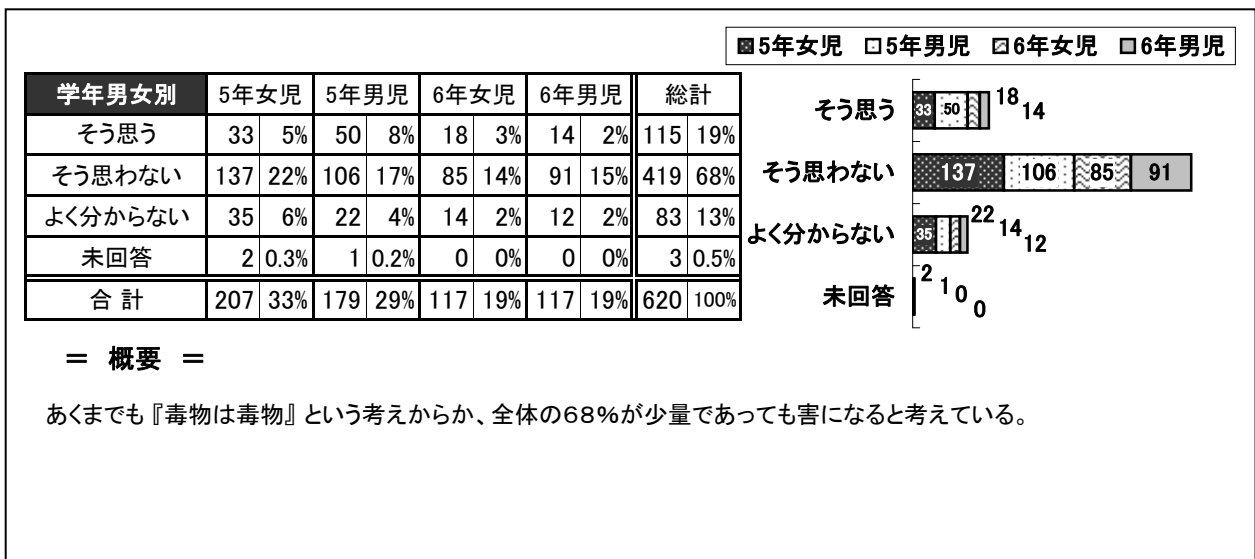
A-8. いつも食べている食品に入って(残って)いる食品添加物や農薬について



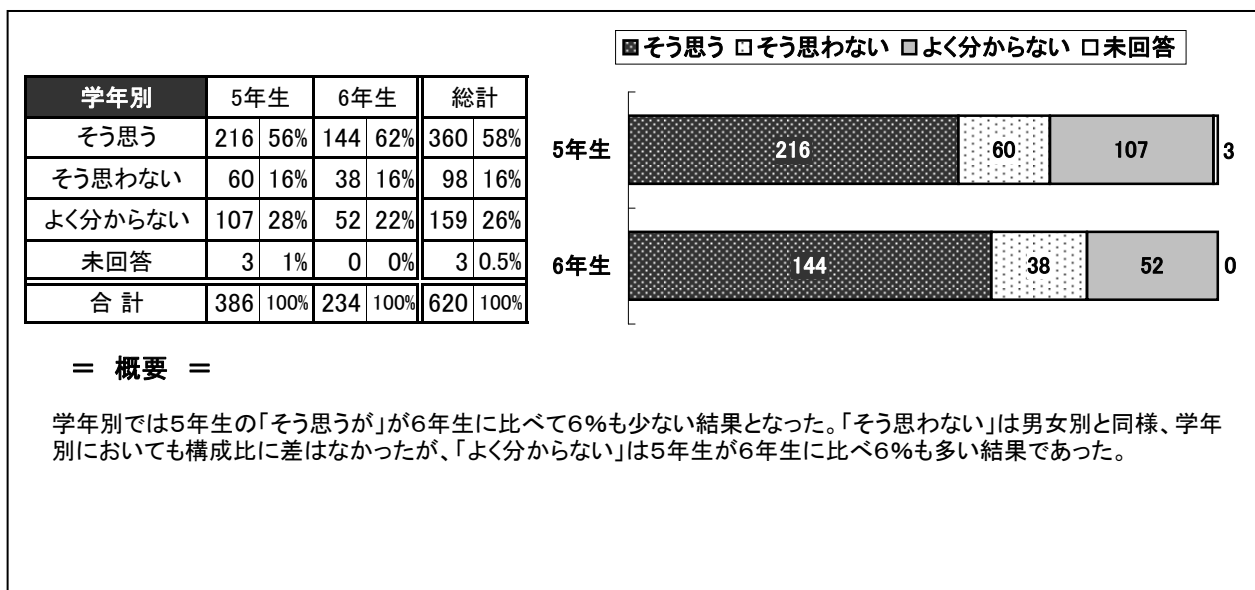
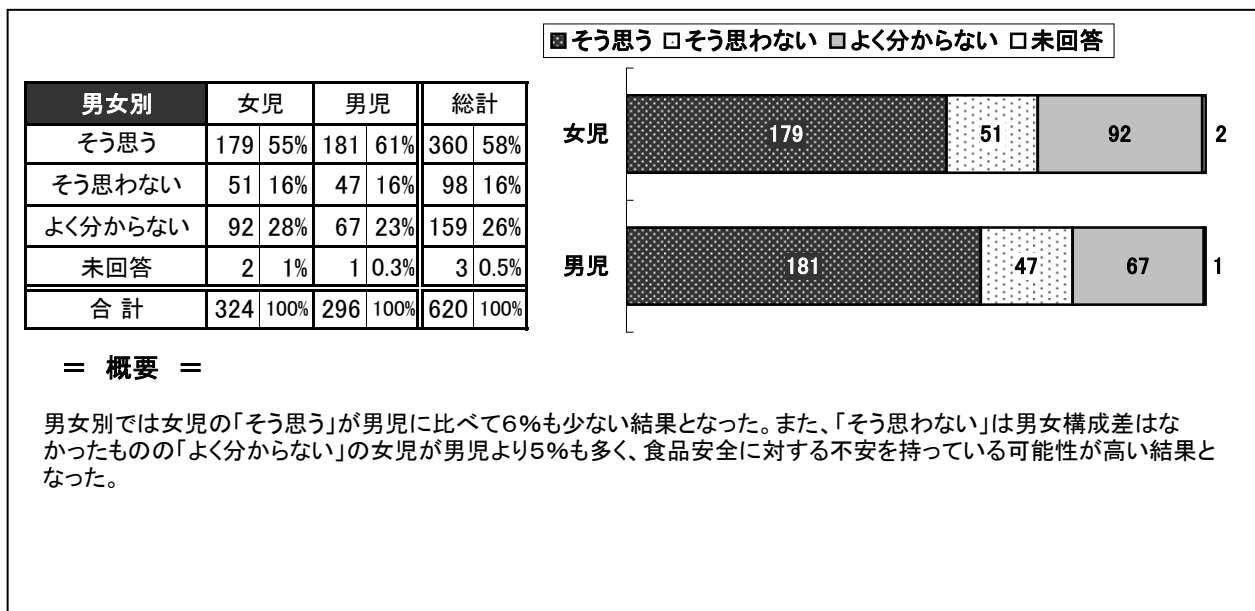
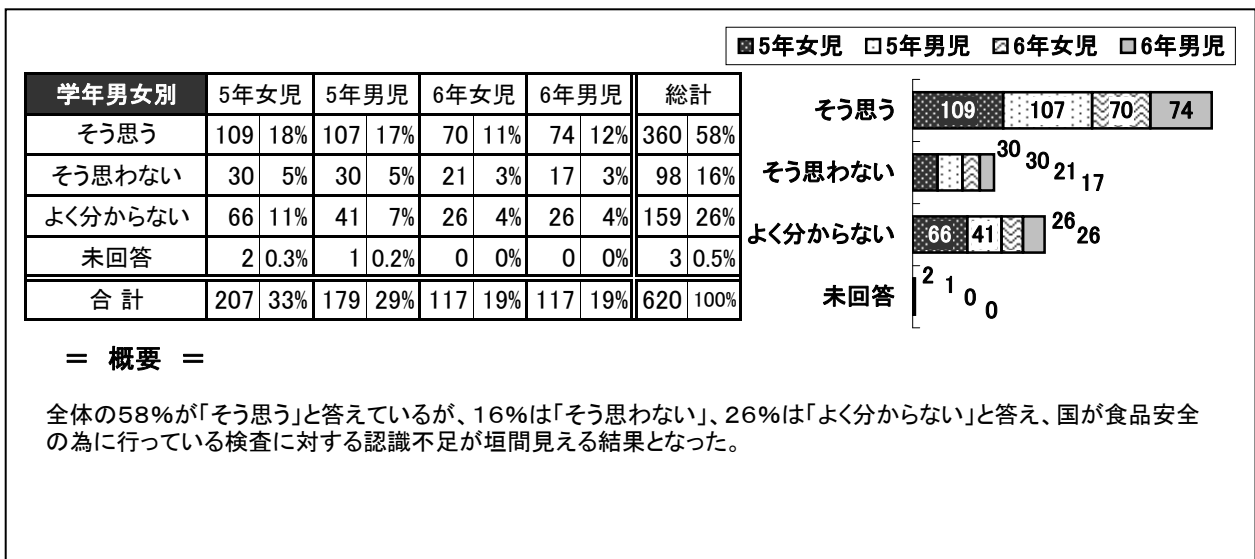
A-9. 体に必要なものでも(例えば水でも)取りすぎたら死んでしまうこともある



A-10. 毒物でもごく少しなら害にならないことがある



A-11. 食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて、食品に入っている量を決めている



A-12. 食の安全性について知りたいこと・心配なことがあれば書いてください

- **食品添加物・農薬の語彙に関する意見・質問** 23件
 - ・ 農薬や食品添加物とは、どんな物なのかを知りたい
 - ・ 添加物とか農薬は何から出来ているのかを知りたい
- **添加物・農薬の危険性に関する意見・質問** 82件
 - ・ 農薬は悪いイメージなのですが、本当に体に悪いの？
 - ・ 農薬は絶対必要なの？
 - ・ リンゴやアメリカンチェリーなどを洗う時、水をはじくのは農薬を使っているから？
 - ・ どんなものが一番農薬が使われているの？
 - ・ 1つの食べ物にどれだけ農薬が使われているの？
 - ・ 有機野菜とどう違うの？
 - ・ 食品添加物や農薬がどれくらい入っているの？
 - ・ 未来には体に害の無い食品添加物や農薬が出来るように改善されているか知りたい
 - ・ 加工食品に入っている食品添加物は本当に安全なの？
 - ・ 食品添加物は体に悪いの？
 - ・ どのくらい添加物が入っているの？
 - ・ 食品添加物が入っているものをずっと食べているとどうなるの？
 - ・ 色素をつけているお菓子は怖いと思う
 - ・ 添加物って環境に悪いの？
- **食品に付く虫に関する意見・質問** 6件
 - ・ キャベツなど野菜を買った時に虫などが付いているのが気になります
 - ・ 農薬を使わずに虫などを追い払う方法はないのかな
- **食中毒や賞味期限に関する意見・質問** 6件
 - ・ 食品を食べて食中毒にならないか心配
 - ・ 賞味期限が一日でも過ぎていたら食べない方が良いのか
 - ・ 賞味期限と消費期限の違いが分からない
- **外国産の食品(輸入品)に関する意見・質問** 42件
 - ・ 食品はどれくらい輸入しているのですか
 - ・ 外国産の食べ物で、危険や害があるのかはどうやって判断するの？
 - ・ 外国産の食品(輸入している食品)は本当に安全かどうか心配
 - ・ どの国で作られているか。何が安全なのか。何を使って作ったり、育てたりしたか。
 - ・ どの国の食べ物とか農薬がどれくらい含まれているのかを知りたいです
 - ・ 外国産のものには毒物や薬品がけっこう入っていると聞いた事があるけど本当ですか
 - ・ あんまり外国産のは買いたくない
 - ・ 輸入は控えめにしたい
 - ・ 外国と日本の安全基準の違い
 - ・ 中国の食べ物は食べていいのか
 - ・ 中国産の野菜にJASマークが付いていることがあるが本当に基準に合格しているのか
 - ・ 中国産の冷凍餃子はいったいどうなっているのですか
 - ・ 中国からの輸入をやめて欲しい
 - ・ 中国産の食品が売っているけど不安なので買いたくない
 - ・ 中国産は買わない方が良いと言いますがなぜなんですか？中国産でも安全なものはあると思うんですが

■ 表示・食品偽装に関する意見・質問

18件

- ・使われている添加物や原産国は全てにしっかり表示されているのか
- ・本当に国産か分からないし〇〇県と偽って出すメーカーもあるから本当かどうか信じられない
- ・食品会社も不景気なのではないと思うが偽装はしないで欲しい
- ・農薬とかを使っていないものがあるけど本当に使っていないのか
- ・もうちょっとしっかりと検査して欲しい
- ・無農薬野菜などは本当に無農薬なのか
- ・本当に毒が入っていないか証明して欲しい
- ・野菜などを買う時に袋に分かりやすく農薬が入っているかどうかを知りたい
- ・農薬の量などを表示して欲しい

■ その他

40件

- ・食品の安全はどのようにして守られていますか？
- ・食品は全て安全なのか
- ・本当に安全性を保証しているのか
- ・食品にもし毒物が入っていたりしたら、国はどんなふうに調べるの？
- ・いつちゃんと調べているんですか
- ・食べ物での害とかは国が補償してくれるんですか
- ・いつも普通に食べている食品の中に、体に悪い物が入っていないのか？
- ・食品の中に変なものが入っていないか心配
- ・体に害のある物を気付かないうちに取り入れていないか心配です。食品には何を使っているか知りたいです。
遺伝子組み換えは体に悪いの？
- ・酸性雨とか掛かったのも食べてるの？
- ・よくお店で売っているおにぎりには化学調味料が入っていると聞いた事があるんですが、化学調味料とは何ですか？
- ・私は好き嫌が多いので、自分の体はどうなのかと思います。
- ・じゃがいもについている芽を取らないで煮て食べたらどうなるか知りたい。
- ・濃い味の物は、あまり食べない方が良いですか？

= 概要 =

A-12. では、アンケートに書かれた内容を大きく7つに分類し、代表的な意見や質問を各分類の下に列記した。

記述の傾向としては、設問に出てきた聞きなれない言葉や投げかけに対する質問や、実体験に基づいた意見や質問が多くあげられた。

特に多かったのは、・食品添加物とは何か ・農薬や体に悪いのか ・食品添加物は体に悪いのか(安全なのか) ・外国製品の安全性に対する疑問(不信任)であった。

特に ■ 外国産の食品(輸入品)に関する意見・質問 にも列記している通り、約2年前の2008年に起きたいわゆる『毒入り餃子事件』が、子供心に強い衝撃を受けたらしく、国名を名指しで挙げており、中国産に対して根強い不信任があることが分かる。

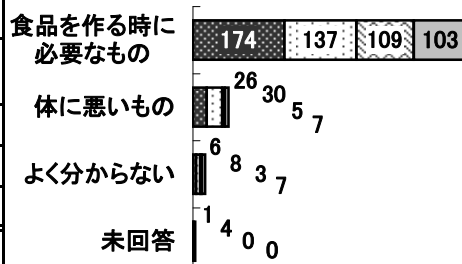
また、同時期に起こった食品偽装に関する意見も多く、食に対する安心感が低い印象がある。

その他に、・遺伝子組み換え や ・酸性雨 など、昔にはなかった現象に対する不安感や、健康であるためにどういう食生活にすれば良いのか、という意見も少なからず存在する。

B-1. 食品添加物のイメージは？

学年男女別	5年女児		5年男児		6年女児		6年男児		総計	
食品を作る時に必要なもの	174	28%	137	22%	109	18%	103	17%	523	84%
体に悪いもの	26	4%	30	5%	5	1%	7	1%	68	11%
よく分からない	6	1%	8	1%	3	0.5%	7	1%	24	4%
未回答	1	0.2%	4	1%	0	0%	0	0%	5	1%
合 計	207	33%	179	29%	117	19%	117	19%	620	100%

■ 5年女児 □ 5年男児 ▨ 6年女児 ▩ 6年男児

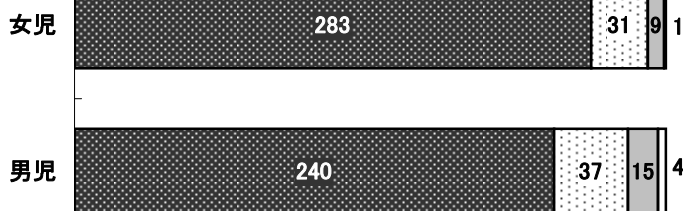


= 概要 =

全体の84%が「食品を作るときに必要なもの」と回答しているが、11%の児童は「体に悪いもの」残りの5%は「よく分からない」「未回答」という結果であった。

男女別	女児		男児		総計	
食品を作る時に必要なもの	283	87%	240	81%	523	84%
体に悪いもの	31	10%	37	13%	68	11%
よく分からない	9	3%	15	5%	24	4%
未回答	1	0%	4	1%	5	1%
合 計	324	100%	296	100%	620	100%

■ 食品を作る時に必要なもの □ 体に悪いもの ▨ よく分からない ▩ 未回答

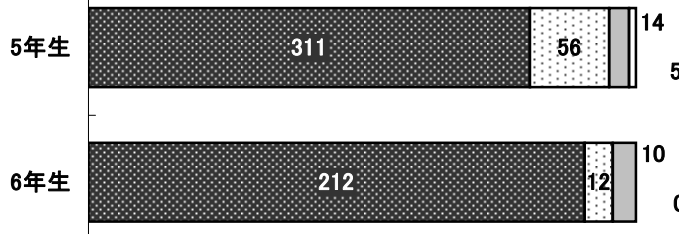


= 概要 =

男女別で見ると女児の方が男児より「食品を作るときに必要なもの」選んだ比率が6%多い結果となり、女児の方が深く理解できたと言える。

学年別	5年生		6年生		総計	
食品を作る時に必要なもの	311	81%	212	91%	523	84%
体に悪いもの	56	15%	12	5%	68	11%
よく分からない	14	4%	10	4%	24	4%
未回答	5	1%	0	0%	5	1%
合 計	386	100%	234	100%	620	100%

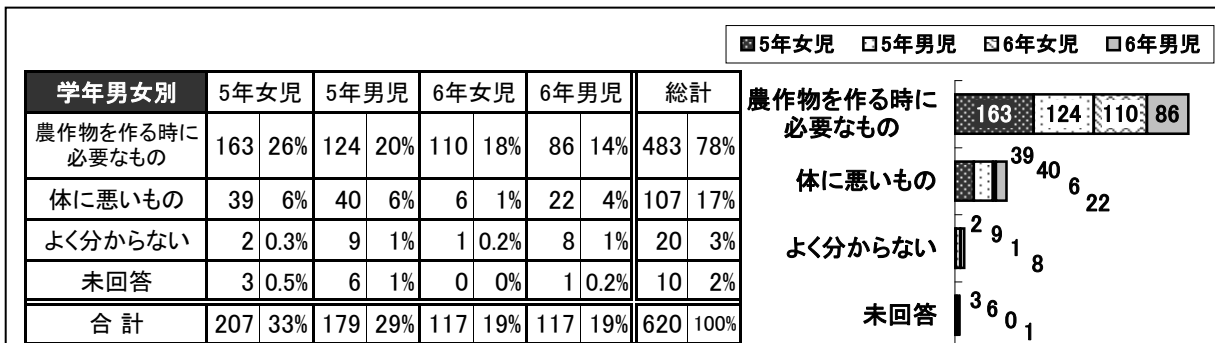
■ 食品を作る時に必要なもの □ 体に悪いもの ▨ よく分からない ▩ 未回答



= 概要 =

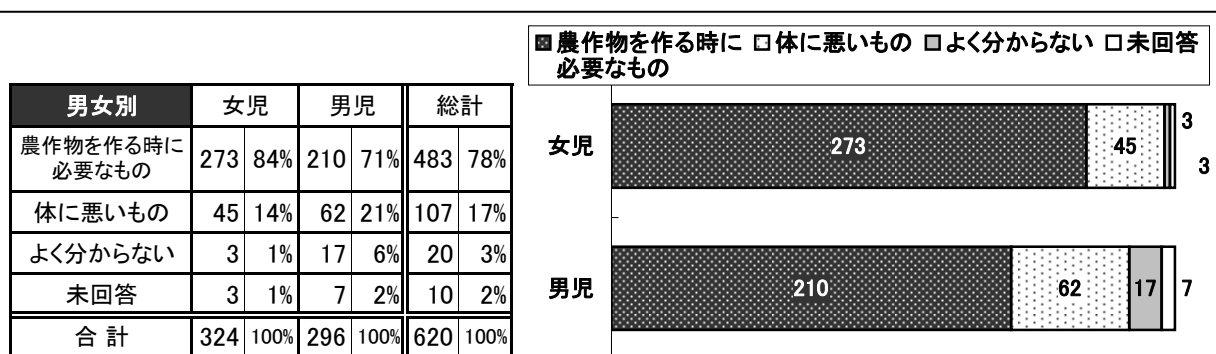
5年生の81%に対し、6年生の91%が「食品を作るときに必要なもの」を選択した。年齢の差による理解度の深浅はあると言える。

B-2. 農薬のイメージは？



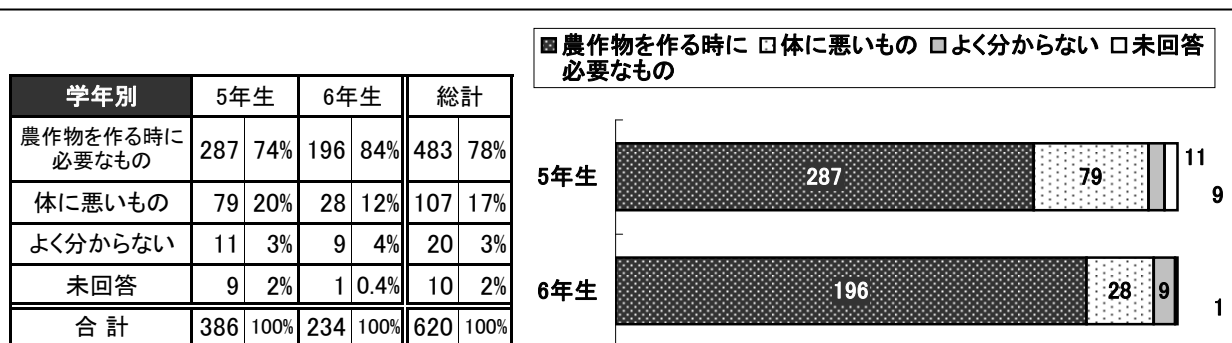
= 概要 =

全体の78%が「農作物を作るときに必要なもの」を選択したが、17%は「体に悪いもの」の意見を持っており、食品添加物よりも理解度が低い結果となった。



= 概要 =

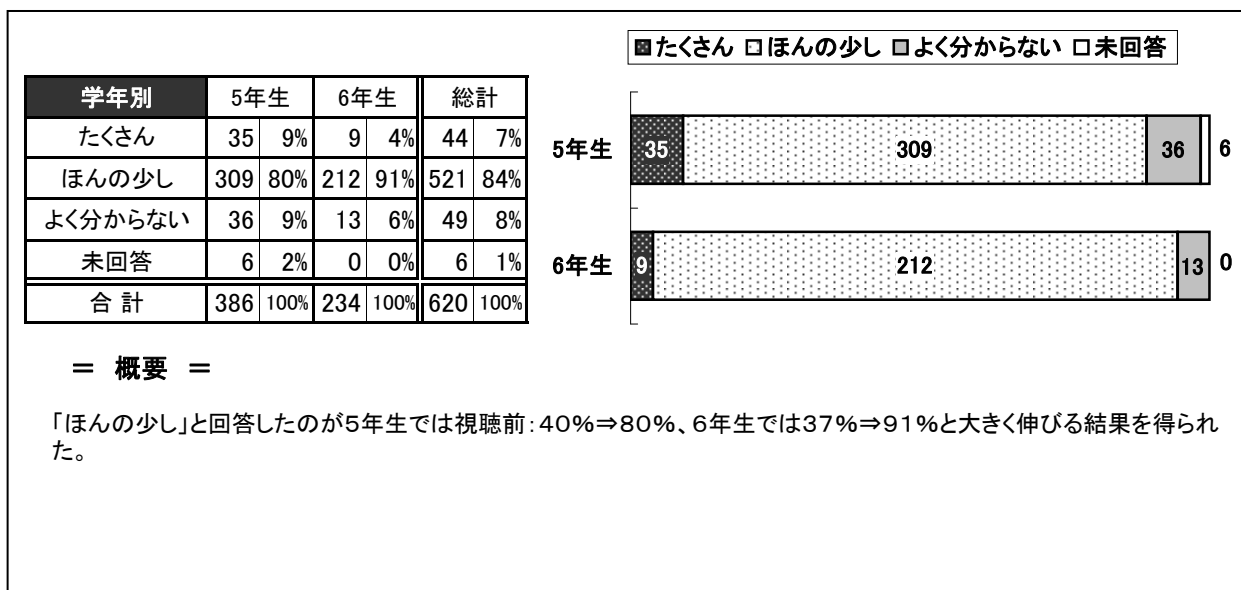
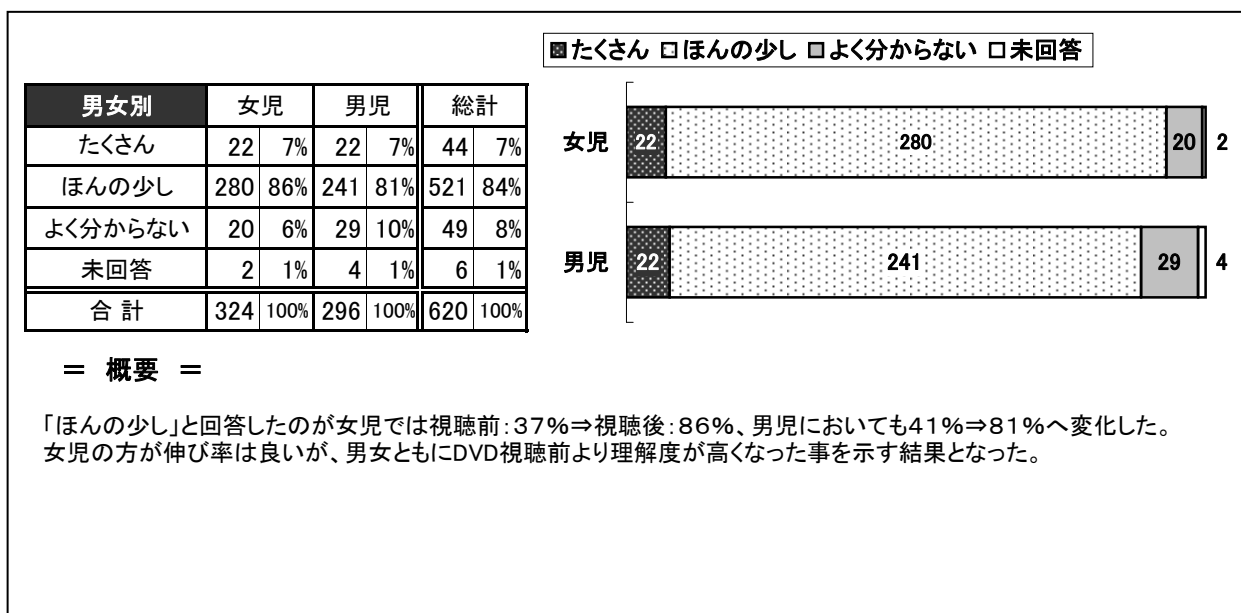
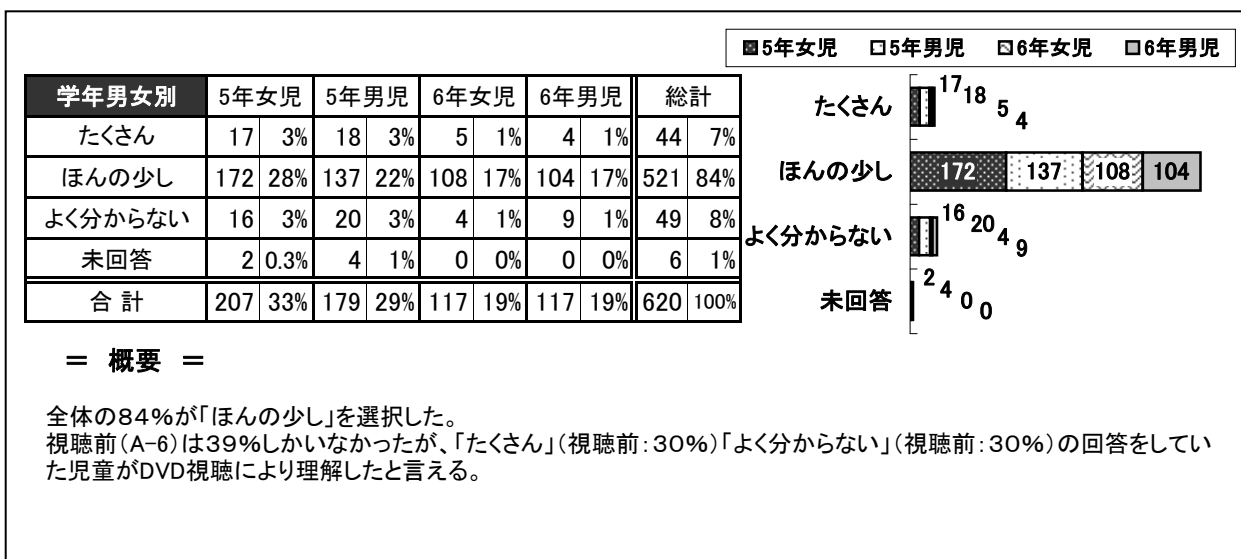
「農作物を作るときに必要なもの」の回答が、女児の方が男児よりも13%も高い結果となった。また男児の21%は農薬を「体に悪いもの」と強く認識している事が分かった。



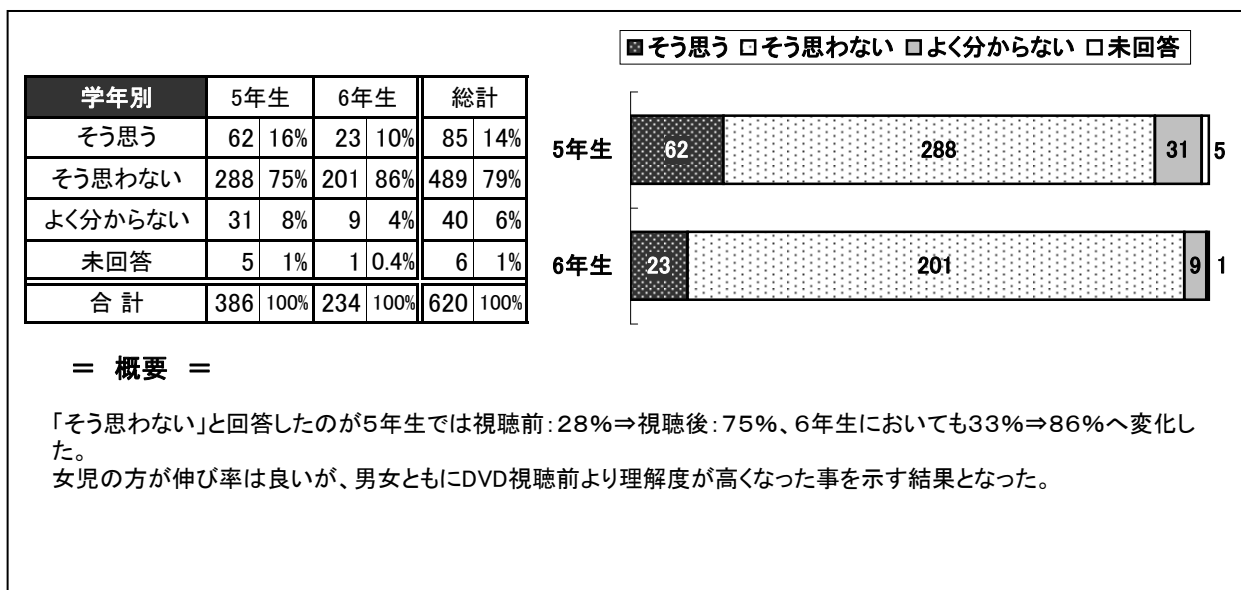
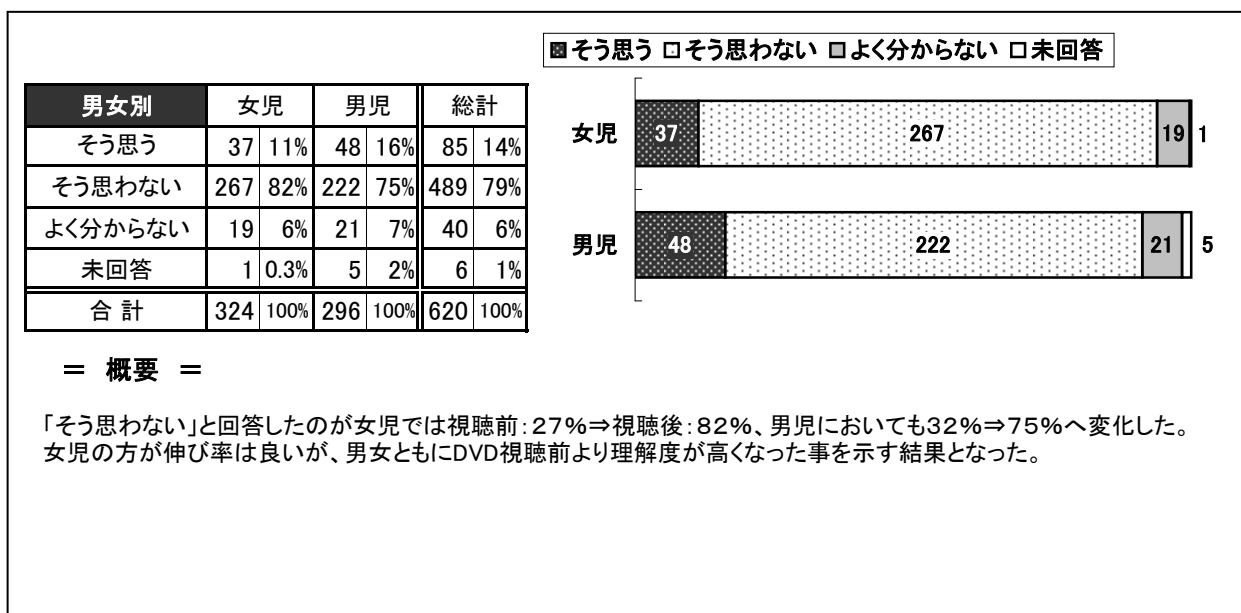
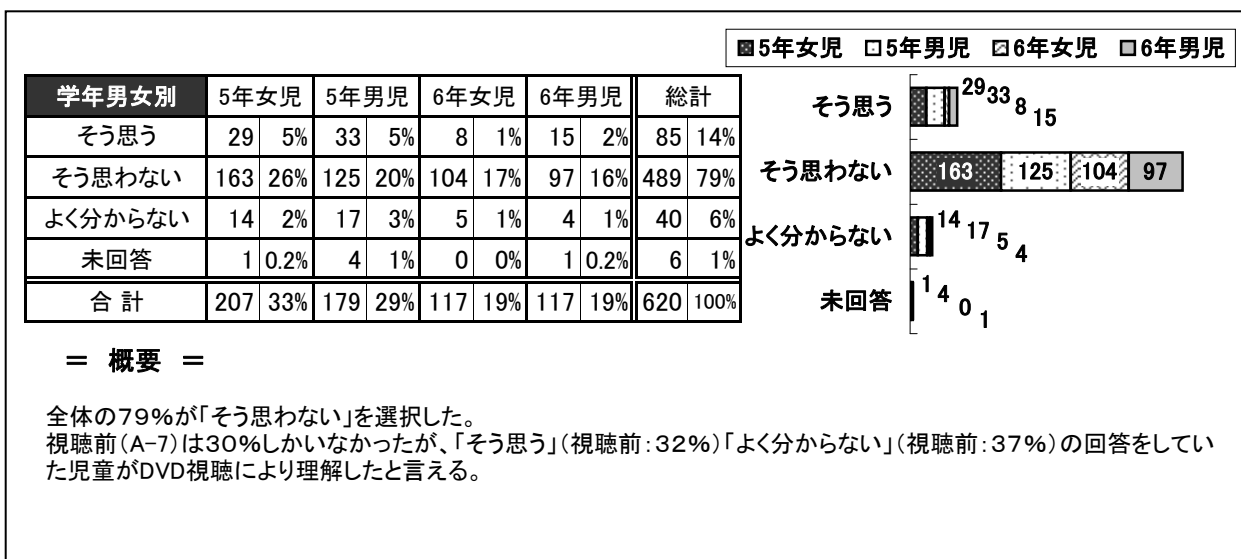
= 概要 =

5年生よりも6年生の方が、「農作物を作るときに必要なもの」を10%多く選んでいる。食品添加物の学年別同様、年齢差による理解度の深浅はあると言える。

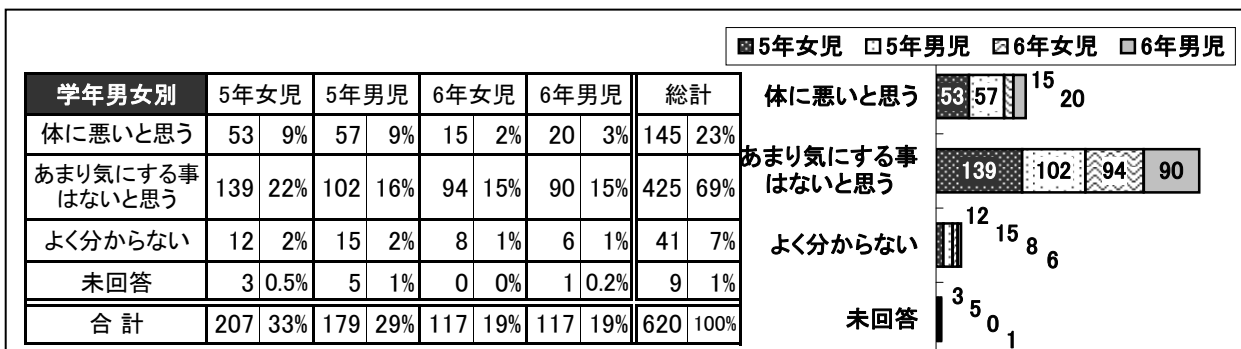
B-3. いつも食べている食品には、農薬や食品添加物がどのくらい入って(残って)いると思いますか



B-4. 農薬や食品添加物は、食品を食べるたびにどんだん体の中にたまっていく

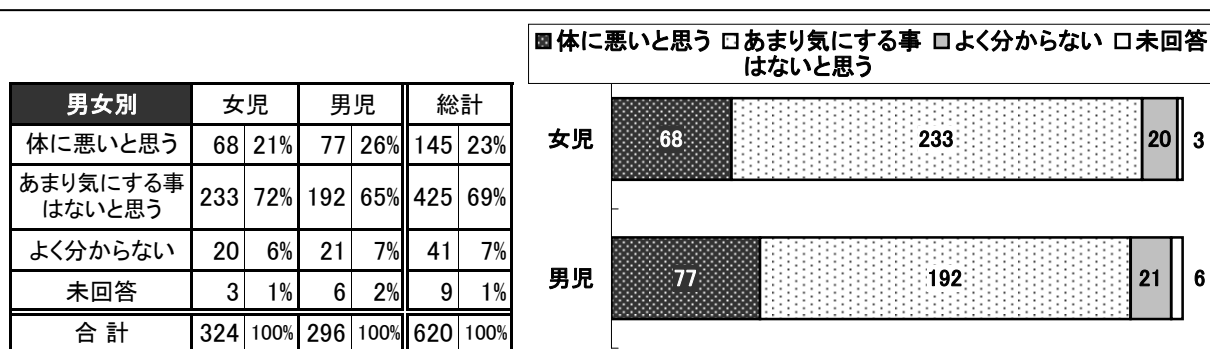


B-5. いつも食べている食品に入って(残って)いる食品添加物や農薬について



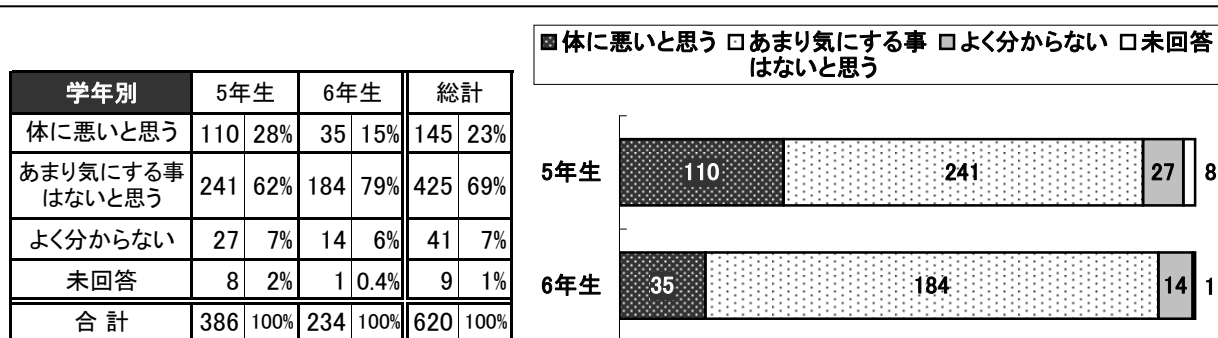
= 概要 =

全体の69%が「あまり気にする事はないと思う」を選択した。(視聴前:22%)
他の設問の視聴前後状況と比較すると、決して良い数字とは言いが、**「体に悪いと思う」と答えた児童が視聴前よりも36%も下がったのは良い傾向だと言える。**



= 概要 =

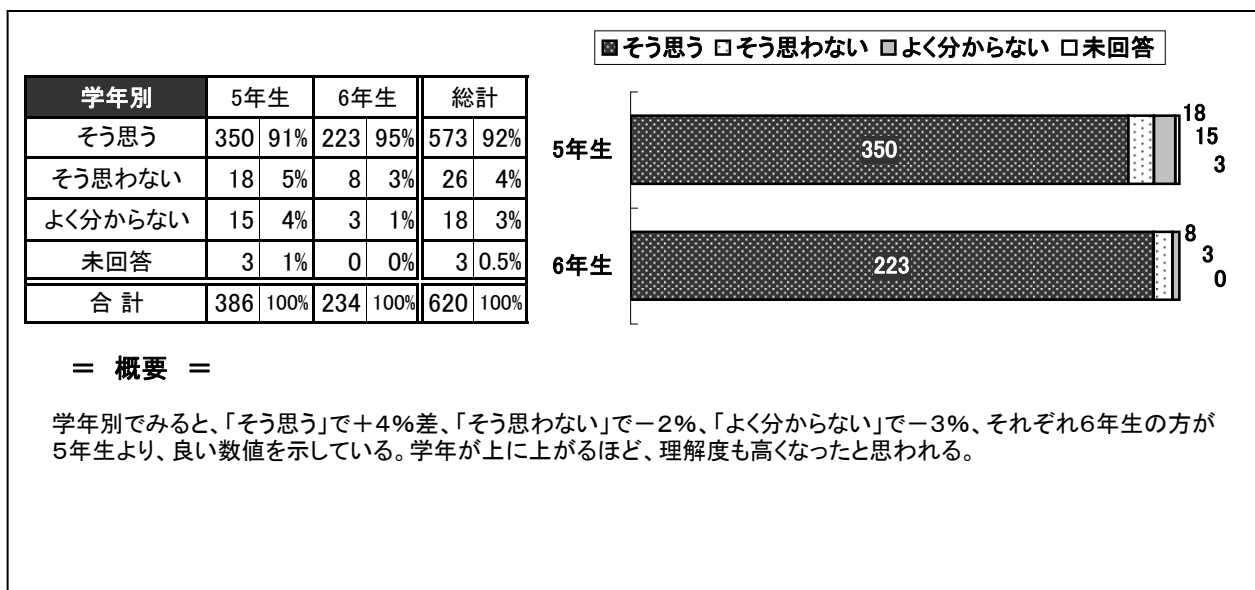
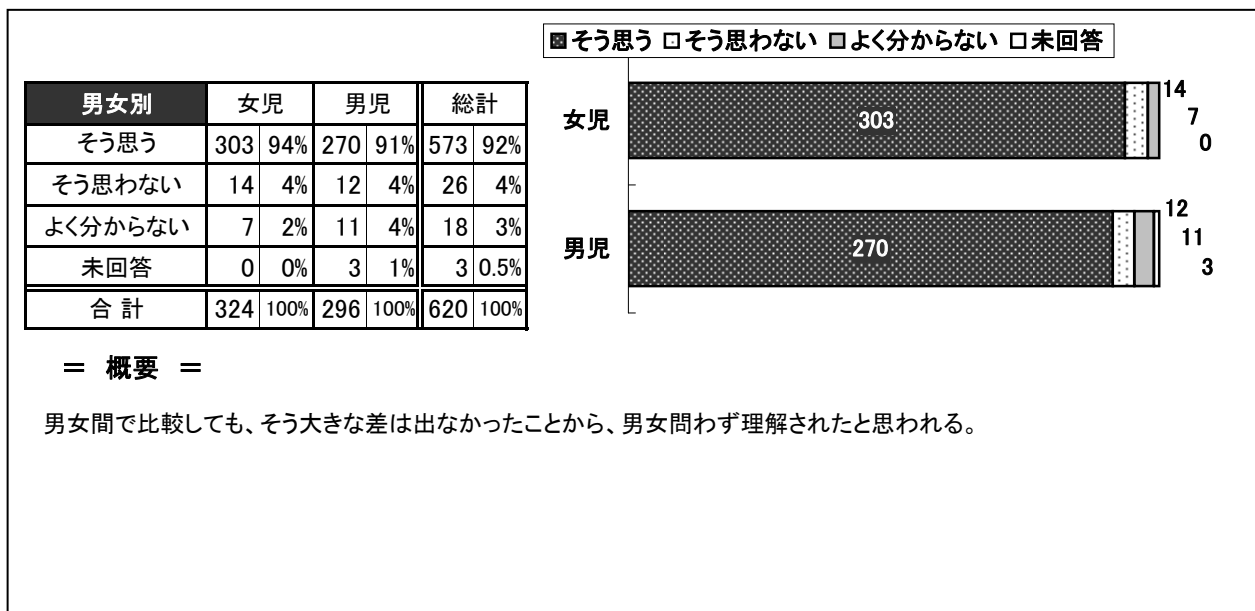
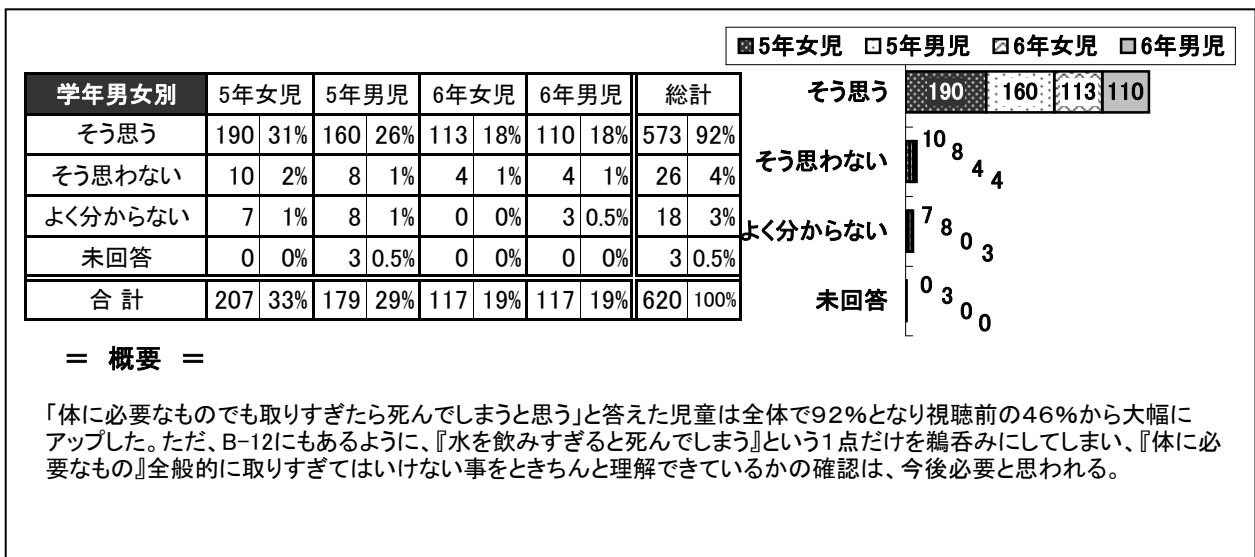
男女別で見ると「体に悪いと思う」と答えた児童が、女児では62%⇒21%、男児では56%⇒26%に下がり、代わりに「あまり気にする必要はないと思う」が女児では20%⇒72%、男児では25%⇒65%にアップした。



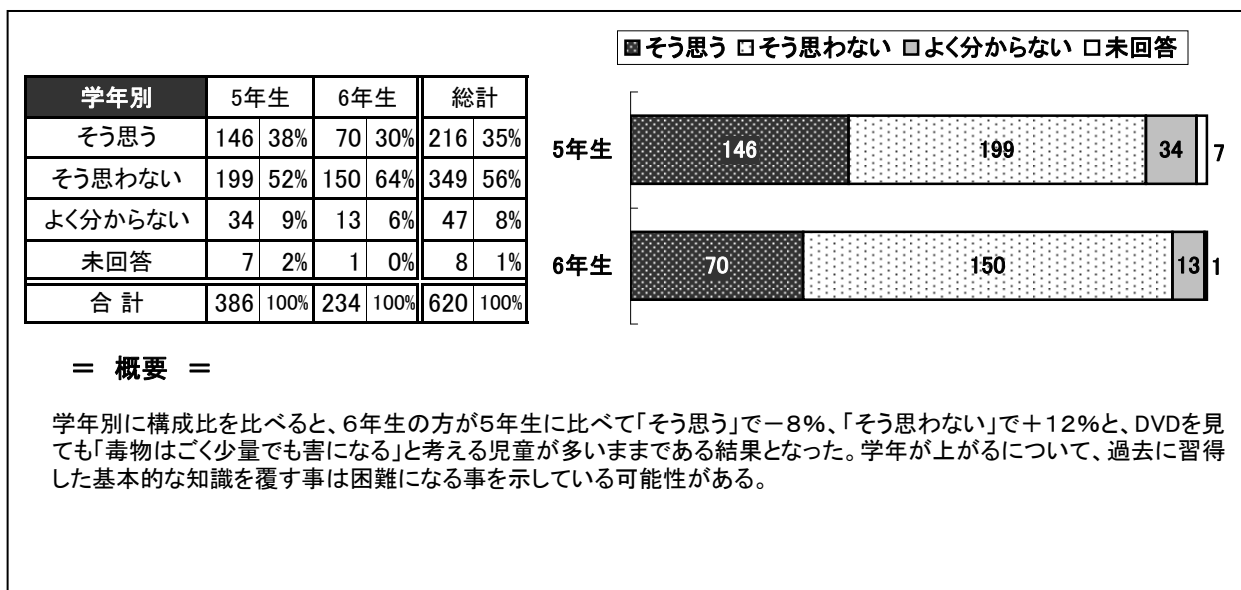
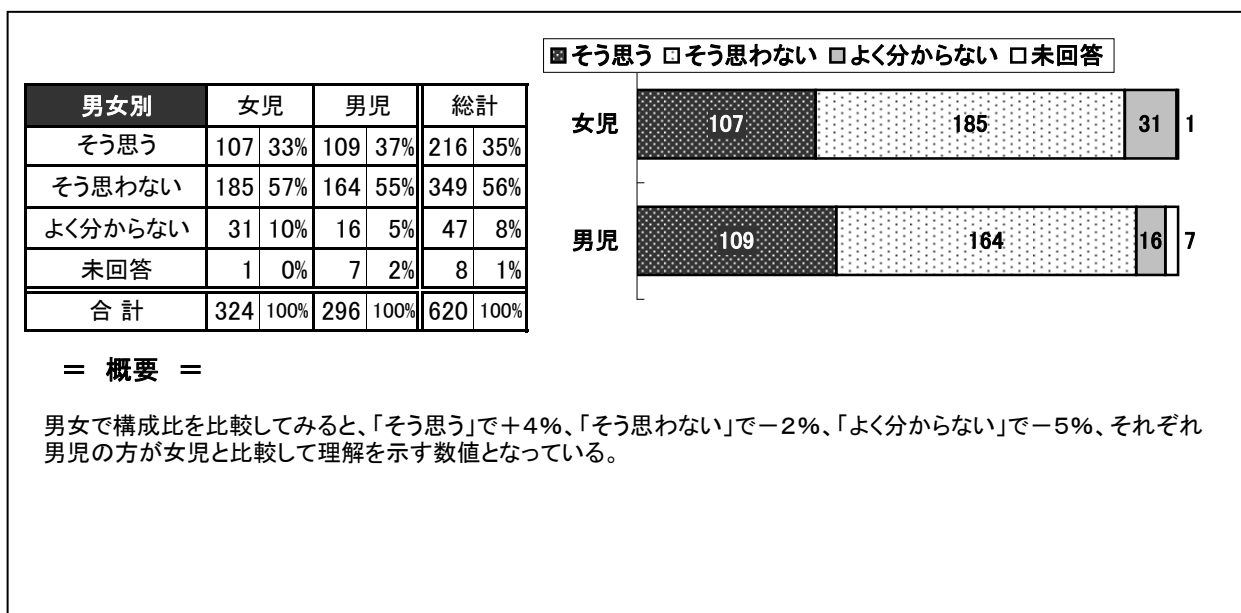
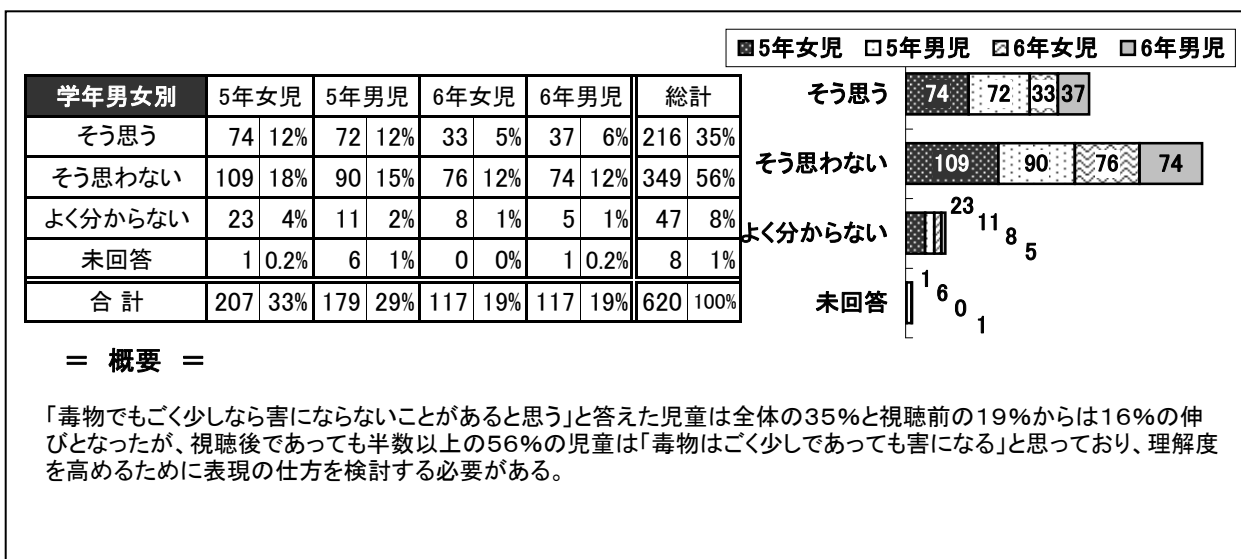
= 概要 =

学年別でも男女別同様、いい傾向を示しているが、「体に悪いと思う」の5年生が61%⇒28%と下がってはいるものの、6年生(57%⇒15%)と比較すると下げ幅も少なく人数もまだ多い年齢による理解度の深浅があると考えられる。

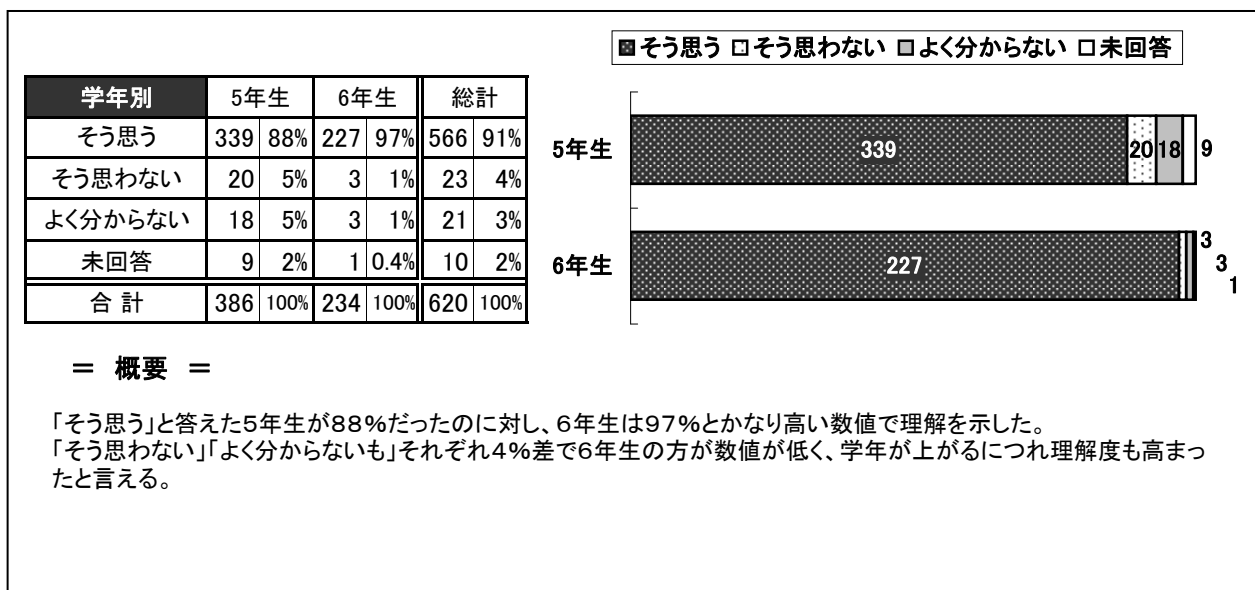
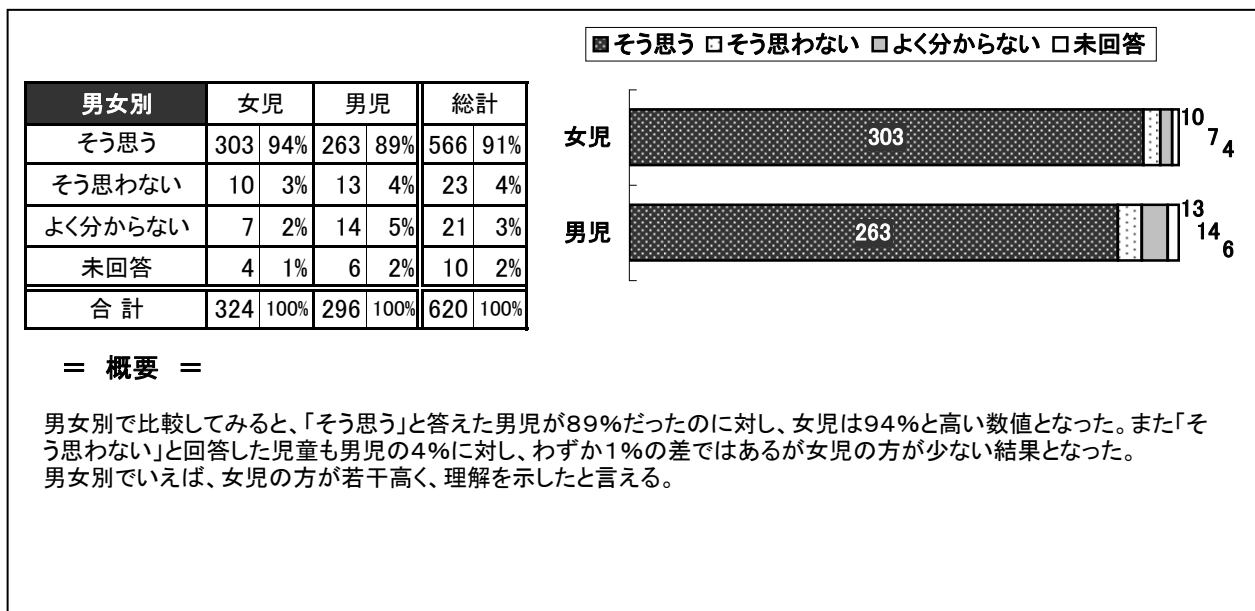
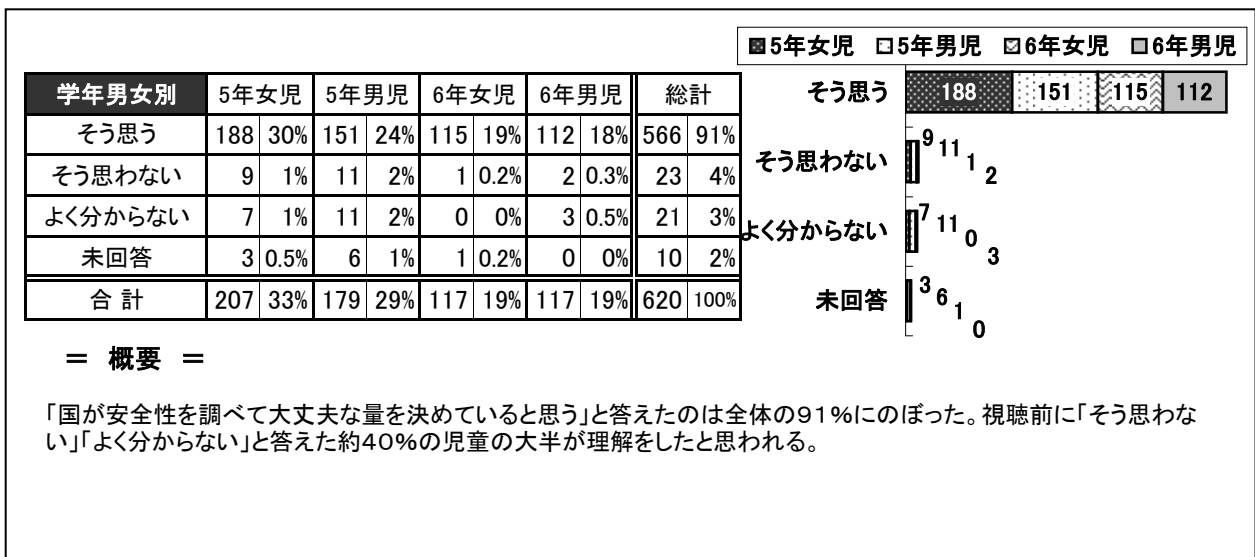
B-6. 体に必要なものでも(例えば水でも)取りすぎたら死んでしまうこともある



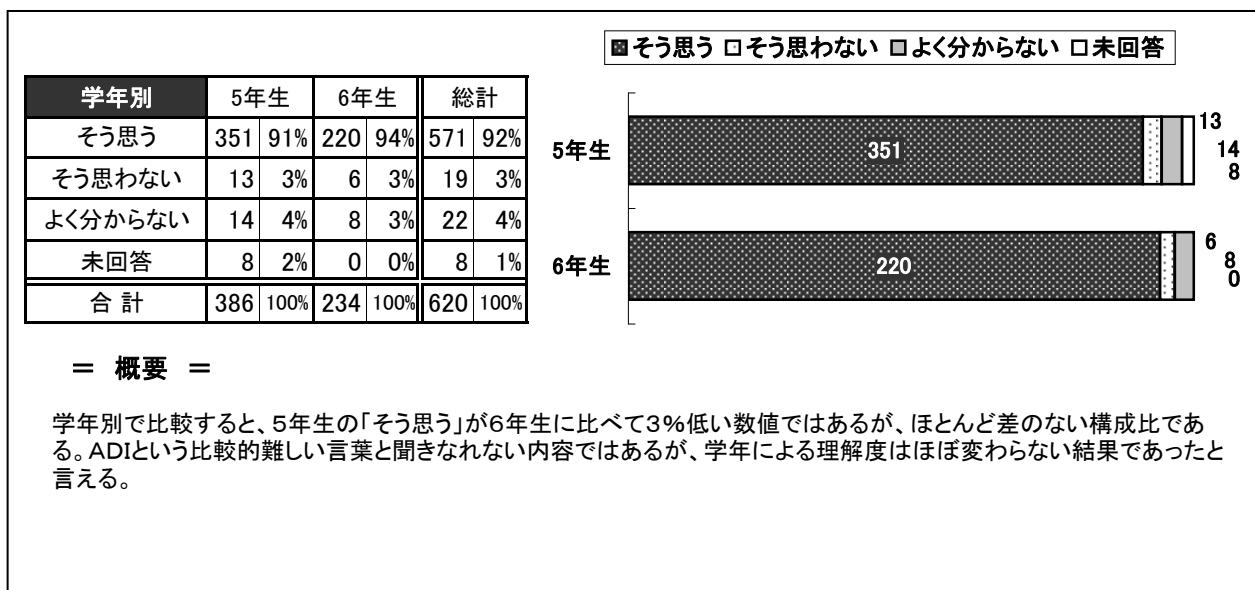
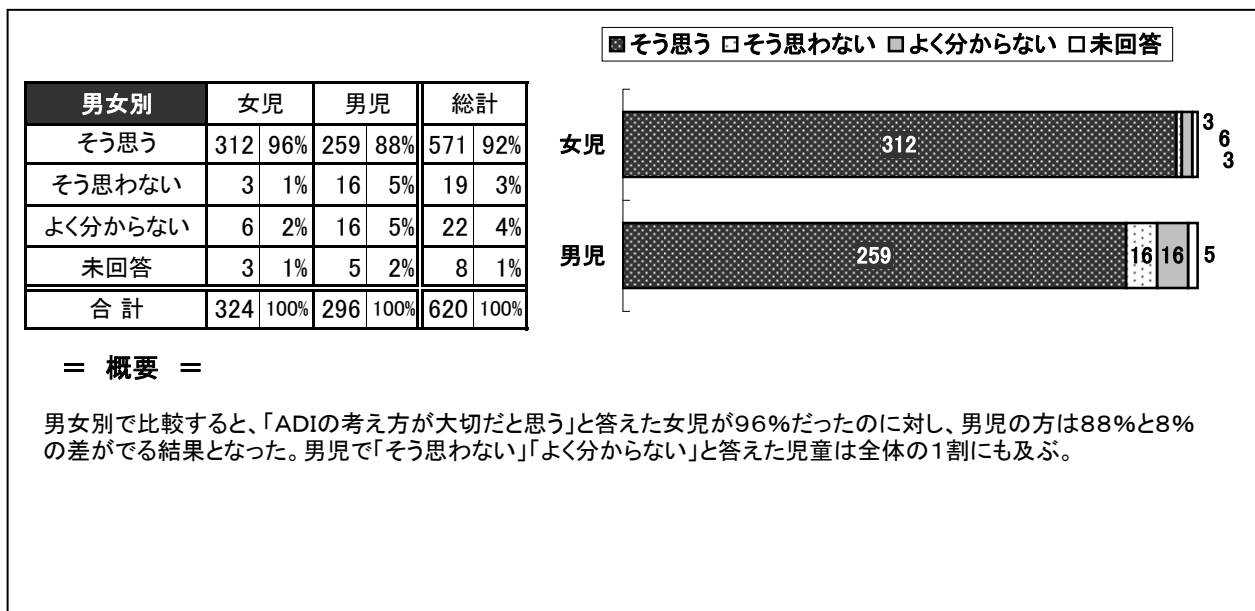
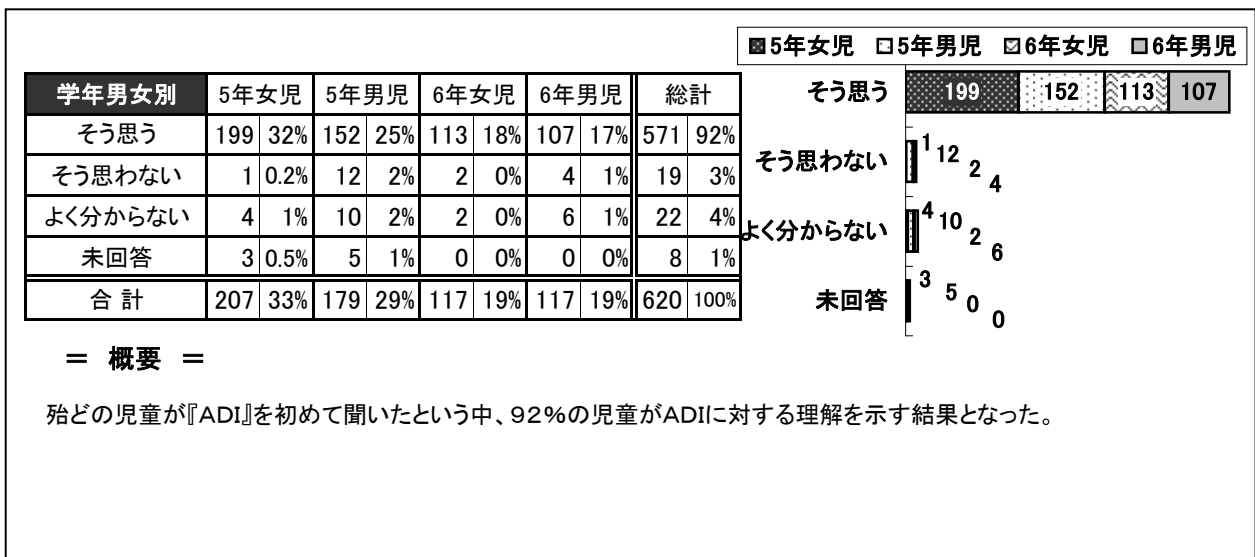
B-7. 毒物でもごく少しなら害にならないことがある



B-8. 食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて食品に入っている量を決めている



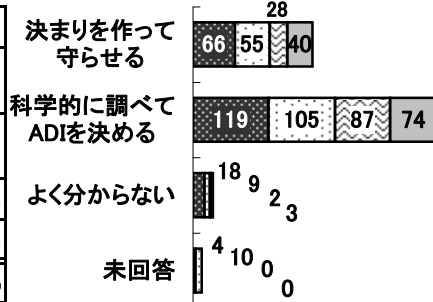
B-9. 食品添加物や農薬の安全性をみるとき「毎日一生食べ続けても安全な量(ADI)」の考え方が大切である



B-10. 食品安全委員会の主な役割について

学年男女別	5年女児		5年男児		6年女児		6年男児		総計	
決まりを作って守らせる	66	11%	55	9%	28	5%	40	6%	189	30%
科学的に調べてADIを決める	119	19%	105	17%	87	14%	74	12%	385	62%
よく分からない	18	3%	9	1%	2	0.3%	3	0.5%	32	5%
未回答	4	1%	10	2%	0	0%	0	0%	14	2%
合 計	207	33%	179	29%	117	19%	117	19%	620	100%

■ 5年女児 □ 5年男児 ▨ 6年女児 □ 6年男児

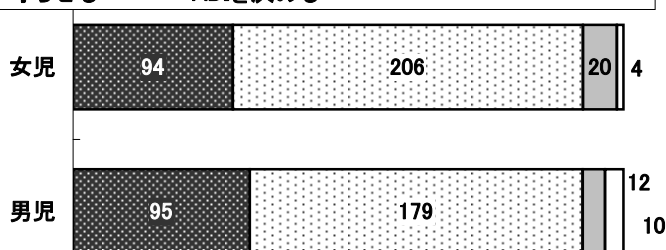


= 概要 =

「科学的に調べてADIを決める」を選択した児童は全体の62%となり、「決まりを作って守らせる」を選択してしまった児童は全体の30%という結果がでた。無効アンケートとなった児童の殆どが、この設問において、「決まりを作って守らせる」と「科学的に調べてADIを決める」の両方を選択していた事も鑑みると、厚生労働省と食品安全委員会の役割を分けて理解させるには啓発教材に何らかの工夫が必要かと思われる。

男女別	女児		男児		総計	
決まりを作って守らせる	94	29%	95	32%	189	30%
科学的に調べてADIを決める	206	64%	179	60%	385	62%
よく分からない	20	6%	12	4%	32	5%
未回答	4	1%	10	3%	14	2%
合 計	324	100%	296	100%	620	100%

■ 決まりを作って守らせる □ 科学的に調べてADIを決める

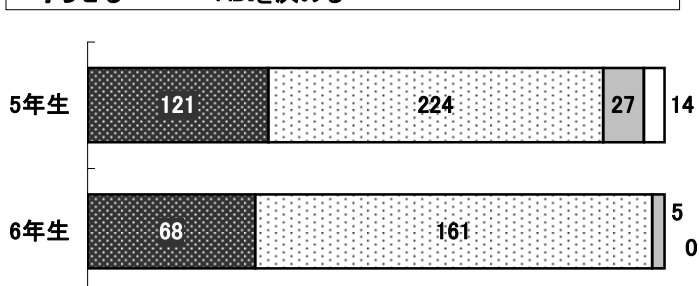


= 概要 =

「科学的に調べてADIを決める」と答えたのは女児が64%、男児が60%と4%の差があった。逆に「決まりを作って守らせる」と答えた女児は29%、男児は32%と3%男児が上回った。男女間でいえば、若干女児の方が理解度が高かったと思われる。

学年別	5年生		6年生		総計	
決まりを作って守らせる	121	31%	68	29%	189	30%
科学的に調べてADIを決める	224	58%	161	69%	385	62%
よく分からない	27	7%	5	2%	32	5%
未回答	14	4%	0	0%	14	2%
合 計	386	100%	234	100%	620	100%

■ 決まりを作って守らせる □ 科学的に調べてADIを決める



= 概要 =

「科学的に調べてADIを決める」とこたえた5年生は58%にとどまったのに対し、6年生では69%と約7割まで伸ばした。しかし「決まりを作って守らせる」での回答差は2%しかなく、「よく分からない」の回答差が5%あることから、5年生は厚生労働省と食品安全委員会の役割を分けて理解できていなかったのではないかと推測される。

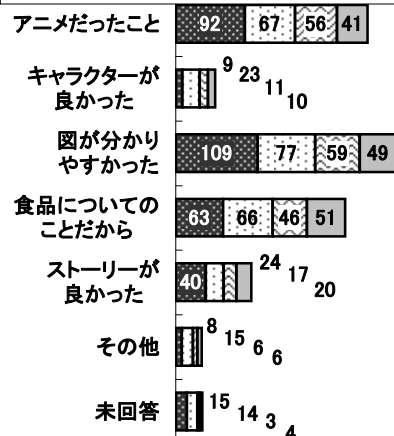
B-11. 今回の教材で楽しく学べたのはどのようなところですか？【複数回答】

学年男女別	5年女児		5年男児		6年女児		6年男児		総計	
アニメだったこと	92	9%	67	7%	56	6%	41	4%	256	26%
キャラクターが良かった	9	1%	23	2%	11	1%	10	1%	53	5%
図が分かりやすかった	109	11%	77	8%	59	6%	49	5%	294	29%
食品についてのことだから	63	6%	66	7%	46	5%	51	5%	226	23%
ストーリーが良かった	40	4%	24	2%	17	2%	20	2%	101	10%
その他	8	1%	15	1%	6	1%	6	1%	35	3%
未回答	15	1%	14	1%	3	0.3%	4	0.4%	36	4%
合 計	336	34%	286	29%	198	20%	181	18%	1001	100%

= 概要 =

もっとも多い回答が「図がわかりやすかった」の29%、ついで「アニメだったこと」が26%、3番目は「食品についてのことだから」の23%と、上位3つがほぼ同じ割合だったことから、この3点が教材の良さを印象付けたと考えられる。

■5年女児 □5年男児 ■6年女児 □6年男児

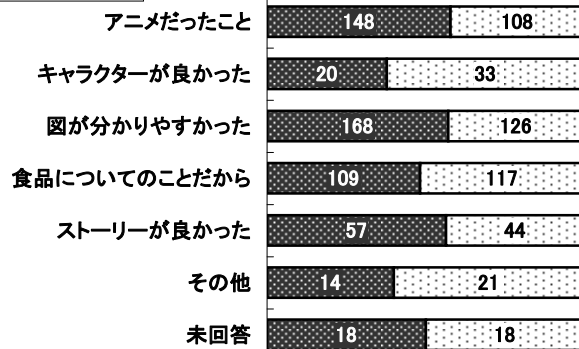


男女別	女兒		男児		総計	
アニメだったこと	148	28%	108	23%	256	26%
キャラクターが良かった	20	4%	33	7%	53	5%
図が分かりやすかった	168	31%	126	27%	294	29%
食品についてのことだから	109	20%	117	25%	226	23%
ストーリーが良かった	57	11%	44	9%	101	10%
その他	14	3%	21	4%	35	3%
未回答	18	3%	18	4%	36	4%
合 計	534	100%	467	100%	1001	100%

= 概要 =

男女別に見ると女児・男児共に1位は「図がわかりやすかった」を選択、2位と3位は男女それぞれ入れ替わり、「アニメだったこと」(女児2位・男児3位)、「食品についてのことだから」(男児2位・女児3位)となった。その他の回答では『自分達と同じ目線だった事』『説明が分かりやすい』『知らないことばかりだったから』『難しい言葉を簡単な言葉に直して子供でも分かりやすい』といった意見があげられた。

■女児 □男児

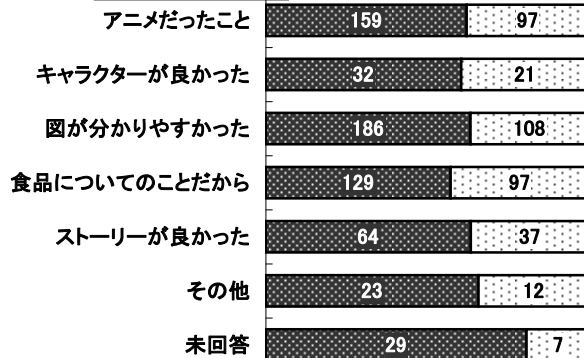


学年別	5年生		6年生		総計	
アニメだったこと	159	26%	97	26%	256	26%
キャラクターが良かった	32	5%	21	6%	53	5%
図が分かりやすかった	186	30%	108	28%	294	29%
食品についてのことだから	129	21%	97	26%	226	23%
ストーリーが良かった	64	10%	37	10%	101	10%
その他	23	4%	12	3%	35	3%
未回答	29	5%	7	2%	36	4%
合 計	622	100%	379	100%	1001	100%

= 概要 =

学年別でみても上位3項目は変わらず、その他の項目をみてもほぼ構成差はないことから、年齢によって受け止められ方が大きく変わる事はないと思われる。

■5年生 □6年生



B-12. アニメを見た感想を書いてください

- **ADIに関する感想** 143件
 - ・ ADIという言葉を知った
 - ・ ADIという基準があることを初めて知った
 - ・ ADIの大切さを知った
 - ・ ADIの基準値を超えなければ体に害がないことを初めて知った
 - ・ ADIでしっかり決められているので安心しました
 - ・ 食品安全委員会がADIを決めている事が分かった
 - ・ ADIを決めるのは人間以外の動物で実験している事を初めて知りました。
 - ・ 中国から輸入されているのはADIの基準の何倍か知りたい
 - ・ 食品の中にはADIなどがある事が分かった
 - ・ ADIは凄い役割をしていると思いました

- **添加物に関する感想** 173件
 - ・ 食品添加物という言葉を知った
 - ・ 食品添加物が何なのか分かった
 - ・ 食品添加物の全てが悪いものではない事を知った
 - ・ 食品添加物は体に悪いと思っていたけど、入れる量を決めれば害がない事が分かりました
 - ・ 食品添加物は悪いものだと思っていたけど本当は食品になくてはならないものだを知った
 - ・ 食品添加物のことは全然知らなかったし、その食品添加物に決まりがある事も知りませんでした
 - ・ 食品添加物の事を分かりやすく学べた
 - ・ 食べ物に食品添加物は結構入っていると思っていたけど殆ど入っていないことに驚きました
 - ・ 普段生活していれば気にする程の量は入っていないことに安心しました
 - ・ シソやにがりも食品添加物だという事を初めて知ってびっくりした
 - ・ 食品添加物のイメージが変わった
 - ・ 食品添加物や農薬は体に溜まっても大丈夫という事が分かった
 - ・ 少し分かったけれどもやっぱり農薬や添加物は悪いと思う。それとどんどん農薬や添加物は溜まっていくと思う。

- **農薬に関する感想** 153件
 - ・ 農薬の大切さを初めて知った
 - ・ 農薬の事を色々知ることができた
 - ・ 農薬は生活に欠かせないものだということが分かった
 - ・ 農薬は農家の人が勝手に決めていると思っていたけれど、ちゃんと基準があって守られている事を初めて知った
 - ・ 無農薬は良いって聞いていたので農薬は悪い物だと思ってましたが、これを見て勉強になりました
 - ・ 農薬は食品に殆ど残っていないという事を知り安心しました
 - ・ 農薬は決まった量で使っているから農薬を使っているものでも安心して食べられるという事が分かりました
 - ・ 農薬のADIは本当に守られているの？
 - ・ 食品に農薬をまくと体に悪いけど使わなくてはならない
 - ・ 農薬は残っていてもいいということを知った
 - ・ 農薬は害が無いという事を知って安心しました
 - ・ 農薬が口に入っても害がない事を知ってびっくりした
 - ・ 食品添加物や農薬は体に溜まっても大丈夫という事が分かった
 - ・ 少し分かったけれどもやっぱり農薬や添加物は悪いと思う。それとどんどん農薬や添加物は溜まっていくと思う。

- **水中毒に関する感想** 71件
 - ・ 体に必要な物(例えば水)でも、大量に取りすぎると体に害であることを初めて知った
 - ・ 水を飲みすぎると死んでしまう事
 - ・ 水を飲みすぎると水中毒になって死んでしまうという事
 - ・ 水を8リットル飲んで死んだ人がいることを初めて知った
 - ・ これからは水を飲みすぎないようにしたい
 - ・ 1回水をたくさん飲んだことがあるので、これを見ておいて良かったと思いました
 - ・ 激しい運動をしたときも飲みすぎではダメですか？

■ 安全委員会に関する感想

53件

- ・ 安全委員会というところがあることを初めて知った
- ・ 食品安全委員会がADIという基準値を決めている事を初めて知った
- ・ 食品安全委員会はADIの他にリスクコミュニケーションの仕事をしている事がわかりました
- ・ 食品安全委員会の主な役割がわかりました
- ・ 食品安全委員会について調べたいと思いました
- ・ 実際の安全委員会の所も見たい(仕事しているところを取材して欲しい)
- ・ 食品安全委員会などで食品が安全かを調べてくれているという事
- ・ 食品安全委員会という、私たちのために頑張ってくれている委員会があったこと
- ・ 食品安全委員会が日本の食べ物の安全を守っている事が凄いいと思いました
- ・ 食品の事だけを考えている食品安全委員会があることを知った
- ・ 食品安全委員会というのが、ADIを決めるだけに作られていてびっくりした
- ・ 食品安全委員会が毎日食べても大丈夫なくらいの食品添加物を入れていると言う事を初めて知りました

■ 映像に関する感想

150件 (良:95件 悪:55件)

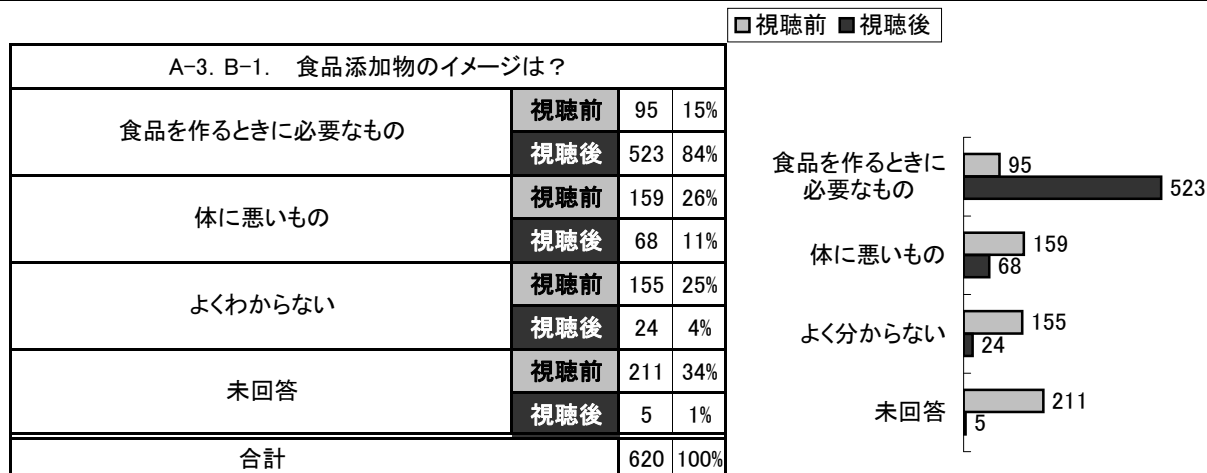
- ・ アニメだったので分かりやすかった
- ・ アニメだったので集中してみる事ができた
- ・ アニメだったので興味を持って見る事ができた
- ・ アニメだったので楽しくいろんな事が学べました
- ・ 凄く良いアニメでした
- ・ ゆっくりで聞き取りやすかった
- ・ アニメだったので面白かった
- ・ このアニメは分かりやすかったです
- ・ 大事なところは文字で表していたところが良かった
- ・ グラフや図を使っていたところが良かった
- ・ グラフや図が分かりやすかった
- ・ ADIなど難しい言葉があったけど、図が分かり易かったから、楽しく学習できたと思う
- ・ グラフを使って説明をしているところがよかった
- ・ グラフや図が詳しい上に分かりやすかったからよかった
- ・ ストーリーが良かった
- ・ 話がいくつかに分かれていた事が分かりやすかった
- ・ キャラクターが良かった
- ・ キャラクターのしゃべり方が面白かった
- ・ キャラクターがいたので集中して見れた
- ・ 遠くから見たので、図が見難い
- ・ 図がちょっと分かりにくかった
- ・ もっと図を分かりやすくして欲しかった
- ・ 難しい言葉が出てきたので少し分からなかった
- ・ アニメの声が早口で難しい言葉が出てきたときは分かりにくかった
- ・ 急に声が小さくなる場所があった
- ・ アドベンチャーにして欲しかった
- ・ もっと笑えるところを作って欲しい
- ・ キャラクターをリアルにして欲しい
- ・ アニメ中のキャラクターの動きが悪い

＝ 概要 ＝

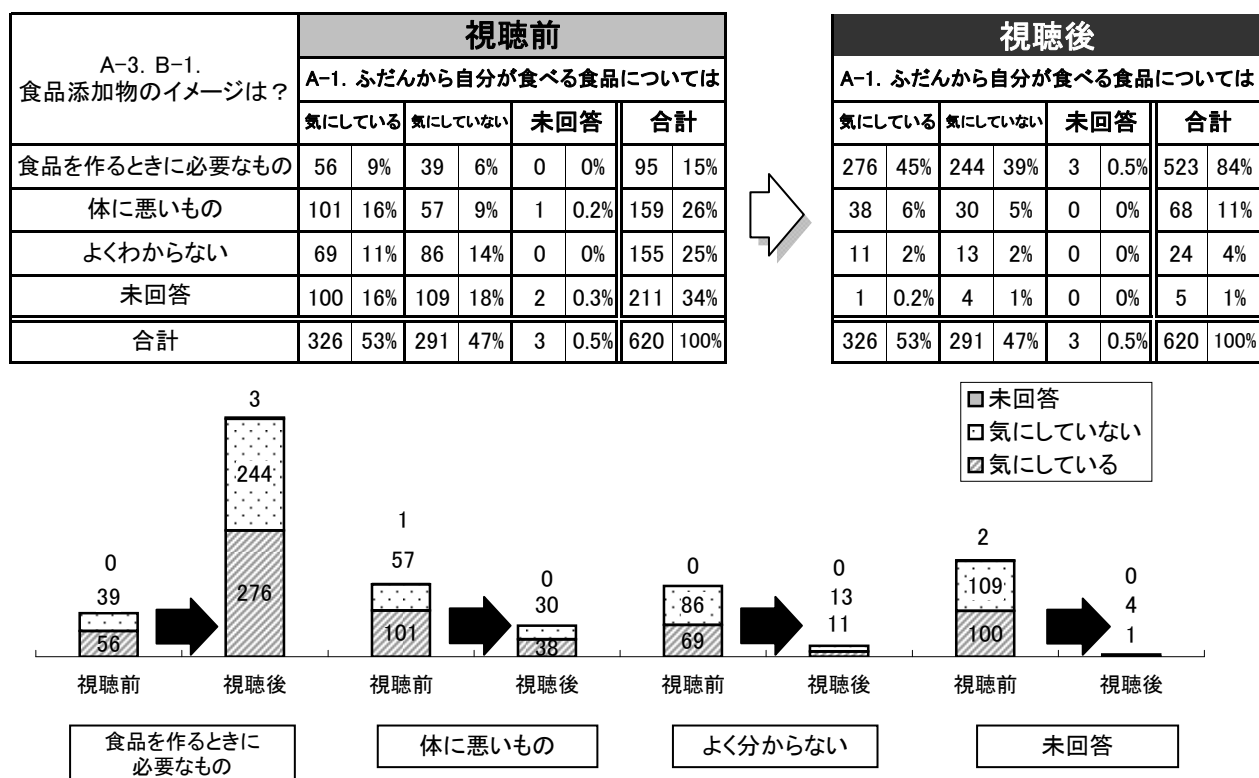
B-12. ではアンケートに書かれた内容を大きく6つに分類し、代表的な意見や感想を各分の下に列記した。

全体的な記述の傾向としては「〇〇を初めて知った」「アニメだったので楽しく勉強できた」という感想が多くを占めたが、中には残念ながら間違えて覚えている内容もあり、紛らわしい表現をしていなかったか、もっと分かりやすい表現方法はないか検討する必要もある。映像に関しては良い印象のコメントを書いた児童は悪い印象を書いた児童の1.7倍おり、まずまずの満足度だったとおもわれる。

食品添加物のイメージについて 視聴前後の変化



食品安全を普段から気にかけている児童と気にしていない児童の 視聴前後の変化



＝ 概要 ＝

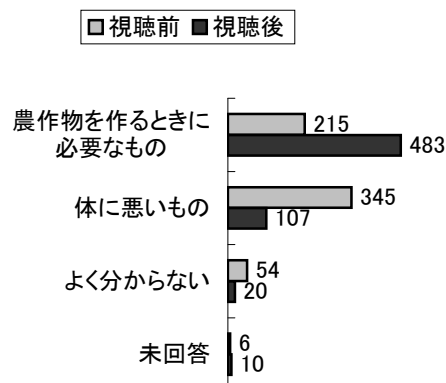
DVD視聴前では、「体に悪いもの」(26%)・「よくわからない」(25%)・「未回答」(食品添加物を聞いたことがないを含む34%)に分散していたが、視聴後では全体の84%の児童が「食品添加物は食品を作るときに必要なもの」との認識が出来る。

また、普段から食品安全を気にかけている児童とそうでない児童別に分析してみると、視聴前に気に掛けている児童が「体に悪いもの」と答えた割合は16%(気にしない児童は9%)だったが、視聴後はそう考える児童が10%も減り、気にしない児童の視聴後とほぼ同じ比率まで抑える事が出来た。

大多数の児童は、啓発DVDを視聴することにより、食品添加物のイメージが「悪いもの」から「必要なもの」へ切り替わったと言える。

農業のイメージについて 視聴前後の変化

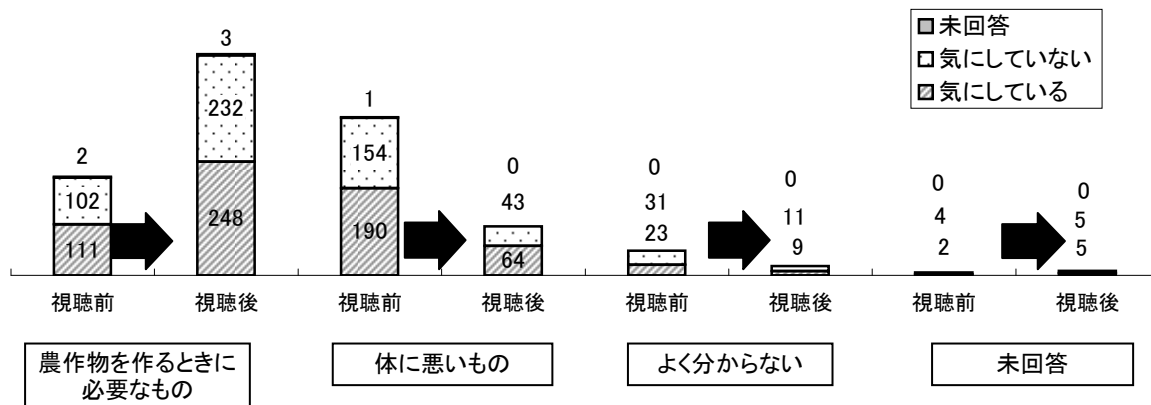
A-5. B-2. 農業のイメージは？			
農作物を作るときに必要なもの	視聴前	215	35%
	視聴後	483	78%
体に悪いもの	視聴前	345	56%
	視聴後	107	17%
よくわからない	視聴前	54	9%
	視聴後	20	3%
未回答	視聴前	6	1%
	視聴後	10	2%
合計		620	100%



食品安全を普段から気にかけている児童と気にしていない児童の 視聴前後の変化

A-5. B-2. 農業のイメージは？	視聴前					
	A-1. ふだんから自分が食べる食品については					
	気にしている		気にしていない		未回答	
農作物を作るときに必要なもの	111	18%	102	16%	2	0.3%
体に悪いもの	190	31%	154	25%	1	0.2%
よくわからない	23	4%	31	5%	0	0%
未回答	2	0.3%	4	1%	0	0%
合計	326	53%	291	47%	3	0.5%

視聴後					
A-1. ふだんから自分が食べる食品については					
気にしている		気にしていない		未回答	
248	40%	232	37%	3	0.5%
64	10%	43	7%	0	0%
9	1%	11	2%	0	0%
5	1%	5	1%	0	0%
326	53%	291	47%	3	0.5%



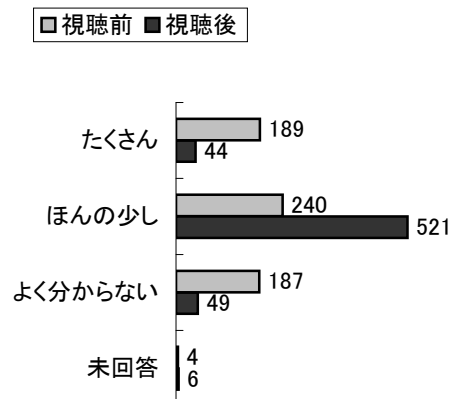
= 概要 =

DVD視聴前では、「体に悪いもの」(56%)・「農作物を作るときに必要なもの」(35%)と、体に害のある物としての認識が強かったが、視聴後では全体の78%の児童が「農業は農作物を作るときに必要なもの」との正しい認識が出来ている。ただ、食品添加物が視聴後に84%の児童に理解された事と比較すると、農業のイメージを食品添加物ほど変える事は出来なかった。

また、普段から食品安全を気にかけている児童とそうでない児童別に分析してみると、気に掛けている児童が「農作物を作るのに必要なもの」と答えた割合は視聴前で18%、視聴後で40%と22%も上がった。同様に気に掛けていない児童も「体に悪いもの」と視聴前に答えた割合は16%、視聴後で37%と21%とほぼ同率上がり、農業のイメージに関しては普段から気にしている児童とそうでない児童の意識変化の違いはなかったと言える。

いつも食べている食品には農薬や食品添加物がどのくらい入って(残って)いると思いますか？ 視聴前後の変化

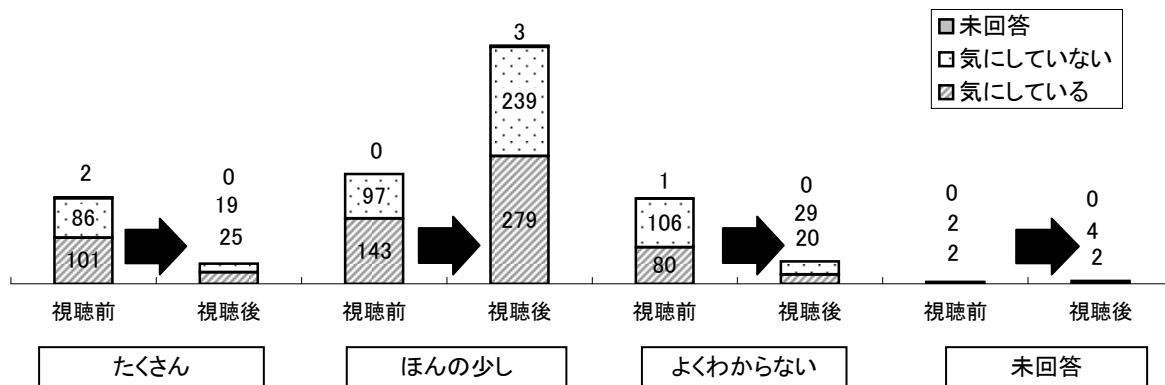
A-6. B-3. いつも食べている食品には農薬や食品添加物がどのくらい入って(残って)いると思いますか			
たくさん	視聴前	189	30%
	視聴後	44	7%
ほんの少し	視聴前	240	39%
	視聴後	521	84%
よくわからない	視聴前	187	30%
	視聴後	49	8%
未回答	視聴前	4	1%
	視聴後	6	1%
合計		620	100%



食品安全を普段から気にかけている児童と気にしていない児童の 視聴前後の変化

A-6. B-3. いつも食べている食品には農薬 や食品添加物がどのくらい入って (残って)いると思いますか	視聴前								
	A-1. ふだんから自分が食べる食品については								
	気にしている		気にしていない		未回答		合計		
たくさん	101	16%	86	14%	2	0.3%	189	30%	
ほんの少し	143	23%	97	16%	0	0%	240	39%	
よくわからない	80	13%	106	17%	1	0.2%	187	30%	
未回答	2	0.3%	2	0.3%	0	0%	4	1%	
合計	326	53%	291	47%	3	0.5%	620	100%	

視聴後						
A-1. ふだんから自分が食べる食品については						
気にしている		気にしていない		未回答		合計
25	4%	19	3%	0	0%	44 7%
279	45%	239	39%	3	0.5%	521 84%
20	3%	29	5%	0	0%	49 8%
2	0.3%	4	1%	0	0%	6 1%
326	53%	291	47%	3	0.5%	620 100%



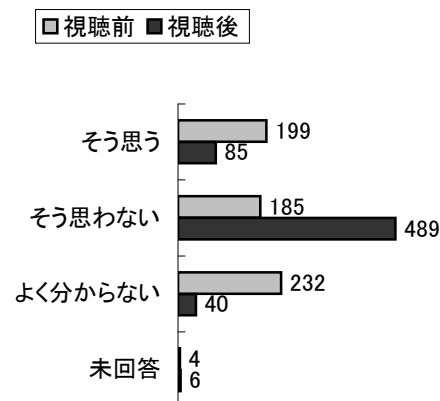
＝ 概要 ＝

DVD視聴前では、「たくさん」(30%)・「ほんの少し」(39%)・「よくわからない」(30%)に認識が分散していたが、視聴後には全体の84%の児童が「いつも食べている食品には農薬や食品添加物はほんの少ししか入って(残って)いない」との正しい認識が出来るようになった。

また、普段から食品安全を気にかけている児童とそうでない児童別に分析してみると、視聴前に気に掛けている児童が「たくさん」と答えた割合は16%(気にしない児童は14%)だったが、視聴後はそう考える児童が12%も減り、気にしない児童の視聴後とほぼ同じ比率まで減らす事が出来た。気に掛けている児童、そうでない児童共にDVD視聴により理解度が高まったと思われる。

農薬や食品添加物は食品を食べるたびにどんだん体の中にたまっていく 視聴前後の変化

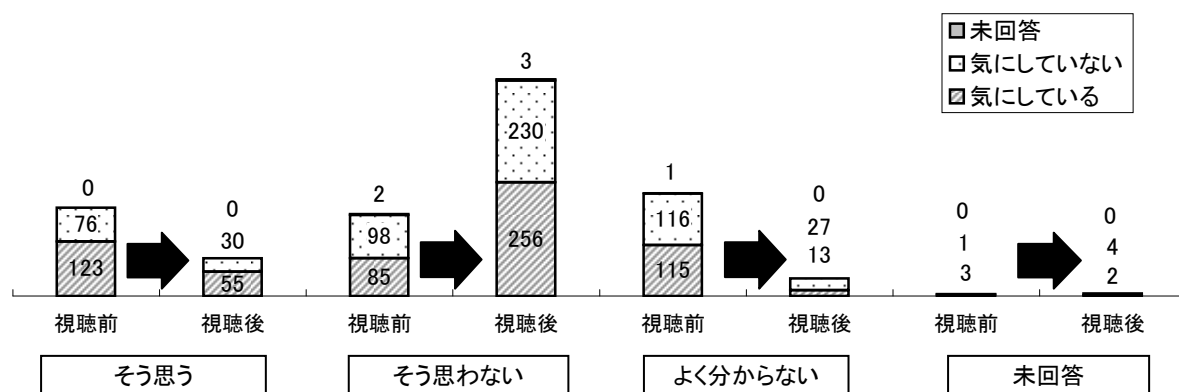
A-7. B-4. 農薬や食品添加物は食品を食べるたびにどんだん体の中にたまっていく			
そう思う	視聴前	199	32%
	視聴後	85	14%
そう思わない	視聴前	185	30%
	視聴後	489	79%
よくわからない	視聴前	232	37%
	視聴後	40	6%
未回答	視聴前	4	1%
	視聴後	6	1%
合計		620	100%



食品安全を普段から気にかけている児童と気にしていない児童の 視聴前後の変化

A-7. B-4. 農薬や食品添加物は食品を食べるたびにどんだん体の中にたまっていく	視聴前							
	A-1. ふだんから自分が食べる食品については							
	気にしている		気にしていない		未回答		合計	
そう思う	123	20%	76	12%	0	0%	199	32%
そう思わない	85	14%	98	16%	2	0.3%	185	30%
よくわからない	115	19%	116	19%	1	0.2%	232	37%
未回答	3	0.5%	1	0.2%	0	0%	4	1%
合計	326	53%	291	47%	3	0%	620	100%

視聴後							
A-1. ふだんから自分が食べる食品については							
気にしている		気にしていない		未回答		合計	
55	9%	30	5%	0	0%	85	14%
256	41%	230	37%	3	0.5%	489	79%
13	2%	27	4%	0	0%	40	6%
2	0.3%	4	1%	0	0%	6	1%
326	53%	291	47%	3	0.5%	620	100%



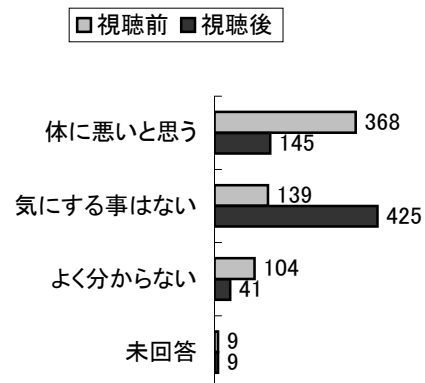
＝ 概要 ＝

DVD視聴前では、「体の中に溜まっていくと思う」(32%)・「溜まらないと思う」(30%)・「よくわからない」(37%)の3つに意見が分かれていたが、視聴後には全体の79%の児童が「農薬や添加物を摂取しても体の中に溜まる事はない」と正しい理解を示した。

また、普段から食品安全を気にかけている児童とそうでない児童別に分析してみると、普段気に掛けている児童の方が普段気にしていない児童よりも視聴後の反応が良く、「溜まると思う」と答えていた児童が4%、「よくわからない」と答えた児童が2%、気にしていない児童の下げ幅よりも多く下がっている。また気に掛けている児童のうち「溜まらないと思う」と答えた児童では6%も、気にしていない児童の上げ幅よりも多く上昇しており、意識の変化が顕著に見られた。

いつも食べている食品に入って(残って)いる食品添加物や農薬について 視聴前後の変化

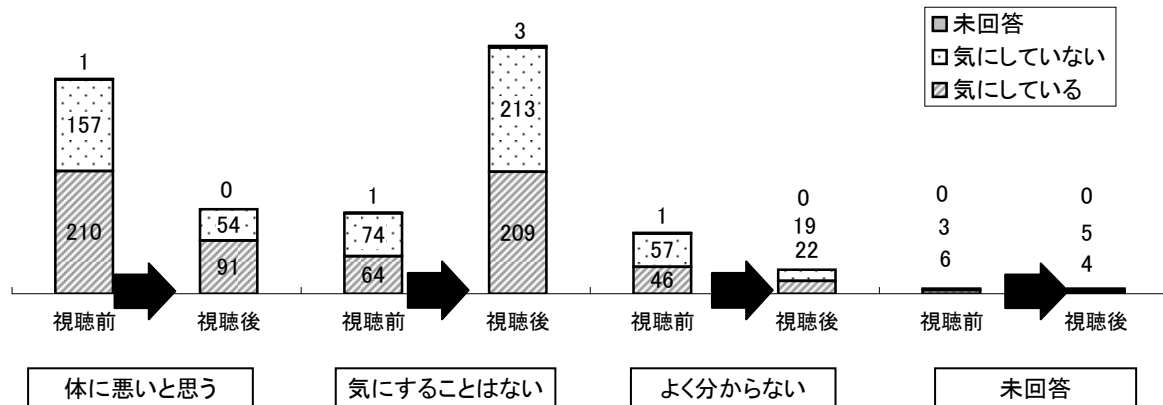
A-8. B-5. いつも食べている食品に入って(残って)いる食品添加物や農薬について				
体に悪いと思う	視聴前	368	59%	
	視聴後	145	23%	
あまり気にすることはないと思う	視聴前	139	22%	
	視聴後	425	69%	
よくわからない	視聴前	104	17%	
	視聴後	41	7%	
未回答	視聴前	9	1%	
	視聴後	9	1%	
合計		620	100%	



食品安全を普段から気にかけている児童と気にしていない児童の 視聴前後の変化

A-8. B-5. いつも食べている食品に 入って(残っている)食品添 加物や農薬について	視聴前							
	A-1. ふだんから自分が食べる食品については							
	気にしている		気にしていない		未回答		合計	
体に悪いと思う	210	34%	157	25%	1	0.2%	368	59%
あまり気にすることはないと思う	64	10%	74	12%	1	0.2%	139	22%
よくわからない	46	7%	57	9%	1	0.2%	104	17%
未回答	6	1%	3	0.5%	0	0%	9	1%
合計	326	53%	291	47%	3	0%	620	100%

視聴後								
A-1. ふだんから自分が食べる食品については								
気にしている		気にしていない		未回答		合計		
91	15%	54	9%	0	0%	145	23%	
209	34%	213	34%	3	0.5%	425	69%	
22	4%	19	3%	0	0%	41	7%	
4	1%	5	1%	0	0%	9	1%	
326	53%	291	47%	3	0.5%	620	100%	



= 概要 =

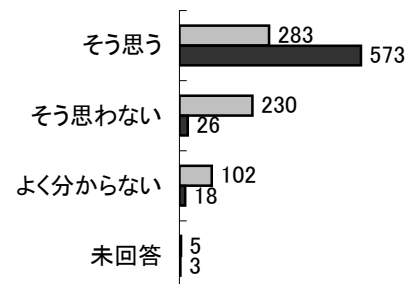
視聴前にもっとも多い回答は「体に悪いと思う」で、59%と圧倒的な意見であったが、視聴後に「体に悪いと思う」と答えたのは23%まで減少し、「あまり気にする必要はない」が69%となった。多くの児童が「気にしなくても良い」と理解した一方、2割強の児童は視聴後も「体に悪いと思う」と回答している点に今後の課題が含まれていると思われる。

また、普段から食品安全を気にかけている児童とそうでない児童別に分析してみると、CROSS-4同様、「体に悪いと思う」と答えていた児童で-3%、「あまり気にすることはないと思う」で+2%、気にしていない児童よりも気にしている児童の方が良い方向への振りが大きい結果を得られた。しかし、気にしている児童の内3%(全体比15%)は、根強く「体に悪いと思う」という認識のままであり、色々な予備知識がある為に、簡単に今までの認識を変えるのは難しかったと思われる。

体に必要なものでも(例えば水でも)取りすぎたら死んでしまうこともある 視聴前後の変化

A-9. B-6. 体に必要なものでも(例えば水でも)取りすぎたら死んでしまうこともある			
	視聴前		
	人数	割合	
そう思う	283	46%	
そう思わない	230	37%	
よくわからない	102	16%	
未回答	5	1%	
合計	620	100%	

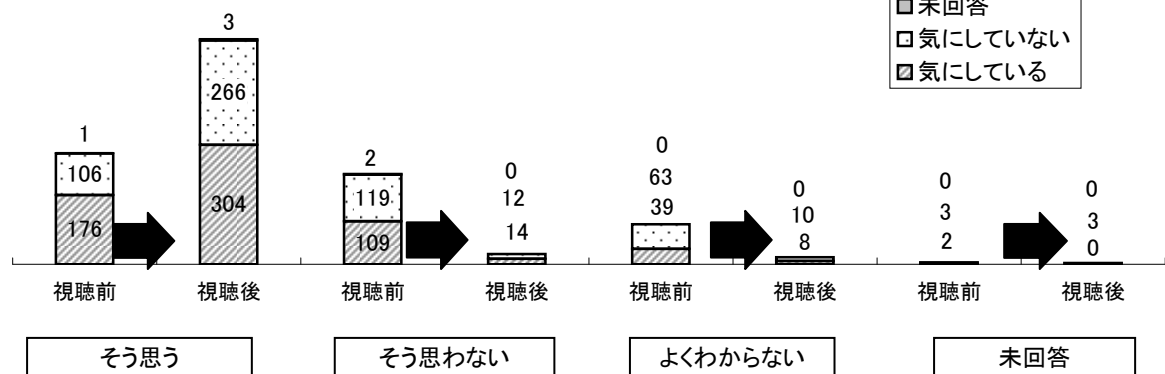
■ 視聴前 ■ 視聴後



食品安全を普段から気にかけている児童と気にしていない児童の 視聴前後の変化

A-9. B-6. 体に必要なものでも(例えば水でも)取りすぎたら死んでしまうこともある	視聴前					
	A-1. ふだんから自分が食べる食品については					
	気にしている		気にしていない		未回答	合計
そう思う	176	28%	106	17%	1 0.2%	283 46%
そう思わない	109	18%	119	19%	2 0.3%	230 37%
よくわからない	39	6%	63	10%	0 0%	102 16%
未回答	2	0.3%	3	0.5%	0 0%	5 1%
合計	326	53%	291	47%	3 0.5%	620 100%

視聴後							
A-1. ふだんから自分が食べる食品については							
気にしている		気にしていない		未回答		合計	
304	49%	266	43%	3	0.5%	573	92%
14	2%	12	2%	0	0%	26	4%
8	1%	10	2%	0	0%	18	3%
0	0%	3	0.5%	0	0%	3	0.5%
326	53%	291	47%	3	0.5%	620	100%



= 概要 =

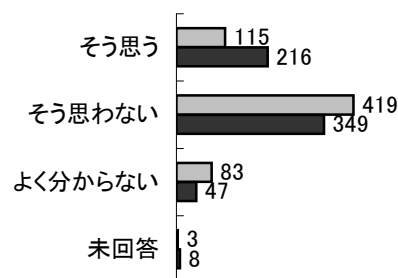
この設問では、視聴前から全体の46%と、約半数近い児童が「体に必要なものでも取りすぎたら死んでしまうと思う」と答えていたが、視聴後にはその数字が92%まで大幅にアップした。

普段から食品安全を気にかけている児童とそうでない児童別に分析してみると、気にしていない児童の方が良い反応への振り幅が大きく、「そう思う」は+5%、「そう思わない」は-1%、「よくわからない」は-3%、気に掛けている児童より視聴前後で動きがあった。水でも中毒を起こすという意外性に普段食品について気に掛けない児童も、反応を示したと思われる。

毒物でもごく少しなら害にならない事がある 視聴前後の変化

A-10. B-7. 毒物でもごく少しなら害にならない事がある			
そう思う	視聴前	115	19%
	視聴後	216	35%
そう思わない	視聴前	419	68%
	視聴後	349	56%
よくわからない	視聴前	83	13%
	視聴後	47	8%
未回答	視聴前	3	0.5%
	視聴後	8	1%
合計		620	100%

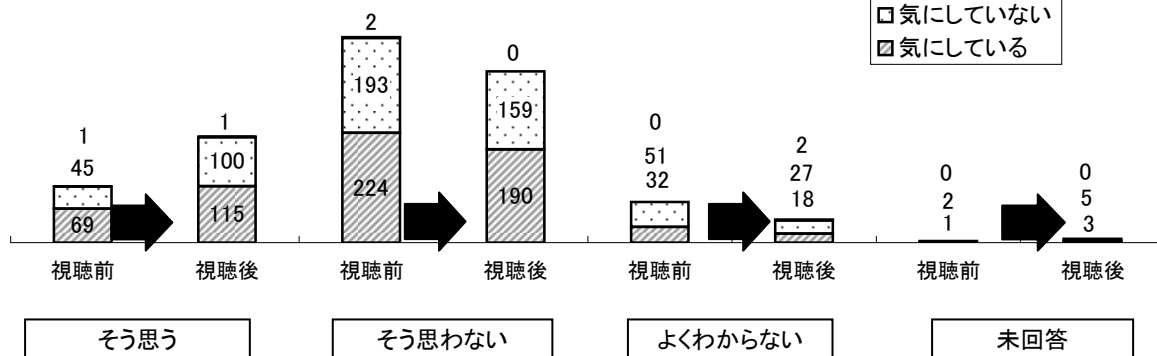
■ 視聴前 ■ 視聴後



食品安全を普段から気にかけている児童と気にしていない児童の 視聴前後の変化

A-10. B-7. 毒物でもごく少しなら 害にならない事がある	視聴前							
	A-1. ふだんから自分が食べる食品については							
	気にしている		気にしていない		未回答		合計	
そう思う	69	11%	45	7%	1	0%	115	19%
そう思わない	224	36%	193	31%	2	0%	419	68%
よくわからない	32	5%	51	8%	0	0%	83	13%
未回答	1	0%	2	0%	0	0%	3	0%
合計	326	53%	291	47%	3	0%	620	100%

視聴後							
A-1. ふだんから自分が食べる食品については							
気にしている		気にしていない		未回答		合計	
115	19%	100	16%	1	0.2%	216	35%
190	31%	159	26%	0	0%	349	56%
18	3%	27	4%	2	0.3%	47	8%
3	0.5%	5	1%	0	0%	8	1%
326	53%	291	47%	3	0.5%	620	100%



= 概要 =

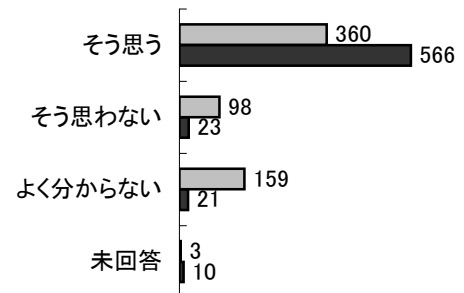
「ごく少しなら毒物でも害にないと思う」と答えた児童が視聴前では19%、視聴後では35%と16%の増加を示したが、「害にないと思う」と答えた児童は視聴前68%、視聴後56%と、正しく理解されなかったと思われる。

普段から食品安全を気にかけている児童とそうでない児童別に分析してみても、視聴前・視聴後とも同じような比率(構成比)であることから、全体的に「毒物でもごく少量であれば害にはならないことがある」という点に関しては、理解されなかったといわざるを得ない結果であった。

食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて食品に含まれても大丈夫な量を決めている 視聴前後の変化

A-11. B-8. 食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて食品に含まれても大丈夫な量を決めている			
そう思う	視聴前	360	58%
	視聴後	566	91%
そう思わない	視聴前	98	16%
	視聴後	23	4%
よくわからない	視聴前	159	26%
	視聴後	21	3%
未回答	視聴前	3	0.5%
	視聴後	10	2%
合計		620	100%

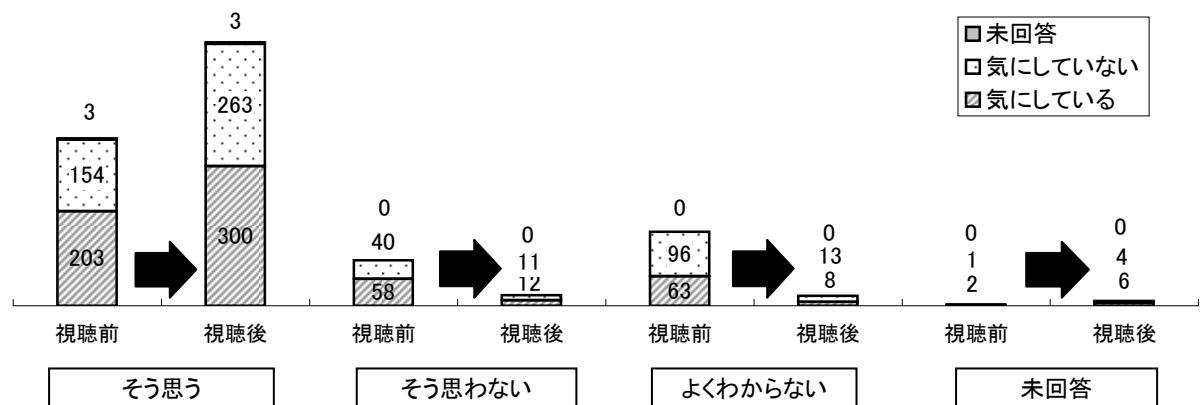
■視聴前 ■視聴後



食品安全を普段から気にかけている児童と気にしていない児童の 視聴前後の変化

A-11. B-8. 食品添加物や農薬は、国が安全性を調べて食品に含まれても大丈夫な量を決めている	視聴前							
	A-1. ふだんから自分が食べる食品については							
	気にしている		気にしていない		未回答		合計	
そう思う	203	33%	154	25%	3	0.5%	360	58%
そう思わない	58	9%	40	6%	0	0%	98	16%
よくわからない	63	10%	96	15%	0	0%	159	26%
未回答	2	0.3%	1	0.2%	0	0%	3	0.5%
合計	326	53%	291	47%	3	0.5%	620	100%

視聴後							
A-1. ふだんから自分が食べる食品については							
気にしている		気にしていない		未回答		合計	
300	48%	263	42%	3	0.5%	566	91%
12	2%	11	2%	0	0%	23	4%
8	1%	13	2%	0	0%	21	3%
6	1%	4	1%	0	0%	10	2%
326	53%	291	47%	3	0.5%	620	100%



= 概要 =

視聴前から全体の58%が「食品添加物や農薬は国が安全性を調べ食品に含まれても大丈夫な量を決めていると思う」と答えていたが、その数字が視聴後には91%までアップした。視聴前に「そう思わない」(16%)「よくわからない」(26%)と答えていた方の大半がDVDにより理解したと考えてよいと思われる。

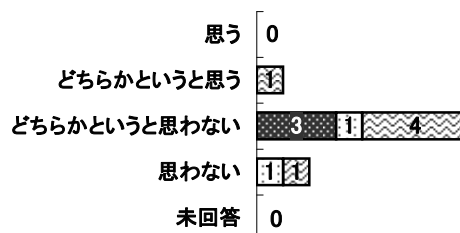
普段から食品安全を気にかけている児童とそうでない児童別では、双方に視聴前後において差ほど動きに開きはなかった。

2. 教師への調査

A-1. 食品の安全性について教えるための時間が十分に取れていると思いますか？

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
思う	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかと思う	0	0%	0	0%	1	9%	1	9%
どちらかというと思わない	3	27%	1	9%	4	36%	8	73%
思わない	0	0%	1	9%	1	9%	2	18%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%

■担任/女性 □担任/男性 □家庭科

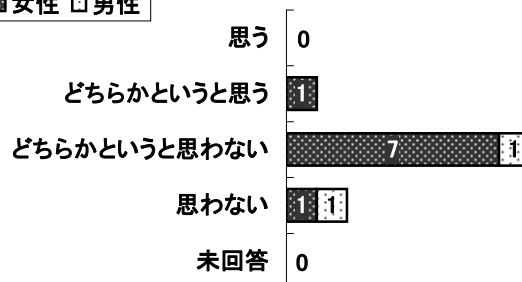


= 概要 =

もっとも多かった回答は「どちらかというと思わない」で73%、2番目は「思わない」の18%、続いて「どちらかと思う」の9%となり、「十分に取れていると思う」と答えた教師は0%であった。
およそ9割の教師が「食品の安全性について教えるための時間は十分にとれていない」と認識していることが分かった。

男女別	女性		男性		総計	
思う	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかと思う	1	9%	0	0%	1	9%
どちらかというと思わない	7	64%	1	9%	8	73%
思わない	1	9%	1	9%	2	18%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%

■女性 □男性

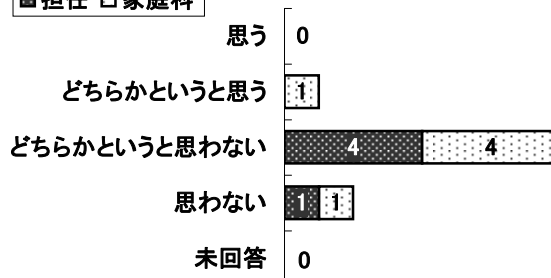


= 概要 =

男女別で見ると、女性は「どちらかというと思わない」に回答が集中しており、「どちらかと思う」と「思わない」が同率の結果であった。対して男性は、「どちらかと思う」という回答はなく「どちらかというと思わない」「思わない」が同率の結果となった。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
思う	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかと思う	0	0%	1	9%	1	9%
どちらかというと思わない	4	36%	4	36%	8	73%
思わない	1	9%	1	9%	2	18%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%

■担任 □家庭科



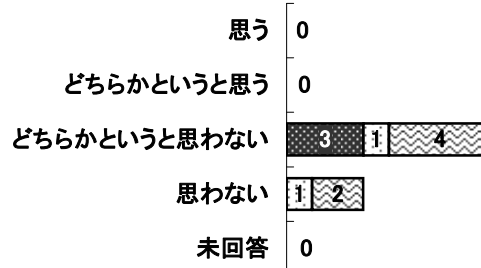
= 概要 =

家庭科を受け持つ教師は授業で食品を扱う機会もあることから、もっと十分な時間がとれている方向へ比重があってもよさそうではあるが、残念な事に、「どちらかと思う」と答えたのは1人で、残りの5人は「どちらかというと思わない」(4人)「思わない」(1人)の回答であった。担任に関しては「どちらかというと思わない」に4人、「思わない」に1人という結果であった。

A-2. 児童は食品の安全に関する正しい知識を持っていると思いますか？

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
思う	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかというと思う	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかというと思わない	3	27%	1	9%	4	36%	8	73%
思わない	0	0%	1	9%	2	18%	3	27%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%

■担任/女性 □担任/男性 □家庭科

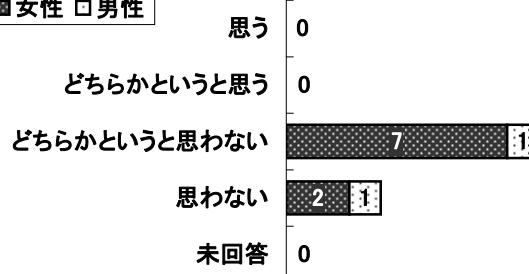


= 概要 =

もっとも多かった回答は「どちらかというと思わない」で73%、続いて「思わない」の27%で、「十分にとれていると思う」「どちらかと思う」と答えた教師は0%であった。
教師全員が「児童は食品の安全に関する正しい知識を持っていない」と認識していることが分かった。

男女別	女性		男性		総計	
思う	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかというと思う	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかというと思わない	7	64%	1	9%	8	73%
思わない	2	18%	1	9%	3	27%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%

■女性 □男性

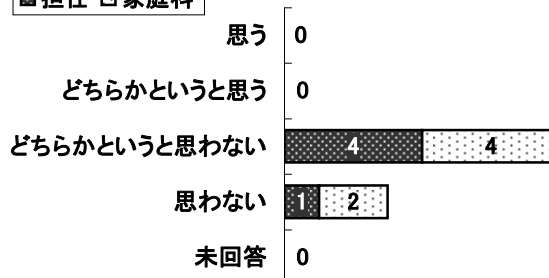


= 概要 =

男女別で見ると、女性は「どちらかというと思わない」に回答が集中しており7人、「思わない」が2人であった。男性では、「どちらかというと思わない」「思わない」が同率の結果となった。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
思う	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかというと思う	0	0%	0	0%	0	0%
どちらかというと思わない	4	36%	4	36%	8	73%
思わない	1	9%	2	18%	3	27%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%

■担任 □家庭科

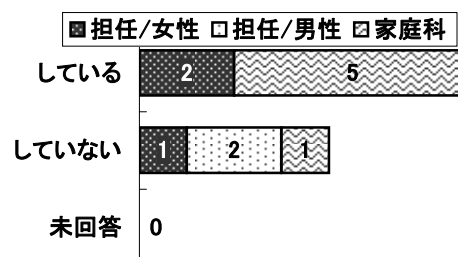


= 概要 =

家庭科を受け持つ教師で「どちらかというと思わない」と答えたのは4人、「思わない」と答えたのは2人であった。担任では「どちらかというと思わない」は家庭科担当教師と同じく4人、「思わない」は1人で、家庭科の教師の方が若干ではあるが「思わない」と答えた数値が高くなった。

A-3. 食品の安全性に関する最新の情報を取り入れるようにしていますか？

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
している	2	18%	0	0%	5	45%	7	64%
していない	1	9%	2	18%	1	9%	4	36%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%

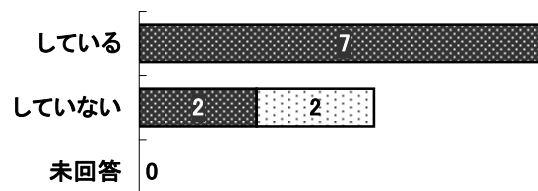


= 概要 =

「食品の安全性に関する最新の情報を取り入れようとしている」と答えたのは全体の64%、「していない」と答えたのは36%であった。

男女別	女性		男性		総計	
している	7	64%	0	0%	7	64%
していない	2	18%	2	18%	4	36%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%

■女性 □男性

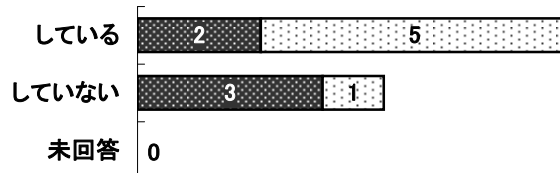


= 概要 =

男女別に見ると、女性で「している」と答えたのは7名と一番多く、次いで同数で女性の「していない」男性の「している」がそれぞれ2名ずつという結果になった。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
している	2	18%	5	45%	7	64%
していない	3	27%	1	9%	4	36%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%

■担任 □家庭科



= 概要 =

担当科目別にみると、担任で「している」と答えたのが2名、「していない」と答えたのが3名であった。家庭科を受け持つ教師は、当然積極的に情報を収集しているのかと思いきや、予想に反し、「している」と答えたのが5名、「していない」と答えたのが1名であった。

A-4. 食品の安全に関することで、児童にもっとも教えたい事は何ですか？

- 正しく選ぶPoint（消費者教育の観点から）
- 成長期に食品の安全が特に大切である事
- 食品表示の見方
- 食品に含まれているものを表示で確認するなどして自分の体内に入ることの影響あるかどうか考えられるようにさせたい
- イメージで捉えるのではなく食品そのものを手にとって確かめたり表示（情報）を正しく読み取ったりしながら、より安全で安心できるものを選ぶようになって欲しい
- 有機栽培
- 「地産地消」のよさ

＝ 概要 ＝

教えたい事としてあげられた意見の殆どが消費する側として書かれており、これらの意見にはいずれも次の2点が含まれているといえる。

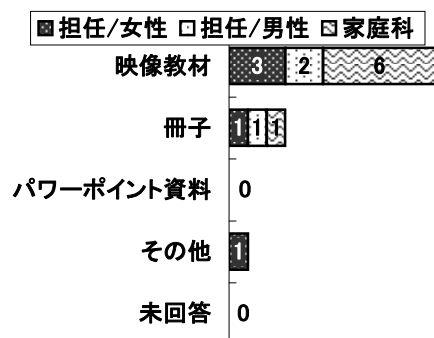
1つは消費者としての判断能力を培って欲しい、という点。

もう1つは、その自分の中での判断基準を設けるための知識を習得して欲しい、という点である。

今回の啓発教材もこの要望に沿った内容を含んではいるものの、教師が要望としているのはもっと具体的な部分（食品表示に関して）ではないかと思われる。

A-5. 補助教材として使いやすいのはどのようなものですか？

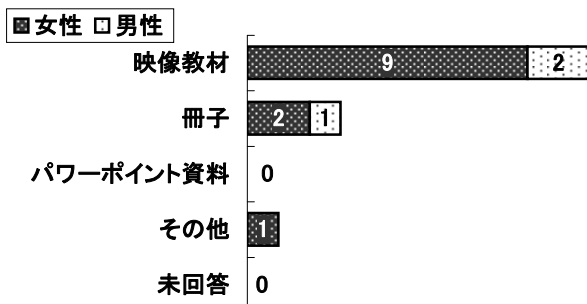
担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
映像教材	3	20%	2	13%	6	40%	11	73%
冊子	1	7%	1	7%	1	7%	3	20%
パワーポイント資料	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
その他	1	7%	0	0%	0	0%	1	7%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	33%	3	20%	7	47%	15	100%



= 概要 =

圧倒的に「映像教材」を選ぶ声が多かった(73%)。冊子(20%)は映像の補助として使用したいとの声もあった。その他(7%)は、写真・ポスターが欲しいとの要望であった。「パワーポイント資料」という声は無く、パソコンを使った授業の取り組みは現状行われていない可能性を示唆している。

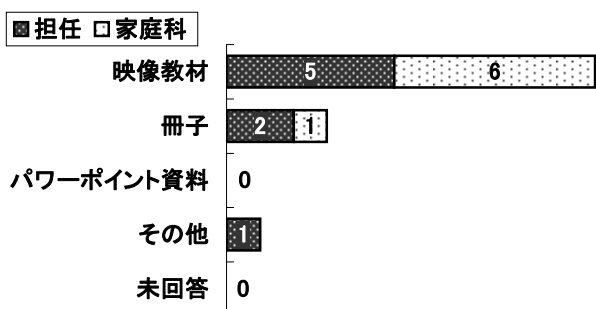
男女別	女性		男性		総計	
映像教材	9	60%	2	13%	11	73%
冊子	2	13%	1	7%	3	20%
パワーポイント資料	0	0%	0	0%	0	0%
その他	1	7%	0	0%	1	7%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	12	80%	3	20%	15	100%



= 概要 =

この設問において特に男女差はない。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
映像教材	5	33%	6	40%	11	73%
冊子	2	13%	1	7%	3	20%
パワーポイント資料	0	0%	0	0%	0	0%
その他	1	7%	0	0%	1	7%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	8	53%	7	47%	15	100%



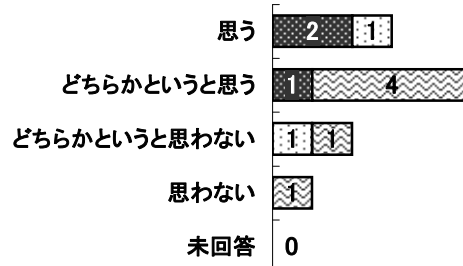
= 概要 =

担任・家庭科、共に同じような回答比率であった。教科を問わず、映像教材(+補助冊子)が望ましいという結果であった。

A-6. 食品添加物を含む食品は使用基準内であっても危険だと思いますか？

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
思う	2	18%	1	9%	0	0%	3	27%
どちらかというと思う	1	9%	0	0%	4	36%	5	45%
どちらかというと思わない	0	0%	1	9%	1	9%	2	18%
思わない	0	0%	0	0%	1	9%	1	9%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%

■担任/女性 □担任/男性 ▨家庭科

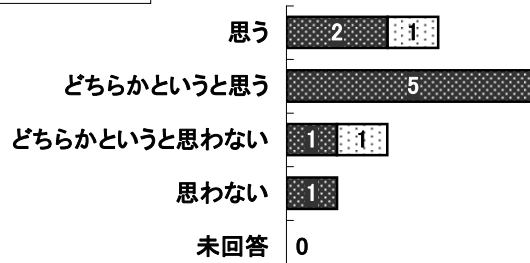


= 概要 =

「危険だとどちらかといえば思う」が一番多く5人(45%)、次いで「思う」の3名(27%)、「どちらかというと思わない」は2名(18%)「思わない」1名(9%)であった。約7割の教師が食品添加物を含む食品のに対して安全性を疑っているという結果になった。

男女別	女性		男性		総計	
思う	2	18%	1	9%	3	27%
どちらかというと思う	5	45%	0	0%	5	45%
どちらかというと思わない	1	9%	1	9%	2	18%
思わない	1	9%	0	0%	1	9%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%

■女性 □男性

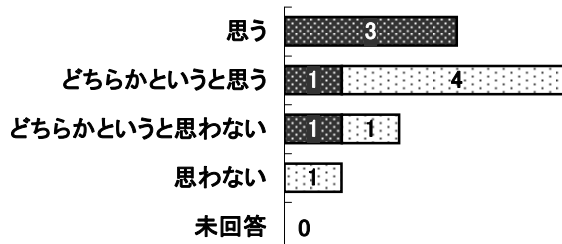


= 概要 =

男女別にみると、女性は全体的に安全性に対して否定的な考えを持った結果となった。

担当科目別	担任	家庭科	総計	
思う	3	0	3	27%
どちらかというと思う	1	4	5	45%
どちらかというと思わない	1	1	2	18%
思わない	0	1	1	9%
未回答	0	0	0	0%
合 計	5	6	11	100%

■担任 □家庭科



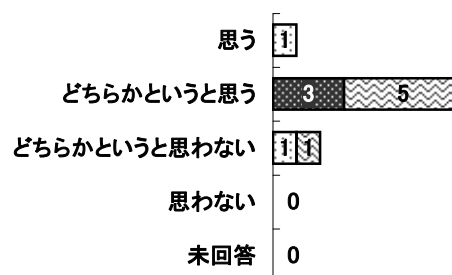
= 概要 =

科目別でみると担任は「思う」が一番多く3名(27%)、家庭科を受け持つ教師の方は「どちらかというと思う」(4名/36%)が一番多いものの担任と比較すると危険と考えている度合いは低いという結果であった。

A-7. 農薬を使って栽培された野菜は使用基準が守られていても危険だと思いますか？

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
思う	0	0%	1	9%	0	0%	1	9%
どちらかというと思う	3	27%	0	0%	5	45%	8	73%
どちらかというと思わない	0	0%	1	9%	1	9%	2	18%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%

■担任/女性 □担任/男性 ▨家庭科

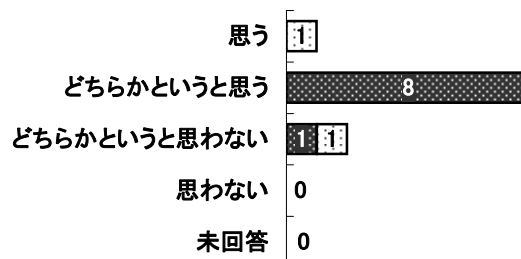


= 概要 =

農業に関しては食品添加物よりも回答幅は狭まり、一番多い回答が「どちらかというと思う」8名(73%)、「どちらかというと思わない」が2名(18%)、「思う」1名(9%)で「思わない」と答えた教師はいなかった。

男女別	女性		男性		総計	
思う	0	0%	1	9%	1	9%
どちらかというと思う	8	73%	0	0%	8	73%
どちらかというと思わない	1	9%	1	9%	2	18%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%

■女性 □男性

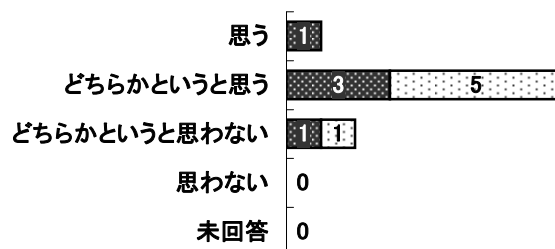


= 概要 =

男女別で見ると、女性のほとんどが「どちらかというと思う」(8名)を選択したのに対し、男性はその回答をしたものはおらず、「思う」1名、「どちらかというと思わない」1名という結果になった。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
思う	1	9%	0	0%	1	9%
どちらかというと思う	3	27%	5	45%	8	73%
どちらかというと思わない	1	9%	1	9%	2	18%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%

■担任 □家庭科



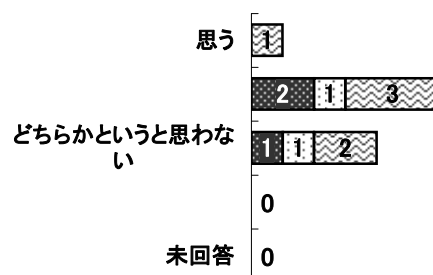
= 概要 =

担当科目別で見ると、担任も家庭科を受け持つ教師も、もっとも多いのは「どちらかというと思う」(担任3名/家庭科5名)であった。担任は「思う」1名、「どちらかというと思わない」1名という結果、家庭科を受け持つ教師は「思う」はおらず、「どちらかというと思わない」1名であった。

A-8. 国内で売られている食品は安全に管理されていると思いますか？

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
思う	0	0%	0	0%	1	9%	1	9%
どちらかというと思う	2	18%	1	9%	3	27%	6	55%
どちらかというと思わない	1	9%	1	9%	2	18%	4	36%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%

■担任/女性 □担任/男性 ▨家庭科

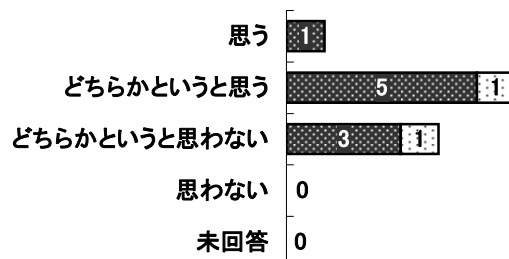


= 概要 =

もっとも多い回答は「どちらかというと思う」で6名(55%)、次いで「どちらかというと思わない」が4名(36%)、残り1人が「思う」と答えている。

男女別	女性		男性		総計	
思う	1	9%	0	0%	1	9%
どちらかというと思う	5	45%	1	9%	6	55%
どちらかというと思わない	3	27%	1	9%	4	36%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%

■女性 □男性

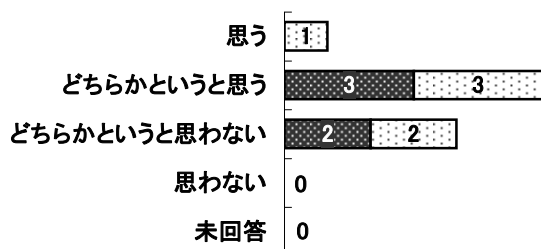


= 概要 =

男女別でみると女性もっとも多い回答は「どちらかというと思う」で5名(全体比45%)、次いで「どちらかというと思わない」が3名(全体比27%)、「思う」1人(全体比9%)と答えている。男性で「思う」と答えた人はおらず、「どちらかというと思う」「どちらかというと思わない」に各1名ずつ答えている。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
思う	0	0%	1	9%	1	9%
どちらかというと思う	3	27%	3	27%	6	55%
どちらかというと思わない	2	18%	2	18%	4	36%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%

■担任 □家庭科



= 概要 =

担当科目別においてはさほど意見に差はない結果となった。

A-9. 問8でそのように思われる理由は何ですか？

■ 『思う』を選択した理由

- ・ 我国は入国管理がしっかりしていると思う

■ 『どちらかと思う』を選択した理由

- ・ 安全性が守られるべきであり、そうでなければ市場に出せないと思う
- ・ 例えば果物の色が着色されたり、輸入の際に腐らせない為の薬につけたり等しているとニュースや新聞で知ったから
- ・ 一部安全管理が出来ていないものも報道を通じて世間に知られているが、基本的には安全管理システムを守った上で販売されているように思うから
- ・ 食品を扱う会社が安全管理に気を使っているから
- ・ 生産者の顔が見える食品が増える一方で食品偽装などの問題も後を絶たないので消費者としては不安があります
- ・ 日本は安全管理が出来ていると思い込んでいるから

■ 『どちらかと思わない』を選択した理由

- ・ やはり利益優先の面はあると感じている
- ・ ある産地の農家では、出荷用と自家用を分けている事から農薬の使用基準には本当に信用していいのかと思います
- ・ ニュースなどで産地偽装問題などが取り上げられるから
- ・ 安全に管理されているならニュースにならない

■ 『思わない』を選択した理由

(該当者無し)

= 概要 =

ほとんどの教師がA-8の選択理由として、ニュース等のマスメディアからの情報をソースとして記載している。
ニュースや新聞、インターネットといったメディアに、真偽問わずあらゆる情報が氾濫している為、
「本当に正しい情報」というものが埋もれてしまい、教師自身も誤った情報、過去の情報を
正しいと思い込んでしまっている可能性は高い。

A-10. 教育現場で活用する教材に求めることは何ですか？

- 視覚に訴え分かりやすい内容であること

- 信頼性のあるデータや身近な問題を取り上げている事、分かりやすい説明である事

- 視覚的に分かりやすい事、教科書の内容が基本なので話を詳しくしたい時は補助教材のような冊子があると
 自分が勉強する上で助かるが・・・
 子供達に具体的に伝えたい時は映像教材や写真・紙芝居のようなものがあると扱いやすく分かりやすいと思う

- リアリティのある映像、インパクトに残る映像、知識を活用して学べるゲームなど、子供の生活と結びつけて
 考えられるものが望ましい

- 教育内容に合致するもの（実物を見せにくい、準備しにくいものを視聴覚教材で示したいです）

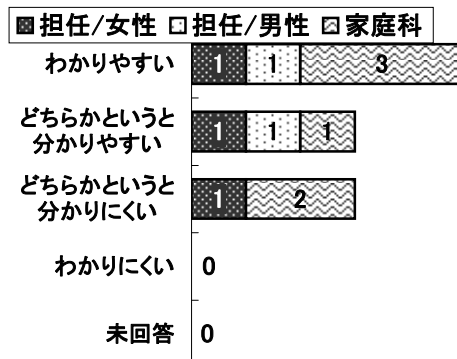
- 分かりやすさ

= 概要 =

コメントにあるように、「パツ！」と見て分かるものでないと、子供達に受け入れられないことを示したような意見、
 例えば「視覚に訴え分かりやすい」や「インパクトのある映像」が全般的に多いように思う。
 また、ゲームや紙芝居など、遊びや楽しみを通じて指導したい、という意見も見受けられる。

B-1. 食品安全性についての説明

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
わかりやすい	1	9%	1	9%	3	27%	5	45%
どちらかという 分かりやすい	1	9%	1	9%	1	9%	3	27%
どちらかという 分かりにくい	1	9%	0	0%	2	18%	3	27%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%

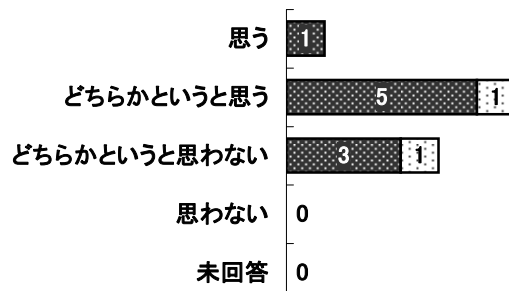


= 概要 =

一番多い回答は「わかりやすい」5名(45%)で次に「どちらかという分かりやすい」3人(27%)と「どちらかという分かりにくい」3名(27%)が同数であった。「わかりやすい」と「どちらかという分かりやすい」を合わせれば約7割の教師が説明に対して満足していると考えてよいと思われる。

男女別	女性		男性		総計	
わかりやすい	4	36%	1	9%	5	45%
どちらかという 分かりやすい	2	18%	1	9%	3	27%
どちらかという 分かりにくい	3	27%	0	0%	3	27%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%

■女性 □男性

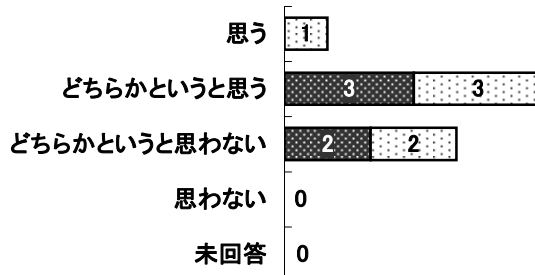


= 概要 =

男女別でみると比較的女性の方は意見が分かれており、「分かりやすい」と答えた教師が4人(36%)なのに対し、「どちらかという分かりにくい」と答えた教師も3人(27%)であった。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
わかりやすい	2	18%	3	27%	5	45%
どちらかという 分かりやすい	2	18%	1	9%	3	27%
どちらかという 分かりにくい	1	9%	2	18%	3	27%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%

■担任 □家庭科

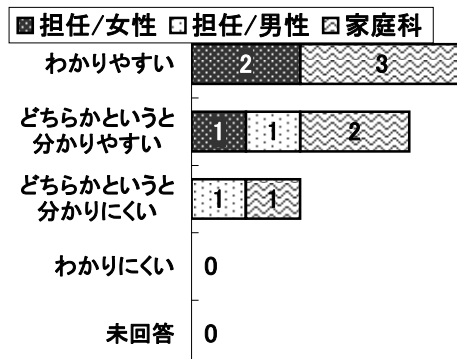


= 概要 =

担当科目別においては特に差はないと思われる。

B-2. 人が一生にわたって毎日摂取し続けても問題ないとされる量(ADI)についての説明

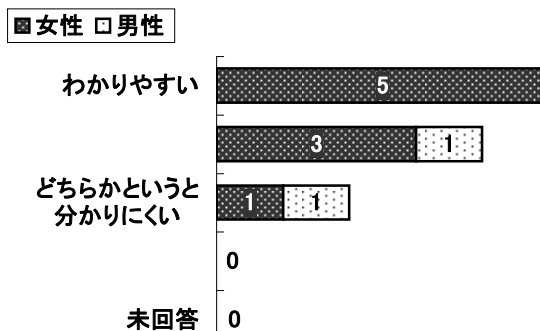
担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
わかりやすい	2	18%	0	0%	3	27%	5	45%
どちらかという 分かります	1	9%	1	9%	2	18%	4	36%
どちらかという 分かりにくい	0	0%	1	9%	1	9%	2	18%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%



= 概要 =

「わかりやすい」5人(45%)「どちらかという分かります」4(36%)を合算すれば、約8割の教師がADIIについての説明に満足していると思われる。

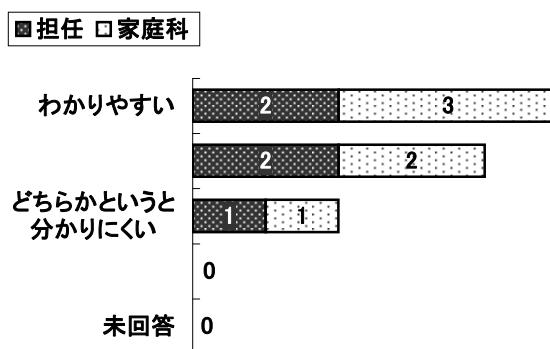
男女別	女性		男性		総計	
わかりやすい	5	45%	0	0%	5	45%
どちらかという 分かります	3	27%	1	9%	4	36%
どちらかという 分かりにくい	1	9%	1	9%	2	18%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%



= 概要 =

男女別でみると、「分かります」5人(45%)と答えた人は全員女性であった。

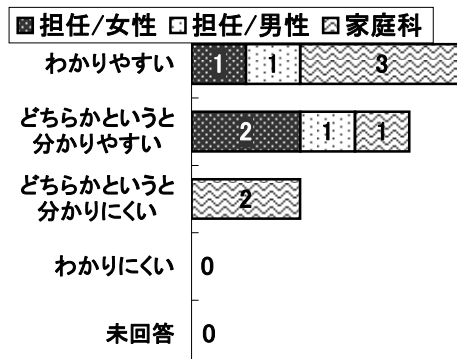
担当科目別	担任		家庭科		総計	
わかりやすい	2	18%	3	27%	5	45%
どちらかという 分かります	2	18%	2	18%	4	36%
どちらかという 分かりにくい	1	9%	1	9%	2	18%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%



= 概要 =

担当科目別においては特に差はないと思われる。

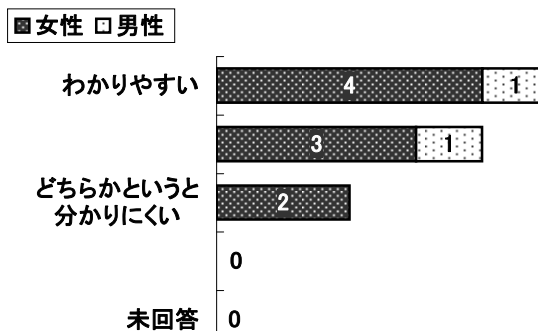
担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
わかりやすい	1	9%	1	9%	3	27%	5	45%
どちらかという 分かりやすい	2	18%	1	9%	1	9%	4	36%
どちらかという 分かりにくい	0	0%	0	0%	2	18%	2	18%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%



= 概要 =

「わかりやすい」5人(45%)「どちらかという分かりやすい」4(36%)を合算すれば、約8割の教師が残留農業についての説明に満足していると思われる。

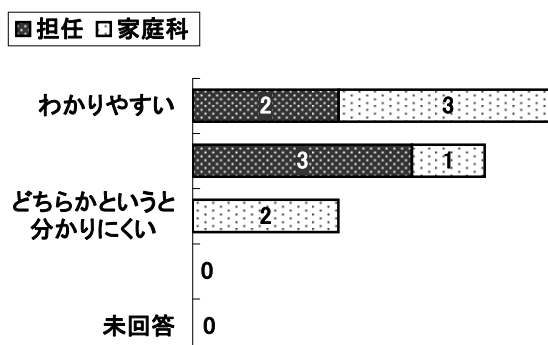
男女別	女性		男性		総計	
わかりやすい	4	36%	1	9%	5	45%
どちらかという 分かりやすい	3	27%	1	9%	4	36%
どちらかという 分かりにくい	2	18%	0	0%	2	18%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%



= 概要 =

男女別でみると、男性の方が比較的満足度が高い事が表から見て取れる。逆に女性は意見が分かれたように見える。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
わかりやすい	2	18%	3	27%	5	45%
どちらかという 分かりやすい	3	27%	1	9%	4	36%
どちらかという 分かりにくい	0	0%	2	18%	2	18%
わかりにくい	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%

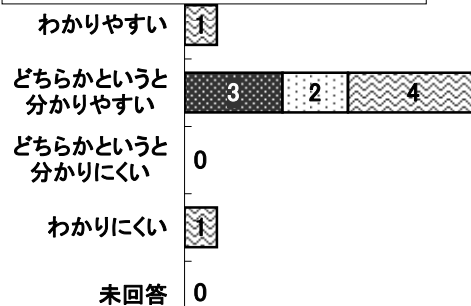


= 概要 =

担当科目別でみると、「わかりやすい」「どちらかという分かりやすい」という答えに関しては概ね差はないが「どちらかという分かりにくい」とした2名とも家庭科を担当している教師であった。

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
わかりやすい	0	0%	0	0%	1	9%	1	9%
どちらかという 分かります	3	27%	2	18%	4	36%	9	82%
どちらかという 分かりにくい	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
わかりにくい	0	0%	0	0%	1	9%	1	9%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%

■担任/女性 □担任/男性 ▨家庭科



= 概要 =

B-1～3までの回答傾向とは異なり、「わかりやすい」1人(9%)「どちらかという分かります」9(82%)、「わかりにくい」1名(9%)と回答が分かれる結果となったが、総体的な意見としては約9割の教師が食品安全委員会の役割についての説明に満足したと思われる。

男女別	女性		男性		総計	
わかりやすい	1	9%	0	0%	1	9%
どちらかという 分かります	7	64%	2	18%	9	82%
どちらかという 分かりにくい	0	0%	0	0%	0	0%
わかりにくい	1	9%	0	0%	1	9%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%

■女性 □男性

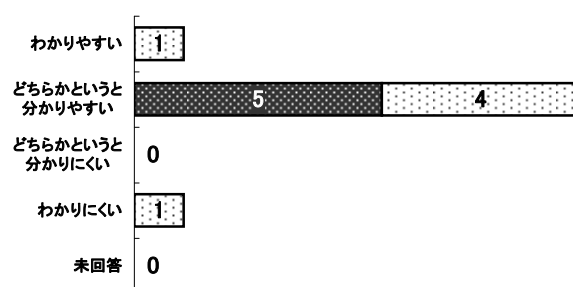


= 概要 =

男女別にみても概ね差はないが、「わかりにくい」と答えた1名は女性であった。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
わかりやすい	0	0%	1	9%	1	9%
どちらかという 分かります	5	45%	4	36%	9	82%
どちらかという 分かりにくい	0	0%	0	0%	0	0%
わかりにくい	0	0%	1	9%	1	9%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%

■担任 □家庭科

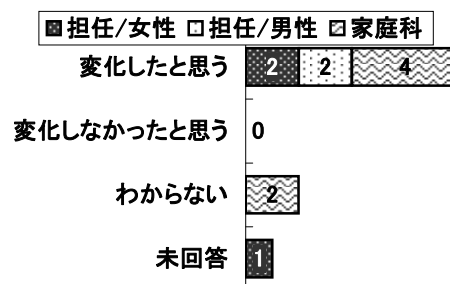


= 概要 =

担当科目別でみても概ね差はないが、「わかりにくい」と答えた1名は家庭科を受け持った教師であった。

B-5. アニメを見る前と見た後で児童に意識の変化は見られましたか？

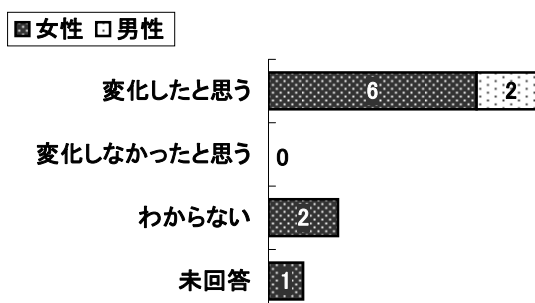
担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
変化したと思う	2	18%	2	18%	4	36%	8	73%
変化しなかったと思う	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
わからない	0	0%	0	0%	2	18%	2	18%
未回答	1	9%	0	0%	0	0%	1	9%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%



= 概要 =

「変化したと思う」と答えたのは8名(73%)で「変化しなかった」という回答はなかったが、「わからない」と答えた教師は2名であった。DVD視聴後アンケート記入ののち、例えば班毎に意見を出し合ったり、クラス全員で話し合う機会などを設けていれば、「わからない」「未回答」は防げた可能性はある。

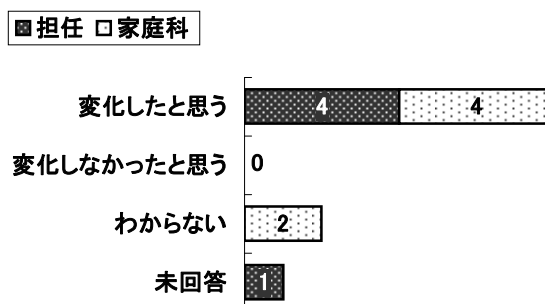
男女別	女性		男性		総計	
変化したと思う	6	55%	2	18%	8	73%
変化しなかったと思う	0	0%	0	0%	0	0%
わからない	2	18%	0	0%	2	18%
未回答	1	9%	0	0%	1	9%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%



= 概要 =

男性は全員「変化した」と感じ、女性のうち6名も「変化した」と答えている。逆に「わからない」「無回答」だったのは全員女性であった。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
変化したと思う	4	36%	4	36%	8	73%
変化しなかったと思う	0	0%	0	0%	0	0%
わからない	0	0%	2	18%	2	18%
未回答	1	9%	0	0%	1	9%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%



= 概要 =

「わからない」と答えたのは家庭科を受け持つ教師であった。また、「未回答」だったのは担任であった。

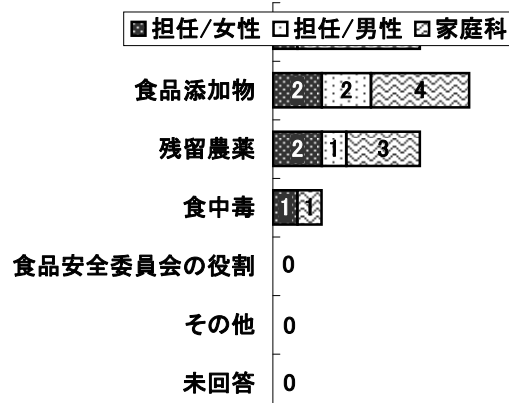
B-6. 今回のアニメの内容について、ご自身の考え方とギャップを感じたところがあればお書きください

- 複数の添加物を摂った場合や長期に渡って摂取し続けた場合の安全性が科学的に証明されているのかが
納得できませんでした
- 農薬を肯定しているように聞こえた
児童から中国産のは本当に大丈夫？など、本当に基準が守られているのかという疑問があった
- 『食品添加物や農薬は安全なのでどんな食品でも大丈夫』と勘違いしてしまう子が出てきそうで不安が残る
- 基準以下なら大丈夫という点を強く押しすぎな印象があります
- 無農薬栽培や保存料無し等、健康ブームとの関連についてもふれて欲しい

= 概要 =

大人であれば、過去の経験や知識から正しい情報を選択できるが、
まだ子供である段階では、極端な方向に間違っただけか、という意見が多いように思う。
その点は注意して教材は作成していく必要はあると思われる。

担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
ADI	1	5%	0	0%	5	23%	6	27%
食品添加物	2	9%	2	9%	4	18%	8	36%
残留農薬	2	9%	1	5%	3	14%	6	27%
食中毒	1	5%	0	0%	1	5%	2	9%
食品安全委員会の役割	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
その他	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	6	27%	3	14%	13	59%	22	100%

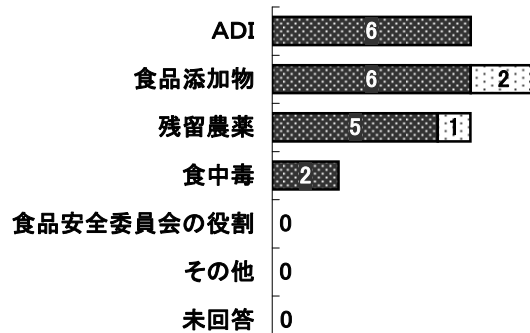


= 概要 =

もっとも多かったのは「食品添加物」で8人(36%)、次いで「ADI」と「残留濃度」が同数で6名(27%)、食中毒は2名(9%)で「食品安全委員会の役割」に関しては0人であった。

男女別	女性		男性		総計	
ADI	6	55%	0	0%	6	55%
食品添加物	6	55%	2	18%	8	73%
残留農薬	5	45%	1	9%	6	55%
食中毒	2	18%	0	0%	2	18%
食品安全委員会の役割	0	0%	0	0%	0	0%
その他	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	19	86%	3	14%	22	200%

■女性 □男性

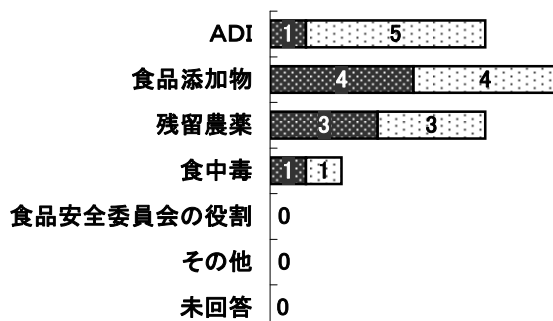


= 概要 =

男女別にみると女性がまんべんなく選択しているのに対し、男性は「食品添加物」と「残留農薬」の2点のみを選択した。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
ADI	1	9%	5	45%	6	55%
食品添加物	4	36%	4	36%	8	73%
残留農薬	3	27%	3	27%	6	55%
食中毒	1	9%	1	9%	2	18%
食品安全委員会の役割	0	0%	0	0%	0	0%
その他	0	0%	0	0%	0	0%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	41%	13	59%	22	200%

■担任 □家庭科

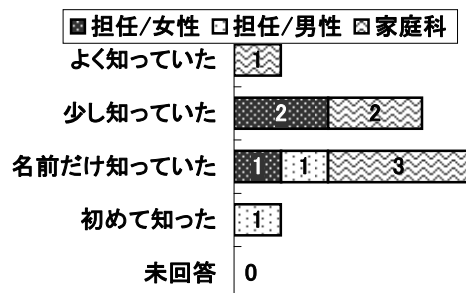


= 概要 =

担当科目別に見ると家庭科を担当している教師はまんべんなく選択をしており、担任は「食品添加物」「残留農薬」に選択が集中した。

B-8. 食品安全委員会の役割についてご存知でしたか？

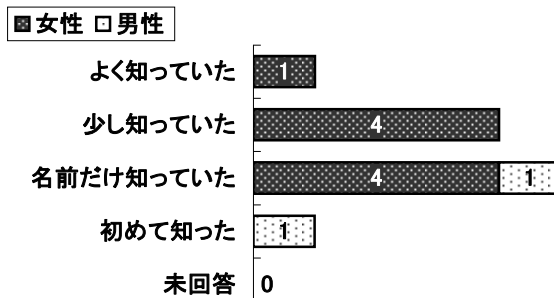
担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
よく知っていた	0	0%	0	0%	1	9%	1	9%
少し知っていた	2	18%	0	0%	2	18%	4	36%
名前だけ知っていた	1	9%	1	9%	3	27%	5	45%
初めて知った	0	0%	1	9%	0	0%	1	9%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%



= 概要 =

「名前だけ知っていた」5名(45%)、「少し知っていた」4名(36%)とほぼこの2つで全体の8割を占めた。「よく知っていた」「初めて知った」のはそれぞれ1名であった。

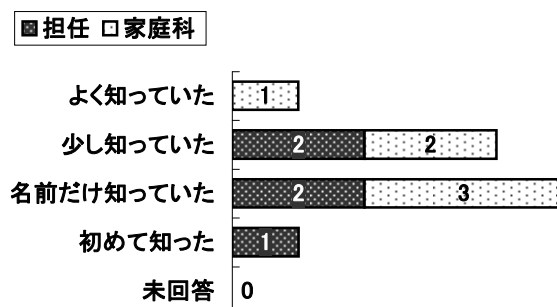
男女別	女性		男性		総計	
よく知っていた	1	9%	0	0%	1	9%
少し知っていた	4	36%	0	0%	4	36%
名前だけ知っていた	4	36%	1	9%	5	45%
初めて知った	0	0%	1	9%	1	9%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%



= 概要 =

男女別で見ると、女性は「知っている」傾向にあり、男性は「知らない」傾向であることが分かった。

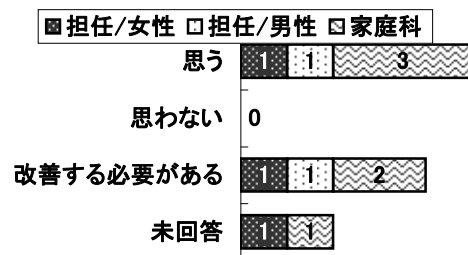
担当科目別	担任		家庭科		総計	
よく知っていた	0	0%	1	9%	1	9%
少し知っていた	2	18%	2	18%	4	36%
名前だけ知っていた	2	18%	3	27%	5	45%
初めて知った	1	9%	0	0%	1	9%
未回答	0	0%	0	0%	0	0%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%



= 概要 =

担当科目別でみるとほぼ同じ割合ではあるが、さすがに家庭科を受け持つ教師で「始めて知った」はおらず、「よく知っていた」と答えた教師が1名であった。担任では「よく知っていた」はおらず、「初めて知った」が1名であった。

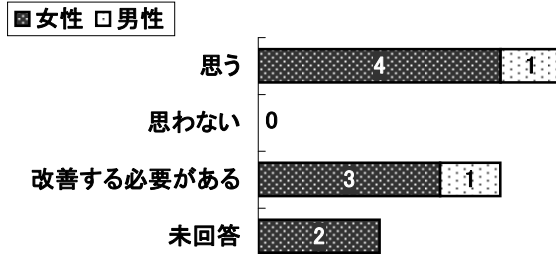
担当教科男女別	担任/女性		担任/男性		家庭科		総計	
思う	1	9%	1	9%	3	27%	5	45%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
改善する必要がある	1	9%	1	9%	2	18%	4	36%
未回答	1	9%	0	0%	1	9%	2	18%
合 計	3	27%	2	18%	6	55%	11	100%



= 概要 =

約半数が「思う」(そのまま使う事ができる)と答え、約半数が「改善する必要がある」と答えている。

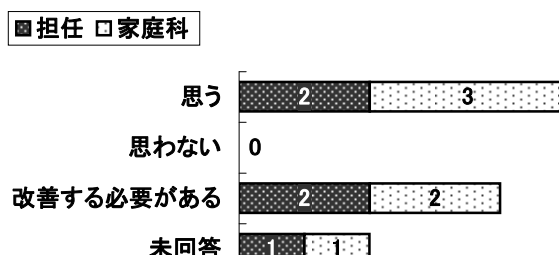
男女別	女性		男性		総計	
思う	4	36%	1	9%	5	45%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%
改善する必要がある	3	27%	1	9%	4	36%
未回答	2	18%	0	0%	2	18%
合 計	9	82%	2	18%	11	100%



= 概要 =

男女別においては概ね差はなかった。

担当科目別	担任		家庭科		総計	
思う	2	18%	3	27%	5	45%
思わない	0	0%	0	0%	0	0%
改善する必要がある	2	18%	2	18%	4	36%
未回答	1	9%	1	9%	2	18%
合 計	5	45%	6	55%	11	100%



= 概要 =

担当科目別においては概ね差はなかった。

- 食品安全委員会の仕事内容まで詳しく触れると逆に混乱する部分もあるように思えました(少し難しい)

- 言葉での説明が多く、子供達に分かり難い面があった
 スナック菓子やインスタント食品をたくさん食べても大丈夫なんだと誤解する子供があった

- 私自身、安全性(ADI)には疑問を感じています
 摂取しても問題なしと言っても、できるだけ気をつけて食品を求め、加工品の添加物の多さにはびっくりしています
 食品安全委員会の役割はよく分かりました

- 教師にはとても参考になる内容だと思った
 構内研修でも扱える内容だと思う
 授業で扱うとなるともう少し食品添加物の内容を多くした方が嬉しい
 ADI、食品安全委員会の役割は分かりやすかったが子供には難しい
 表(グラフ)も半数以上分からないのでは、と思った

- 食品安全委員会の役割など、もう少し具体的に実際の映像があれば良いかな、と思いました

- ADIや日本の基準の厳しさなどは非常に分かりやすかったですが、教師としては添加物(人工的な)を摂取するのを抑えようという指導がしたいので少しズレがあったように思いました

- ADIがたくさん出てきた
 食品の安全性について理解させる内容だが見方によっては無農薬栽培や食品添加物をしないように努めている方(盛んな地域)については気分を害する恐れあり

= 概要 =

他の科目との教育指導要綱との違いなどは、今後加味した上で啓発活動をしていかなければならないと思われる。